
夢いと書いて瑠璃と読む

麦茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢いと書いて瑠璃と読む

【Nコード】

N8374Q

【作者名】

麦茶

【あらすじ】

なにやらファンテウーヌとか言う国にとりつぶしてしまいました、今村瑠璃でございます。いきなり魔王様という名の美形魔導師様に某言は吐かれるは（邪魔者、消える等々）、超絶美形王子にウザいほど気にいられるわ。あー、だれか助けてーな日常を送っているどこか性格捻くれた瑠璃ちゃんがを送りするよくある異世界とりつぶすストーリー。はじまりはじまり。

【いち】異世界とりっぷ（前書き）

はじめまして又は、お久しぶりです。

何だか突然ふっと異世界モノが書きたくなったので、投下！

生温い目でお読み下されば重畳です。

2011・02・

12 麦茶

【いち】異世界とりっぷ

彼女は驚くほど突然にやってきた。

宝石の名を持つ彼女は、幼げな笑顔を皆に向けたのだという。皆は、その笑顔に惹かれた。

＋　＋　＋

「……お腹すいた」

まだ20にも満たないであろう少女が、ぶらぶらと短い足を揺らし、
て言った。

豪華な部屋である。

その中心に大きな、大きな、ベッドが一つ。

大の大人が5人で寝転がってもまだ余裕があるほどデカイな、と少女は思った。

少女は闇夜の様な漆黒の髪と瑠璃色の瞳を持っていた。

あふあ、と欠伸が出てくる。

目の前には、すりりとした美形男子……。それが睨みつけるようにこちらを見つめてくる。

あ、睨んでるわ。ようにじゃなくて。

「い飯は〜？」

通じる筈もないのにね。

どうやら、というか案の定、ここは“異世界”であるらしい。どんなお決まり設定だよ、と誰にもつつこめないこの辛さ。何せ私の最大の武器である“言葉”が発動出来ないのだから。

「つか……ここ、どこですか」

私が日本語を喋るたびに怪訝そうに警戒した顔になる美形。別に取って食う算段を立てている訳でもないのになあ。

そんな様子でさえも絵になっている。これだから美形は。

しかし一体、なぜ私がこんなお約束展開に巻き込まれているのか、近所で吠える5歳児以下の脳細胞しか持ちえない私にはさっぱり分からない。

「——、——？」

ぼーっと美形を眺めていると何か質問されたらしい。

嫌、わかりませんよ？

貴方の国の、世界の言葉なんて……。

分かりたくもありませんよ？

「なんでしょうか？無駄に美形さん？」

どうせ分からないのだからいいだろう？

このくらい……勝手に召喚だか何だかを人に施しておいてこの御出迎えの仕方。

人に対する態度がなっていないとは思いませんこと？

「その女」

……。

今のは誰の声でしょう？なぜ日本語が聞こえるのでしょうか？

目の前の美形も怪訝な顔をしていますか……？怪訝と言つより恐怖？

目の前、右、左。

誰もいないのですが？

「何故後ろを見ない？阿呆なのか？」

嗚呼、お母様。私は決してマザーコンプレックスになってしまった訳ではないのです、が。

私は幻聴が聞こえてきてしまったようです。ええ、そうですね。厳しい貴方なら“その程度のこと”で私に話しかけてきたの？お気楽ね”と一笑するでしょうね。

「――、――！」

目の前の美形が傳く。

私にはなく、私の後ろに居る人物に。さらさらの金髪がさらりと下に垂れる。いいなあ、私の硬質の黒髪と交換して欲しい。

ギギギ、油が足りない機械のように後ろを向く。

そして、私の中の全ての勇氣と理性をかき集め、

「どちら様でしょうか？」

――言えた。

私は魔王がいるのならこんな感じではないかな？と思う彼と対峙した。

目を閉じても伝わってくる迫力。

「ベリアル・リユンヌ」

心を探るような深紅の瞳。そして漆黒と灰色が混ざる異様な髪色。

「あ……私は今村瑠璃、です」

最初何を言われたのか分からなかった。しかしそれが彼の名なのだ、と思い至る。

暫くの間安心してその美しさに見惚れていたかった。でも、場の空気がもんが世の中にはあるじゃない。

私が名乗ると、彼——リユン又は秀麗な顔を歪めて、

「何用だ……」

と不機嫌そうに言う。

——は？

それはこっちのセリフなんですけどー？と軽いノリで言えたのならどんなに良かったかとか。

どう答えるべきか？何故日本語が話せるのか？

口を開かない私に気を悪くしたのか、なんなのか、彼は扉の方に向かって、

「——」

と短く私には分からない言葉何かを言った。

すると……、扉から超絶美形が出てきたのであった。

【いち】異世界とりっぷ（後書き）

お楽しみいただけただけでしょうか？
いきなりの加筆修正。

会話文と文章に間入れてみました L（、、L）♪

【に】下剋上フラゲ（前書き）

出来たてほわほわです。

【に】下剋上フラグ

私は、今村瑠璃。

今現在持つている装備は、スルースキル（スルーも何も何を言っているのか分からない）のみ。

“毒舌”は異世界トリップによって使えないぞ！との事です。ハイ。ご丁寧なご指摘ありがとうございます。

そしてそんなレベルよりも弱いんじゃない？的私が今いるのは魔王様のいるダンジョンでございます。

ああ、魔王様そんなに睨まないで？新しい趣味に目覚めてしまつかもしれないじゃない！

私が魔王様の視線に身もだえ……、怯えているところに、王子様は現れてしまった……現れて下さった。

「――？」

「お前は誰だ？」

「――・――」

「私はファンテウーヌ・リヒト」

矢継ぎ早に魔王様を通して言われる言葉。

そんなに焦らなくてもいいのに……どうせ、何処にも行かないのだから、行けないのだから。

「私は日本から来た今村瑠璃と申します。何故ここに来てしまったのかは貴方がたのほうがよくご存じのはずでは？」

「――」

くるりと王子さまだと思われる威厳を放っている御方に私の言葉を翻訳して告げる魔王様。

その答えに怪訝そうな顔になりながらも笑顔を絶やさず私に話しかけてくる王子さま。

ああ、魔王様にこんなことをさせて天罰やら懲罰やらが下らないの
だろうか？大丈夫か、レベル以下勇者瑠璃よ。

「魔お……リユン又様、私奴わたくしめに説明して頂けませんでしょうか？」

【レベル以下勇者、瑠璃は“謙へりくだるる”を覚えた。レベルが0・1上がった】

「この国はファンテウーヌ、お前は我が召喚したわけでもないのにやってきた邪魔者だ」

わああ、さっすが魔王様。

初対面でも躊躇なく相手を見下している！しかもそれが自然体だよ！魔王様。

「了承いたしました、ではこの国、ファンテウーヌでの私奴の今後の立場をお教え下さい」

魔王様は大変、渋い顔をしながらも、

「王子はお前のことを気に入ったらしい、遺憾だがお前の立場は私の弟子、つまり下僕だ」

さも当然。いや置いてもらうだけ感謝しろと言う口調で魔王様は言う。

「分かりましたご主人様、疑問提起…何故日本語を操れるのですか？」

私がプライドを捨て、早くも自分を主人と認めたことに少なからず驚きを覚えているらしい魔王様。

プライドなんて生まれてこのかた持ったこと何てこれっぽっちもありません事よ？

しかし、これからどうしようか？都合のいい事に王子様はどうや私に興味を持っているらしい。なら……

ここは何も分からずに悲しいのに精いっぱい涙を見せずに頑張る健気な少女でも演じておきましょう？

そしてこの国で生活出来るだけの支援を乞い、あわよくば日本帰還の方法でも探ってもらいましょう。

ああ、でも王子が私を帰したくない、といった場合、魔王様をお願いしてみようか。

彼は、私が自分と同じ空気を吸っているのでさえも嫌がるような気がする。

というか、この国、この世界に気体という概念は存在するのだろうか？

当たり前のように息を吸っていたが……、まあ、そんな事を考えてもしようがない！ガンバ、私。

「……お、……い、おい！聞いているのか？」

首に走る痛み。

どうやら私は魔王様に首を絞められているらしい。

ああ、堪らないわ。このSっぶり。ぞくぞくしちゃう！

ああ、私はこう見えてもMではないのですよ？ただ、苦しい、恥ずかしいといった感覚に対し、快楽を感じる人格なだけです。そこまで重症なイタイ人間ではないのです。

美しく、冷たい魔王様の手。方手一本で私を持ち上げてしまわれるなんて……ぞくぞくする。

でも、私は何も分からずに悲しいのに精いっぱい涙を見せず以下略を演じなければならぬので目じりに涙を浮かべ恐怖の眼差しを魔王様に、SOSの眼差しを王子様に向けた。

それを見て、王子様が、笑顔を忘れて、

「――！」

と強く叫んだ。ふふ、単純な人で助かる。

魔王様は、チツと舌打ちをし（様になっている）私の首から手を離れた。

すうーっと、新鮮な空気を吸い込む。それから、魔王様に聞こえる音量で、

「……お仕置き、です」

と、微笑みをたたえて言って差し上げた。

いくら魔王様と言えど少女の首を絞めるなんてマナー違反です。

ということ、王子と魔王様の位置関係は良く分からなかったけれど、15歳にしては小柄な体系を生かして王子様に泣きながら飛びついて行った。まあ、最初の出だしはこんなものでいいのではないのですか？作者。

「！」

王子は驚いていたようだったが、私が必死に王子の服を掴みしわくちやにしていまい、それに気づき謝罪した謙虚な少女を演じ、魔王様を恐怖の眼差しで見てがたがた震えだしたところで、王子は鋭い視線を魔王様に投げかけた。

王子の瞳は、若葉のような色。その色が針葉樹のように魔王様に突き刺さる。

あれ？意外に怖い人？

王子「――」

魔「――」

王子「――！」

魔「……」

会話の後。

おおっ！なんと、魔王様が頭を下げ、私に謝罪なされた。

「すまなかった、女に手を挙げた事を謝ろう……赦してくれるか？」

とまあ、下剋上フラグかしらん……？

「だが断る！……わけがありません、ご主人様。私はご主人様の所有物ですのでそのような謝罪はなさらなくてよろしいのです」

と、言ってあげる。

「そなた、……仕置きと言ったな……あれはどういう事だ？」

と問われたが、持ち前のスルースキルでやり過ごした。

【に】下剋上フラゲ（後書き）

読んで頂きましてありがとうございます。
加筆修正致しました。2・12

【さん】異世界での生活

あ、こんにちは。

魔王様もといリュン又様の下僕やってます。今村瑠璃いまじりるじ 15歳です。

この世界はグラル。

その一番大きな大陸を支配しているのがこの国ファンテウー又なの
だとか……。

立派な大国ですね！玉の輿狙えるかもですね！

そうそう、王子リヒト様は顔はいいので婚約の催促が絶えないのだ
とか……。

職務をしているところを全く見たことがないので、本当に王子か？
とも思ってしまうが……。

陛下はきちんとした方だったのでこの国はとりあえずあと数年は安
泰だろう。

と、私はもらったためっちゃ布やん！これ！というこの世界の紙“ク
フ”に書き記している。だって忘れちゃいそうなんだもの。一応、
リュン又様の下僕と言う名の弟子をしているので違う大陸から来た
魔導師志望の娘と言うことになっているから、常識は覚えておかな
ければ！因みにこの国では黒い髪と言うのは存外珍しいものらしい
が、違う大陸の娘ならオーケー牧場って事で！と宰相様に流されま
した。この人のスルースキルは半端ない！と書いている間にも私の
肩から落っこちそうな、着せられたお洋服。

うゝむ。はつきり言って日本のファッションと大差ない！チューブ
トップ（黒）に膝くらいの腰がきゅっとなったブリーツスカートみ
たいなのですね。そこになんと！シヨールです。ポンチョっぽい物
でも可。しかもふわふわ、落ちそう！なんでもこの国は腕を狙われ
る貴族が多いらしいです。……どんな国だよ。

あー、食事は珍妙です。とーても。

なんか、すべてが水っぱい。透明できらきらしてる。コンソメスー

ブ的な？

主食はパンっぽいもの。名前は“クウ”らしい。ご主人様から教えてもらった。

あとは、果物！これは美味！マジ美味！ドリアンっぽいものデーンと来たから嗚呼、無情。とかおもったけれど中から出てきたのは……果物詰め合わせみたいなものでして、ゼリーのような触感のものもあれば、お餅のようなもの、各種取りそろえてあった。ま、まあ中には七色に輝いているものもあつたけれどね？

そこは……まあ、ね？

「何をしている？」

「ぎょわくえっ！」

「……」

「あ、これはですね……この世界の常識は私の母国の言葉でですね

……」

「……」

どうしたのかしら？ご主人様の深紅の瞳が半分しか開いていない。

心なしか顔も赤い。酒か……？

「……ご主人様？」

「……寝る」

「へ、あ、はい……おやすみなさい」

寝ると言った割には私の後ろから動かない。

長身な背をかがめて私が書いている文字をじっと見つめていらっしやる。

ああ、麗しい。

「借りるぞ……」

——は？

ああ、シヨールのことですか？どうぞどうぞ。絶対、“お前の使ったモノなど触りたくもない”とか言いそうなのに……。

「へ……ちょ！待てい！」

……普通おにやのこを抱っこする時って、お姫様だつこと相場が決まってるわよね？

なのに何故、担ぐのですか？頭に血が昇って大変です。ぞくつと……いえいえ、失言でした。

——というか。何故私？

「あい あむ のっと でりしやす！」

拙いひらがな英語を総動員して一生懸命“美味しくないよ？”と魔王様に伝える。

「……美味しそудぞ、瑠璃は……」

——！！！！！！

何故私の翻訳不可能なひらがな英語を解読できたのですか！？

というより、なんで英語が分かるんだ……！

ズルイ！ズルすぎる！頭良くて顔良くて……あとは正確どうにかすればOKね！

ああああ！てふてふが飛びまわっているわ！なんてきれいなんでしょう！まあ、透けるような羽ですこと。って頑張れ今村瑠璃！現実逃避はいけないよ！

「……ご主人様……酔ってます？」

「……黙れ」

あゝ、酔いとは違う意味で顔が赤い。

これは、酔いが醒めて今自分がしていることに戻るに戻れなくなつた、ということかな？

「っ……寝る」

「はい。おやすみなさい、魔お……ご主人様」

……ごめんなさい。お母様。私は節操がない尻軽ではないのです。決して。

ただ、魔王様のプライドを下僕として守るという使命感からの行動なのです。

決して、魔王様の抱き枕として一夜を共に出来るな！よっしゃあ。とか思っているわけではないのです。

ああ、幸せ♪

ご主人様の腕の中は至福の一時でした。

ご主人様は逢った時から華奢だと思っていましたが、事実そうでした。

あ、あと。低体温。ときどき居心地悪そうに抱きかかえ直すのも、ぐっしょぶ！

乙女心をくすぐります。

次の日、起きるとご主人様はいませんでした、が。

次会う時が楽しみでたまりません。キヒヒ。

【さん】異世界での生活（後書き）

何この子！とか言って引かないでやって下さいまし！

この子はただちよつとばかり欲望に忠実なだけなのです。

って全然異世界での生活について書いて書けてませんね？

【よん】そっだ、町へいこう！1 / 2

あ、こんにちは。

魔王様もといリユンヌ様の下僕やってます。今村瑠璃いまむらり 15歳です。
そんなこんなで、アレから3日……。

言語問題がリユンヌ様のパナイ魔力とやらで一掃された後。

「ルリ、元気」

王子様がウザくてたまらない。いやね、死ねとか思うほどではないんですよ？

ただ、私の視界に入らないでほしいな と思う程度なのですが……。リユンヌ様、助けて……。そんな哀れ視線垂れ流しな私をよそにリユンヌ様は今日も御目麗しく、書物を読んでいらつしやいます。私は一応リユンヌ様のお部屋の隅っこでの生活を許されています。

最初リヒト様が、“俺の部屋のほうがいくくない？”と戯言を吐きやがったので全力で拒否という名の謙虚な態度で辞退をさせていただきました。

だって……あの人と一日中いると思うだけで虫唾が走る。

想像してみたら——仮死状態になった。嫌、マジで。

だから私はこの生活には十分満足しています。なのに……っ！なのに……。

「何か不満はない？大丈夫？ちゃんと食べてる？」

と毎日毎日毎日、ああああああ！うぜー、なんだ一種の嫌がらせか？

なぜ、君の部屋から1キロは離れているリユンヌ様の“黎明の部屋”まで足をせつせと毎日運ぶ。

仕事しろ、仕事ー。張つ倒してー。どうしてくれようか？独りもんもんと考えていると……、

「あー！いいこと思いついた」

なんだ、なにを思いついた。これ以上私の繊細な神経を擦り減らすような真似はするな。

死んでもするな、てか死【自主規制】。

「なんでしよう？リヒト様」

心の中の狼を隠して、私は聞く。

こいつの心を私でいっぱいにする為に私は努力を惜しまない。

たとえば、毎晩枕を涙で濡らしながらも次の日は笑う（勿論枕の件は侍女から王子へと報告される）。とか、時々寂しそうな微笑みを入れる、だとか、そのあと誤魔化すように笑いまくる、だとか。

私は、涙ぐましい努力をしているのである。

でも、そろそろ限界でーす。超絶美形に囲まれて日々自己嫌悪に陥り、そしてその超絶美形とことんウザいの相手をしなければならいなんて！まだバオバブ生い茂るジャングルにでも放り出された方が良かった。

「そうだ、町へいこうー！」

嗚呼、誰か私に安息を……。

リユンヌ様も見えてないで助けて――…。

＋　＋　＋

こゝ。

今村瑠璃、王子様の遊び相手やってあげてます。

だいたい20にもなつて、遊び相手必要つてどこのおちゃまですか？ぷぷー。

嗚呼、リユン又様の方が王になるべき御方のような気がするわ。

こんな事思つてゐるって知れたら侮辱罪で、王の右腕兼王子の御世話係の魔導師リユン又様に瞬殺で骨も残らないんだろーな。あ、でもいいかも知んない。

そんなこんなで、町です。

活気にあふれてます。私人ごみ嫌いです。この国の人たちみんな背え高すぎです。

マジありえねーっす。

「ルリ、なにか欲しいものあるか？」

あーああ、これだから男は。

自己満足浸つて楽しいですかね？

自分より弱いもん見て、施して優越感満たされますかね？

と、そんな事はおくびにも出さずに無邪気に微笑んで、

「なーんにもないです！」

とただ外に出れば幸せ♪みたいな雰囲気醸し出す。

そうか、ルリは欲がないなあ、と呟く王子。

嫌、欲なら溢れかえつて自分が溺死するくらい余ってますよ？

ただためーの施しはもう受けたくねえつつつてんだよ、ボケかすがっ。

おおつと少し下品でした、自嘲します。え、ということ——帰りた。

右には超絶美形のリヒト様。左にははたまた美形のリユン又様。人々の視線は貧相で平凡な娘へと突き刺さる。

“なんでお前みたいな餓鬼がお二人と肩を並べている”

“ あんた、場違いだつて分かんないの？ ”

おお、おお。

人のじえらしーは恐ろしいのー。

しっかし、こいつら……変装くらいしろや。

確かに、後ろから護衛と言う名の不審者が7人ほどついてきておりますけれど！

ああ、嫌だ、嫌だ。しかし左側を見れば私のエンジンリユンヌ様が視界に入る。

「ご主人様は何かお勧めのお店、ないのでしょうか？」

控えめに言葉を紡ぐと、細められた深紅の瞳だけが私の方を向く。

……………。

「黙れ」

えー！待って一言！？それだけ！？ご主人様あゝ。

「気味の悪い目で見てくれるな、気持ち悪いぞ、瑠璃」

あ、名前で呼んでくれた。

この国の人たちは私の名前を正確に呼んでくれない。

でも、ご主人様は正確にそりやもう日本人顔負けの流暢な日本語で“瑠璃”と言ってくれる。

「ふふ」

「何が可笑しい……」

「いえ、申し訳ございません……」

私が安らぎのひと時を味わっていたら……、

「俺も混ぜて〜」

と、につこにつこしながら入ってきやがった超絶美形。

「あ、ごめんなさいっ」

今気づいたよ、いたんだね。

まだ死なずに頑張ってたんだね。王子。

「あっち行こー」

と、王子は私の腕を取って歩き出す。

人々の視線が痛いじゃないか。それに、ご主人様から掛けて頂いた言語魔法はご主人様から10m離れると消えるんだぞ。なんでも、頑張ればもっとテリトリー伸ばせるけど疲れるからN°。この事です。かつこっつい〜。

とか言っている間にも、王子リヒトが連れてきたくれた場所は、

“———”
よ、読めない。

「———?」

いつの間にか王子リヒト様の言っていることも分からなくなってしまった！

「……」

ちらりとリユンヌ様の方を見ると……、なんと！
リユンヌ様が知らない女と話していらっしやる。

「――、」
「――？」

あつ、胸がリユン又様の腕に当たって……！

誰、誰なのですか？

リユン又様。

醜い感情で胸がいっぱいになる。嫌になるわ。このココロには。
気づけば、自分の爪で腕を引っ掻いていた。これは私が自分を抑えるためにやる行為。

最近つめ切つてなかったから結構痛いですね。

「っ……！」

うわ。やりすぎちゃいましたっ、てへ　みると、つつつと三本の紅い線が入っている。全治一ヶ月つてとこですか？と紅い線の入った腕を他人事のように眺めているとリユン又様がふ、とこちらを向いた。それから、目を見張って歩きだした。

――こちらに向かつて。

【こ】 そうだ、町に行こう！2/2（前書き）

どもども、麦茶です（ゝ・ω・ゝ）

なんと、今日見たらお気に入り登録件数が11件になっておりまして、へへ。嬉しいや、嬉しいや。天に昇れそうでございます。ハイ。

コホン。お気に入り登録して下さった皆さまありがとうございます。

【こ】 そうだ、町に行こう！ 2 / 2

——へ？

何故こちらにやって来るし……。一緒に話していた女も怪訝な顔しているよ？

いや、まあね。その女より私を選んでくれた事は無茶苦茶、嬉しい事なのですが。

「ご主人様？ どうなさったのですか？」

私が尋ねても……無言。

え？ 私、何か地雷踏んじましたか？とか何とか想定できる全ての原因を探ってみました所……ああ、

「ご主人様の所有物を傷付けてしまい申し訳ありません」

私はご主人様の所有物。

勝手に傷付ける事もご主人様のカンに障るのだろう。
ハゲるぞ、神経質は。

……。……？

あ、れ？

きつちり90度曲がってますよね？私の腰！

なのに何故、反応がない！

カッン、カッン。と言う静かな足音だけが賑やかな筈の町に響き渡る。

——魔王君臨。

その場にいた誰もが自分のHPメーターが赤くなるのを感じていた。

「お前……」

魔王様は日本語で私に話しかけている。ということは、魔王様が術を掛けなければ誰にもこの会話は分からない。

待つこと数分。

「……………え？」

いや、なあに？これ、なあに？どーゆう展開！？
変なフラグたつてね！？

我等が魔王様は、何と……私の血が滴る細っこい腕をとり……そこまでは想定内↑（なんとか

……だがしかし！

我等が魔王様は——舐めた。

何を↓腕を。

誰の↓主人公の。

どこで↓町で。

どうして↓あい どんと のー。

……………ざわ……………ざわ……………。

皆の視線が氷の矢の様に突き刺さる。

その間も、リユンヌ様は私の腕の血を舐める。

冷たくて、くすぐったい。

頭が火照って何も考えられない。日だまりの様な気持ち良さに身を任せていると、突如、痛みが襲った。

「……………」

見るとリユン又様は、傷口を舌で持って広げていた。
ええ。普通のオトナはそんなこと致しません。断じて致しません！
しかし相手は我等が魔王。普通のオトナの様な真似をするとは思いません。

「あう……っ」

私が痛みに見を引くとガシリと腕を捕まりました。
痛みに耐えること数分。

だんだんと気持ち良くなってきた訳ではありませんが（本当ですよ？）、諦めて目をつぶっていました。もちろん大衆の皆さんの目の前で。誰もリユン又様の行動に目が離せなかったのです。

暫くすると痛みが引いてきました。そつ、と目を開けると驚くほど目の前に深紅の瞳がありました。目を見開く私の前髪を長くしなやかな指で梳くと、

「これは……お返し、だ」

と涼やかな声でおっしゃられたのでございます。

ああ、まだ根に持っていたいらしたの？王子に怒られ、私ごときに謝罪してしまったこと。

ハゲるぞ。根に持つ奴は。

と、愚痴を言いたかったのだが……、その時のリユン又様の顔や仕草が余りにも優しく、綺麗で、儂げで、泣きそうで……。
つい、

「はい……『ごめんなさい』」

と、言ってしまったことが私の敗因。

口で負けたことない私が負けてしまうとは！恐るべき美形。
でも、なんだったのでしょうか？

あの顔、あの眼差し。魔王様から考えられない甘い顔をしていて。
あの顔で見つめられたら世界中の女ども（男、その他 生命体）が
堕ちるだろうと思います。いや、そんなことしなくても堕ちてくれ
るだろうけど。

私が、謝るとふわりと笑ってちゅ、と腕に吸いついて腕を離してく
ださいでしたが、下から伺い見たその顔に甘さなんて欠片も残って
なかったのですけど……。

「行くぞ」

そう言ったりリンヌ様は、少し、ほんの少しだけど……嬉しそうだ
ったので。

この4日間一緒に居て、いつもその深紅の目には倦怠と諦めにも似
た気持ちがうずまいているように見えたから。

それが……ちよつとでも私をイジメルことで取り払われたなら少し、
とっても不本意だけいいなっと思ってしまったということです。

これが、私の町デビューでした。

【ろく】魔法Ⅱ魔王（前書き）

お気に入り登録などめっちゃ嬉しいです！
ありがとうございます！

【ろく】魔法Ⅱ魔王

ご機嫌いかがですか？皆さま。

私　今村瑠璃15歳はすこぶる元気です。馬鹿王子に無理やり連れてこられた町デビューから1日が過ぎました。馬鹿王子は視察に行くとかで数日間帰ってきません。ひゃっほーい！……。

さて、今日は“魔法”についてお話ししようかと思います。

“魔法”と一口に言ってもいろいろありますが……。

今回は、今リユン又様に教えてもらっている“言語魔法”をご紹介します。

“言語魔法”は、私が今掛けてもらっているものですね。違う異文化とも即座に交流できる便利なものです。

ドラ。もんです。ほぼ。ほんやく。ンニヤクみたいなものだと考えて頂ければよいです。

これは、自身に掛けるのは理論構築が簡単なので初級魔法に分類されるのですが、他人に掛けるのは困難とされている魔法なのだそうで……。それが出来るリユン又様はやっぱ王直属魔導師だなぁ、と思ってしまうたり。

でも、これは掛けている術者には負荷が結構かかるのだとか。

それはリユン又様も同じなようですのでやはり大変疲れるものなのだと……。それを聞いて私は一目散にリユン又様のもとに飛んでいき、裾をぎゅむ、と掴んでお願いしました。

「私に“言語魔法”を教えてください！」

少しでもリユン又様の負担を失くしたくて。

すると、リユン又様は面食らったようでしたが何も言わずに立ち去ってしまいました。

やっぱり駄目だったか……と、思いましたが、暫くすると私のもと…… 正確に言くと私の真上に…… 本が落ちてきました。
広辞苑より分厚い本でした。それが、なんの嫌がらせか角が突き刺さるような方向で無数にばらばらと落ちてきやがったのでした。うぜー。

でも、その本の背表紙を見て私はおどいたのでございます。

【魔法初級】 【魔法のススメ】 【理論構築〜基本編〜】 などなど……、ああ、これはきつとりユニク様からだ。と憤っていた記憶など遠い彼方に押しやって、黙々と勉強を始めたのでした。当初の狙いの帰る方法も分かるかもしれません。

この世界の魔法はほぼ基本となる魔法円があるのですが…… やはり私もそれを書く作業からスタート致しました。もちろんこの世界にはコンパスもなければ定規ありません。あー、嫌だ嫌だ。

さて、そろそろ魔法円の練習の時間なので、今日はこれくらいで終わりにしておきましょう。

＋＋＋

あいつはイレギュラーだ。

私の、過去を揺さぶって止まない。

つい“――”と被る。あいつと“――”は似ても似つかぬはずなのに……。

いつまでも過去に囚われる私は愚かだ。

あいつはもう私の世界に居ない。もう諦めた、昔のただ一人心を許せた少女。

嗚呼、あいつがいなくなったのは私のせいなのか？

だれか…… だれか、教えて――…。

日も沈みかけた“黎明の部屋”。

一見、美女にも見えるその男——ベリアル・リユンヌ。

この世界でも片手に数えられるほどの魔術の才を持ち得ながら、その力を使わないもの。

彼が渴望するモノは“愛情”なのかもしれない。

＋＋＋

私は今日も、リユンヌ様の元に分からない所を質問しに“黎明の部屋”から“黎明の部屋”まで走りました。え？何故、同じ部屋なのに、走るのかって？馬鹿作者……脳を作り直してきてもらいましょうね。あ、そうそう、で何故そうなのかというとめちやくちや広いから、です。めちやくちや広い、んです。大事な事なので二度言いましたよ？

しかも、リユンヌ様は何処に居るか分からないので幾つにも分裂しているので本当に分かりにくいのです。嫌がらせだとは思えませんが。

「はっあ……はあ……」

どこにいますか？

リユンヌ様？

【なな】—アル—（前書き）

大変遅くなってしまいごめんなさい！

ただ世の中にはテストと言う地獄の三文字があることを忘れてはなりません！なんと、わたくし！2位から66位への人生最大の汚点を晒してしまいました……親に叱られPCを取り上げられそうです！嫌だあ、骸さんとかミクとか……封印したくねー、とごめんなさい。ということでもものっそい遅れることがあるかもしれません！本当にごめんなさい……。

【なな】—アル—

む？

皆のもの、おはよう！ってな感じでお早い御目覚めですね？

え？こんなに早い時間に記録魔法の魔法円盗み出して何を記録しているか教えてくれ？

ふふ……まだお子様には早い事をしているのですよ？

リユン又様っああっ！どうしてそんなにエロい吐息をつっ！あうっ、わたくしはっわたくしはっ！

もう、ずっと寝ていてくれればいいのに……。むむ？起きだす気配が……。致し方あるまい……。記録は一時中断だ。ではの！
そう言って彼女は、疾風の如く去っていったのでした、まる

リユン又様の朝は早い。

大抵、5時前には起きて何かをしていらっしやる。

リユン又様は王宮お抱えの魔導師だけれど魔法を使った瞬間を私は見たことがない。

まあ、私には魔法をかけていますけど……。

「リユン又様」

ある日のことです。

私がいつものように、名前を呼ぶと……

「……アル……で良い……」

小さい呟き。

物事をはっきり、きっぱり言うリユン又様には不似合いです。

ですから良く聞こえなかったのでございます。

「すみません、リユン又様…何ですか？」

私がそう聞くと、珍しく顔を真っ赤にさせて、

「……アルと呼べ！ 命令だ！」

と、強く言ったのでした。

私は下僕ですから、特に異論はありませんので、

「はい、……ア、ル様？」

呼びなれませんが、なんだかほんのちょっと近づけたようでうれしかったです。

そのあともとくに用事がないのに、

「アル様、アル様」

と呼びまくっていました。

馬鹿王子は気に食いませんが、アル様は大好きです。

ああ、“あちら”にもこの様な人がいたのなら私はココロを失わずに済んだのでしょうか？

「リヒト様がお帰りになられたぞ！」

「今回の視察は早く終わったな」

「あの娘にご執心だからな……」

人々は、囁き合う。

殿下は、ベリアルの弟子に執心だと。

皆は、不満に思った。

なぜ、姫が居るのに関わらず、あんな小娘に構うのか。

姫はあんなに美しく、弱々しいのに。あんなに非道な事をしてとつた姫君だというのに、と。

ああ、帰ってきてしまった。

私とアル様の時間を出来うる限り割いて回る極悪王子が。

なぜ、こんなに早く帰ってくるのです！そう心の中で毒を吐きます。リヒト様の好みは、控え目だけれど自分を包み込んで、分かってくれる娘、がタイプみたいです。15年間好みの性格を演じ続けていたので、当たっているとは思いますが……。

といけない、いけない。つつい演じている娘の性格が地になってしまう。

思うのですが……とかwどこの控えめ。

でも私にはもう……自我すらないのかもしれませんが。

【はち】怒り

偽ることを止めれば、もう疲れないでしょうか？
その代償は、大きすぎる。
私はもっとアイサレタイ。

＋
＋
＋

「おかえりなさいませ、リヒト様」

しとやかに。

「うん、ただいまルリ」

可愛らしく。

嫌われないように。

例え、自分が消えてしまっても演じ続けなければ。
捨てられるのは……嫌だ。

「何かあった？」

ことり、と首を傾げて、

「うん……あ！」

飽くまで無邪気に、笑って。

顔を輝かせて、

「リユン又様が“アル”と呼んでいい、と」

私が、そう言うとりヒト様は笑顔を凍りつかせて

「そう……」

と、静かな声で言った。

あら？地雷踏んだ？踏んじまりましたか？ 私……。あ、ヤバい、ミスった。

今村瑠璃さん、15年間で一番冷や汗をかいております。

超然美形は怒ると怖い、のです。

そして何とも間の悪い所にアル様が部屋に入ってきました。
わああ、修羅場な雰囲気。

「あと一歩でも俺から離れると魔法が切れるぞ」

ああ、そういうことですか……。

せめてこの空気の一分前位に来てくだされば……！
僅かな沈黙の後、

「アル、と呼ばせてるの」

問い掛け、なのでしょうが？

リヒト様は、独り言のようにアル様に問い掛けます。

「それが何か？」

前から思っていたけれど、この2人仲悪すぎませんか？

「……いや、もう……癒えたのか、と」

大変言いにくそうにリヒト様はおっしゃいます。

——癒えたのか？

「本当に……そう、おっしゃいますか、殿下」

ぴしゃりと冷水を浴びた時のような寒気が私を襲った。

「……！」

目を苦しげに瞑るリヒト様。

この二人には何があったのですか？

私はこのとき、ああ言うべきでは無かった。

だって私は本当の気持ちじゃなかったのですから。

私にはとくに自分の意見や考えなど持ち得なかったのですから。
だから、

「ア、アル様もリヒト様も……アル様、“らしく”ありませんよ？

リヒト様も相手の気持ちを考えて……」

こんな残酷な事が言えたのだと思います。

だって知らなかった——……。

「“らしい”だと——？」

アル様が一気に殺気立ったのが分かった。

私は知らなかった。

彼にとって過度な期待を抱かれる事が苦痛にしかない、なんて……。

粹に押し込められている気持ち悪さなんて……。価値観すら違うこの世界で“あちら”のように相手の気持ちを考え、求めているモノをあげるなんて芸当出来るわけがないでしょう。

「ただ一つの癒しを奪われて、黙っていることしか出来ないこの不甲斐さが分かるか！！！」

――！

初めて激しい感情を、怒りを見せた。

私は必死に考えましたよ、ええ。捨てられるのは嫌ですから。でも、でも、全く理解できませんでした。その人に成り切るのは簡単です。オリジナリティは求められていませんから。

「……分かるわけないじゃん」

久しぶりに敬語以外の言葉を話した気がしますね。この言葉遣いだって昔真似ていた人間の特徴です。それが写ってしまった。ただ、それだけの事。

「そんなの私には分からない」

そう言いつつ礼をするのが精一杯ってやつです。

【きゅっ】朝日が。（前書き）

激しく自己嫌悪です。

テスト勉強中に書いててごめんなさい。

私は政治家になったとしても絶対に公約を守らない無礼者で……瑠璃様。これは違うんですよ……。息抜き、そう！息抜きです！だ、だからお許しを。

「早く勉強なさい無能なのですから」

はいいっ。

【きゅっ】朝日が。

私は今村瑠璃。

そう、一人の自我を持つ人間。私には、特技や人を引き付ける魅力はなかった。

だから、私は――…。

＋＋＋

普通に自分の部屋で勉強をしていた。

うたた寝をしてしまつて、衝撃で目を覚ました。

目を開くと神殿と呼ばれそうな白い建物の中心の水の中に落ちていて濡れ鼠だった。

驚いている周りの異国の顔立ちをした人間達は、私を見て驚いていた。

だから私は――死ぬ気で嗤った。

“わたしにはなんの利用価値もありませんよ？”
と。実際そうだった。

特殊な能力も無ければ、高貴な出でもない。

何も出来ない。人の真似しか。幸いこの世界では、幼く見られたので“何も分らない子供”として扱われた。

その方が都合が良かった。

「失敗しました……」

私は与えられた“二ノ部屋”でぼんやりと自分の手の平を見つめていた。

怒らせてしまった。

今までの信頼を台なしにした。きっとリユン又様も、もうアル様とは呼ばせてくれない。

人間とは、そういうもの……。

「あーあ」

そういえば何で私はここに居るのですかね。

理解できません。

何か使命が与えられた訳じゃない。不思議な能力が身についた訳でもない。

この世界で、やり直そう、なんて思ってしまった私は愚かだったのですね。

やはり私は、ここでも自分を消さ無ければ生きて行けないようです。

明日どんな顔で会えばいいのか分かりません。

これは私の感情？

それとも――。

真似している人の感情？

もうそれすらどうでもよくなってきました。

「疲れました――……」

私はそのまま意識を失いました。

＋　＋　＋

「うつ……」

朝日が眩しいですー。

今村瑠璃15歳。

超然美形様と魔王様の機嫌を損ねてしまいました。

追い出される5分前です。

追い出されたらそこら辺で自害でもしようかと考えています。

「おはようございます。ルリ」

ドアの方に顔を向けると、ああ。私の身の回りのお世話をしてくださっているアンナさんです。必死に頼み込んで“様”付けは止めていただきました。

もちろん、控え目少女を演じて、ですよ？

最初から図々しい人は嫌われます。

経験上の注意ですねー。

所詮人間なんて第一印象ですから。

「おはよう、ございます……」

少々消極的な方が私的には楽です。

今こうしてアンテさんと話せているのだからリユンヌ様は近くにいらっしゃるのでしょうか？

大変気まずいですね！

「あの……」

声を掛ければベッドメイクしていたアンナさんがクルリと振り向く。ふんわりとした茶髪に垂れ目のアンナさんはいつも口元に微笑を湛えています。

なんとも、余裕の表情。

どこからでもかかってこいやー！イメージが散布しています。

「何でございましょう？」

「リユン又様は？」

分かりきっているのに縋り付く。

「“いつも通り”とお答えして置きます」

そう言って去っていく彼女の姿に惚れそうになりました。

【じゅっ】 瑠璃

ごくり。と唾を飲み込みます。こんなに緊張したのは、初めて自分を偽った時以来です。

なぜなら今、この扉を開けた瞬間“死刑宣告”をされる可能性大！だからです。

きっと私の事を居ないように扱うのは序の口で“去れ”とか言って問答無用って感じで転送魔法使われるかもしれません。

あー、嫌だ、嫌だ。

開けたくないです。

でも後ろにはアンナさんが“速く開ける”と無言の圧力をかけてきます。

ヤバイ、怖い。

ということで、開けてしまった——！

カチャ、と金属音がし、ゆっくりと、そりゃもう嫌がらせかと思う程ゆっくりと。

魔王が君臨していた——…。

深紅の瞳は苛立ちを隠そうとせず、細く白い指は一定のリズムで机を鳴らしていた。

「——っ、おはようございます……リユンヌ様」

迷ったけれど結局今演じている“瑠璃”はこの選択肢を選ぶだろう。アルではなくリユンヌと。

話しかけてきた事に驚いたのかゆっくりと、本から顔を上げる。次

の言葉が紡げません。

私には——もう。

「お尋ねしてよろしいでしょうか」

静かに時を刻む時計。

私には遅すぎるペースで。

しかし、おしとやかで、消極的な今の“私”には早過ぎるのかもしれない。

「——なんだ」

「化け物が望む物は何だと、思いますか？」

これはペースの早過ぎる賭け。丁か、半か。

負ければ変わらず、勝てば何かが変わることでしょう。

暫しの時が流れます。

瞳を閉じる。

すると、聴覚が鋭くなるので時計の針のカチリと言っ音が嫌にはつきりと聞こえます。

一体どのくらいの時間が流れたのでしょうか。

さあ、さあ。速く、早く。

貴方の言葉で。

答エヲ聴力セテ——…。

リユンヌ様は深紅の瞳をこちらに向けて、囁くように、自分の秘密をこっそり話すときのように。

静かな、その美声で……おっしゃいました。

「——詰りの言葉」

嗚呼、そうです。

その通りでございます。

その時私の中を駆け巡ったのは恐怖や羞恥ではなく——歡喜。例え
ようなないほどの喜びだったのです。

「私の場合は……な」

やはり、やはり。

この方も何かを捨てたのだ。

＋＋＋

幼少の頃、私は人の気持ちが痛い程、分かる……分かってしまう感
化されやすい性質でした。周りにいる人間、それに留まらず本の登
場人物にまでも。

それだけならまだしも気持ち悪くなったり、登場人物が肉体的に傷
付けば自分までもが痛くなるくらいには重症でした。

私はこの性質のせいで人間が大嫌いになりました。

なぜなら小さい頃の私の周りには私を傷付ける、そういう嫌な存在
しか居なかったのですから。

傍に寄れば、母はいつも帰りが遅い父への愚痴を零し。

父は、母の浮気について心を悩ませていたのですから。

祖母は、母の不出来を歎き。

友人は、異性への悲しみを私にぶつける。

つまり、本来寄り所となる居場所は私には存在しないも等しかったのです。

だから“私”は“私”を捨てました。

私は瑠璃として、ではなく本に登場するような“私”と言う存在になっただけです。

そこにはどんな人格でも入り込める、という訳です。

つまり、瑠璃の人格以外入り込めるといいうわけ。

“瑠璃”は“私”を演じれば良い。

そう決めた日は“私”の誕生日でした。

その日からなりたいなあ、と思った人格になる努力の日々が始まりました。

観察して、真似をする。

簡単な事でした。おかげさまで周囲からは性格美人と呼ばれるまでに至りました。

中には妬んで八方美人と呼ぶ人も居ましたが……。

私は何も感じない“人形”になったのです。

人間ではなく人の形だけの——モノ。

しかし、罪悪感はありませんでした。

私は皆を騙している。

誰にも気付かれませんように、と願いながらも誰か気付いて、と思いつけていたのです。

だから『瑠璃ちゃん、すごいね！』と言われるより『騙してたんだ！裏切り者っ』と詰られた方がマシでした。

だから、私は、リユン又様の答に歓喜したのです。

——これが瑠璃。

【じゅづ】 瑠璃（後書き）

全然分からなかったと思うので説明をさせて頂きます。
もちろんこれは私の文才がないからであります。

分かったに決まってるじゃん、と言うお方はすごいね、うん。

【瑠璃について】

彼女は小さい時に自我を捨てたんですね。

つまり自分を客観的に見るようにしたって訳です。

ある意味、凄いですよね。

【ベリアル・リユンヌについて】

彼の過去は後々明かされる……はず、です！

【じゅっいち】親愛（前書き）

長らくお待ちしました。

【じゅっいち】親愛

チャオ！

つてな感じで、今村瑠璃たん15歳でっす！キラッ……と。

はい。

吹っ切れました。

まだリユンヌ様に解雇とかされてはいないけれどそのうち解雇されます……。

窓際社員の気持ちがあった瞬間でした。まだ未成年なのに！

「はっはっは、」

と高笑いをする。……若干イタい人がいます！！

「何を……？」

……あ。

忘れてました。

この国で次に権力を持つ御方を。ファンテウーヌ・リヒト様。甘やかな蜂蜜色の髪を窓から入って来る暖かい風に弄ばせて彼は立っていた。

——へ？

てゆーか、何で貴方が乙女の部屋に入ってきてるんですか？

いくら美形だからってやって良いこととダメなことがあるんですよ？
ああつ、何で気付かなかったんだ！私イ——！
誰か、誰か荒縄を持ってきて！死ぬわ！この世からおさらばするわ！
“ 拝啓。お母様、お父様……衣食住だけは確保して頂きありがとうございます
ございました。不出来な娘を持ったこと精々後悔しやがって下さい
ませ”

と脳内遺書を作成しながら、カーペットに頭をたたき付け、涙を零す。
とまではいかないもののやつぱりそのくらいはしておくべきだったなあ、と後悔しています。そうしたら額が割れて、血が出てメ
ディカルルームに連れていって貰えて……あんな事聞かなくて良かったの
かも知れません。

「や、どうしたっ……」

慌てた様子で、私によってくる。そうだ。元はといえば貴方のせい
なんですよ……？

リヒト様の馬鹿野郎。

そういえばいつから居たんですか……貴方。

「ルリが腰に手を当てる暴君のように高笑いしていた辺りからだな
……うん」

へえ、そうなんだ。

死亡フラグ……主にリ〇ト様に。

「で、何か御用でしょうか？」（大した用がないなら帰れ）

満面の笑顔で言い放つ。

本来ならば（ ）の中の言葉を言っているかも知れませんが賤しくも相手は王族。

このファンテウーヌにおいての王族の地位がどのくらいなのかリヒト様の父上を見ただけでは分からないけれど“貴族様”には逆らわない。長いものに巻かれる！これが今村瑠璃さんのポリシーです！

「あ、いや……」

困った顔をするリヒト様。

いきなり核心を突かれたからでしょうね。ええ。

私は15歳ですが、この世界の人間から見たら約8歳と言ったところでしょうか？パネエっす。

「昨日は申し訳ございませんでした。非礼をお詫び申し上げます」

大体、8歳の少女に敬語が使えるとでも？

はっ……ありえなー。

「そして……私には疑問が2つ程あるのですが？」

今だに戸惑っているリヒト様の話の主導権を握ったのは——わたし。

＋＋＋

「リユン又様」

数多く居る騎手の一人カイルが口を開く。彼のポリシーは確か“歌って踊れる万能騎手”だったと思う。没落しかけていた彼の家を見つけて、彼に忠誠を誓われてから3年の月日が過ぎた。早いものだ。時というのは。

「リリス様から花を……」

「捨てて置け」

間髪入れずに答える。

いつものやり取り。彼女から贈り物が来て私が施設に寄附するか、下々の者に下げ渡すか、捨てるか……この三択。最近は瑠璃に渡すという選択肢も増えた。あいつは、何をやっても嬉しそうに受け取る。

——瑠璃。

お前は何者なんだ？

リヒト様の20の誕生日に“神堂”の“鏡水”から泡と共に出でし少女。

最初見た時はリヒト様を殺しにきた侵入者だと思って疑わなかった。……今もそう思っている。私と、リヒト様を懐柔して何かを企んでいるようにしか見えない。だから懐柔された振りをして“アル”と名前と呼ばせてみた。

予想に反しての喜びようだったので罪悪感でつきり、と胸が痛んだ。リヒト様はすっかり心を開いている。その姿を見ていると無性に苛立つのはやはり、リリスの事があるからだろう。まだ囚われているのか。……

この国では珍しい黒髪に、瑠璃色の瞳。

一見普通の幼い少女だが、そこらの街で働ける程の生活力と礼儀を

兼ね備えている。何か特別な訓練をしたとは思えない。幼い表情の中に時節、見せる大人びた顔。違和感があった。出会った時から。そして一番の違和感は、その——笑顔。

泡から出てきた絡繰からくりは分らないが、最初の笑み。あの笑みはいやに年季が入りすぎていた。この世界の貴族の殆どは“愛想笑い”や“本心を隠した談笑”をするだろう。

しかし8歳の少女がするにしては——自然過ぎた。嗚呼、何故お前は来た。

いろいろな者を搦め捕る魔女か？

それとも神か、魔物か……。

「瑠璃……」

この世界の響きではない。
珍しい名。

「わたしは……」

わたしはあの時、瑠璃が泡と共に“鏡水”から出て来た時……リヒト様を殺せる立場に瑠璃がいると理解したとき……ああ、リヒト様を殺せ！と強く思ってしまったのだ。

リリスを奪った。

唯一愛してくれた人を奪い取った男を。

『アル……別れの時よ』

アルと瑠璃に呼ばせたのは、懐柔された振りをしたただけだ。
決して、リリスと瑠璃を重ねた訳じゃない。

そうだ。そんな訳がない……。

暫く考え事に没頭していて気が付くとまだ傍にカイルが立っていた。
手に親愛の花“フリージア”を持って。
気持ちがざわざわと苛立つ。

「捨てろ……」

「ですが……っ、申し訳ございません」

口答えるほどの事でもないだろう。

視線でそう言うとのろのろとした緩慢な動きで出て行った。

全く……なんなんだ。

【じゅっに】好奇心は猫を殺す？（前書き）

いや、はい。

テスト終わってないんですけど……亀更新なんですけれどもっ！
見捨てないでください。ハイ。

【じゅつに】好奇心は猫を殺す？

花粉症って辛いですね。

だけど、ファンテウーヌには、花粉は飛んでいません！

ふははは！やったぜ！

これで抗菌マスクにのど飴、常備しなくて済むわ……！

はい……毎度の事ながら、今村瑠璃さんです。

今、私は自室で殿下とバトってます。

やや、優勢……

疑問が二つあると言いましたが、リヒト様は正直に答えてくれるでしょうか？

懐柔した自信はありまくるのですが……？

「まず、一つ目」

探偵さんのように人差し指をピン、と立てる。
いや、やってみたかったんですよ。

「リヒト様とーリユンヌ様はー、何でそんなに仲悪いんでしょうか
ー？」

昨日の険悪な雰囲気は一体。

目の前に居る殿下はふっ、と目を伏せた。

「それは……」

もっつ、さっさと白状して下さいよ。

「はい、3 2 1……！」

これは個人差があるが、急かされ、カウントダウンされると焦って要らん事まで話してくれる人も世の中には居るのだ。

案の定リヒト様は慌てて、

「リユンヌの恋人を俺が好きになった！……リリースと言う娘だ……今は愛人だが、ゆくゆくは王女だ」

ほほー。

我等が魔王様に恋人が……。

「しかし、そんなに簡単にリユンヌ様の恋人 リリス様はリヒト様に心変わりしたのでしょうか？」

まあ、誰でも抱く疑問でしょう……？

しかし、それに答えた（？）のは、紛れも無いリユンヌ様……張本人だったのです。

最近では自分で言語魔法が使えるようになったので余り傍に居なかったのがあだとなりましたね。

「それに答える必要はありません、リヒト様。 また、貴方が答えてよい話ではありません」

紅い瞳を冷たい怒りで覆い隠すその様は正に悪の魔王様。美形が怒ると本当に怖いです。

「そう、だな……すまない、ルリ……」

しょぼん。という表情でわたしを見る。

わたしは、

「いえ、いえつ。詮索した私がいけませんでした!」

と謝っておこう。

しっかし、どうするかなあ?

やっぱりこの二人の過去は知りたいし……。

「瑠璃……お前も首を突っ込むな。良いな?」

「……はい、申し訳ございません」

でも元はいえは貴方がわたしに“アルと呼べ”なんて言うから
いけないんですよ?

「リヒト様。最近……城内が荒れておりますので処置を、と国王陛下
下が……」

「……! そうか、分かった」

国王陛下直々の御達示か……。珍しいのだろうか?

動揺しているように見えた。

そそくさとこの部屋から出ていこうとするリヒト様を見送ってか
ら、

「リユン又様は、何か御用でしょうか?」

いつまでも部屋に立っているリユン又様を見かねてわたしが声を
掛けると、

「ああ……」

なんとも齒切れの悪い……。

「リユン又様はわたしに正しい答えを下さいました。それだけで十分なのです」

「正しい答え……？」

眉を顰める。

その動作でさえも美しい。

「はい……詰りの言葉、と」

あの時からわたしはリユン又様の心の傷を決る事になっていたんだ
と思いますよ。……はい。

「……それは救いになったのか？」

「ええ……ありがとうございます」

ああ、段々キャラが崩壊していく……。

でも、それでも……私は知りたい。

リリスというこの美形たちの心を掴んで止まない女性の事を。

丁寧にお辞儀をするとリユン又様は出て行った。

＋＋＋

さて……。

早速、調査だ。

最近、インドアになっていたので気分転換に城の中を歩いてみよう。

と、いうのは8割正解で、2割ハズレです。

本当の目的は――聞き込み。

いやね、こういういかにもなゴシップは民衆には隠されても侍女さんたちには隠せないものなのですよねー。

「アンナさん、私……少し散歩してきてもいいでしょうか？」

空気を呼んで奥の部屋に退室していたアンナさんに告げると、

「はい、余り奥には入らないで下さいね？」

と念を押されました。

この城は、奥に行く程偉い人のお部屋になっている。
だからでありましょうね。

「はい」

元氣な返事をすればほつ、としたような空気が室内に流れる。

「では、いつてらっしゃいませ」

「いつてきます、夕食までには帰ってきますので……」

そう言って私は“二の部屋”の扉を開けた。

左右を確認して、大理石の廊下を歩き始める。

「そういえば、外を出歩くのは街に行った時以来でしょうか？」

書庫には行かなくても、リユン又様のお部屋にある本で足りまし……。

そう思うと、柄にもなくわくわくしている自分がいることに気づ

いでちよつと笑えた。

【じゅっさん】出会いの印象って大切ですよねー

さて……。

自室から久しぶりに出る城内。

しかし、行けども、行けども人に全く会いません。

「そういえば、中央から1キロ離れているんですけどっけー？」

そんな事をリヒト様がぼやいていたのを思い出してぞつ、とした。長々とした大理石の廊下が永遠に続いているのかと思えてしまうから……。

そんな絶望的な考えを頭から振り払って、進むけれど……。

人の気配がない！

「うわー、リアル迷子ですか？ この歳にもなってー」

ありえないです——。

と顔に手を当てて自嘲する。

あ、自重もしいた方がいいですか？

すると、なんと……！

向こうから人がやって来る！！

でも沢山荷物を抱えているせいで顔が拝見できませんねー。どうしましょう？

声を掛けても良い相手なのでしょうか？

でもでも、ここで永遠に一人というのも虚しい……。
ということで声掛けちゃいましょ——？

「すみませーん」

ここで確認するのは性別。

「？　なんでしょう？」

——凄い。

この人いきなり声を掛けられたのにも関わらず、この対応！
わたしなら飛び上がって驚きます。

そしてその肝の据わった人は女の人でした……。

「あの……中央に出たいんですけど……」
通じてくれるかな？

「中央？何をしにいくのですか？　ルリ様」

ギクウツ——！

なんで声聞いただけでわたしだと分かるの！？
なんて有能なのですか！

「あれ？　間違っていましたか？」

荷物の後ろで首を傾げた気配がする。

女性にこんな荷物を持たせるなんてっ——！

さらり、と蒼い髪の毛を結んで居るのでしょうか？

腰辺りまで届く髪は優雅で素敵です。

つい、見つめてしまっていた。が、相手はこちらが見えないので問題ないでしょう。

なのに——！

「何かついているでしょうか？ 顔に——？」

と平然と言われた時には、“なんだ！コイツえすばーか！？”と思いましたよ。

いや、マヂで。ガチで。

「ひゃっ、あの……綺麗な髪だなあ、と思ひまして……」

正直に言ってしまったー！

怒られないでしょうか？

マナー違反でしたか？

「……有難うございます？」

きゃあ！

萌える——！

激しく萌えたああ——！

声は綺麗なソプラノで、海を思わせる蒼い髪は枝毛一つない。ああ。正に女性の鏡！（顔は不明だけれど……）

「ルリ様？」

はっ！！

早く中央に行かなければ！

窓を見ると、もう“涙草”が雫を零しています。

ああ、涙草というのはですね。日が暮れかけると涙の様に水滴を垂らす植物です。

名前の由来はここから来ているのでしょうか。

「では、わたしも丁度荷物を中央に運ぶところだったので……いきましようか？」

え。

でもさつき反対側から歩いて来ませんでした？

「ふふ……可愛い女の子をここに置いてきぼりにするなんて馬鹿みたいですよ？」

ずっーきゅーん！

あああ。

カッコイイよ。やばいよ。

女の人だよね？

「ああっ、荷物持ちますー！」

そうです。

せめて、この位しなければ！

「え？ 大丈夫ですよ？」

そういつてサツ、と重い筈のわたしの身長程ある地図やら、何か想像したくないモノを付けてある瓶とか……。
一体何に使うんだろう？

「でも……やっぱり！」

わたし達は歩きながら、大理石の廊下を歩いていく。カツン、カツン……と足音が響く。

「そうですねえ……ではこれを持って下さいますか？」

しぶしぶと言った感じで小さな箱を手渡す。それは、ガラス製でもキラキラした深紅の小箱だった。

あ、リユン又様の色だ。と、勝手に思ってしまった。

「綺麗……」

つい、呟いてしまう。

「ああ、それはリリス様がリユン又様に差し上げたものです」

と、さらりと爆弾発言をしてくれちゃうなー。

きつと、リユン又様の弟子だから事情を知っている人だと思われるってしまったのですかね？

なんて事は勿論口には出さず、相槌を打つ。

「よくこういう贈り物を？」

ぼそり、と呟けば、

「そうですねえ……週一単位？」

わぁお……！

それは、凄いです。

リリス様はまだリユン又様のことを思っているのでしょうか？しかし、もしこれがリリス様からリユン又様宛てのものだとしたら何故、何かの標本や地図と一緒にになっているのだろう？ 聞くと、

「それは、捨てるリユン又様が……」

相変わらず荷物で隠れている顔は今、きつと哀しさで縁取られている。

「でも……これ結構、高価な物なのでは？」

「そうなんですよ、捨てるのが忍びなくて……」

冷たい小箱を手でいじくりながら考える。リユン又様には何が会ったのでしょうか。

“詰りの言葉”は貴方が最も欲しがっているものなのではないですか？

「詰り……」

「リユン又様は傷付いていると……時々思っています」

わたしも思います。

いつも、いつも……。

だから、本当は誰も傷つけず、一人ぼっちの静かな所で生きていた、と。

そう思ったことがあるというのは、否定できないけれど。

わたしも思ったことがあるからリユン又様が何故、そんな風に思うのか分からないのですよね。わたしのように感情豊かだったか……? …… ないない。

「リユン又様とリリス様はそれはそれは仲が良かったんですよ、なのにそこにKY馬鹿王子が割り込んで『俺の嫁にする』とか叫んだせいで……」

むっ ちや辛辣に聞こえる。

そこまで嫌いなんだ…… 王子の事。まあ、わたしも言えた義理ではないのかも知れないけれど……。

ぺらぺらと喋って言いのだろうか？

「さあ、着きましたよ」

中央です。そう言って彼女は荷物を受け取ると、すたすたと帰っていく。

周りを見るとわたしみたいな小娘が来てはいけない場所だと分かった。だって空気が違います！

「どうしよ、ですね」

一人呟いていると、行った筈の彼女が耳元で、

「侍女を探しているのなら庭に出てみては如何でしょう？」

と囁かれた。

「なっ——！」

何故！？

分かったのでしょうか？

目を見開いていると、艶やかに微笑んで、

「リユン又様にはナイショですよ？」

彼女は何処まで知っているのでしょうか？

てゆうか……誰？

今まで一緒に居たのに――。

名前や役職すら聞いていなかった自分に呆れる。

「あ、あのっ……貴方一体！？」

と、声を上げた時には彼女はもう颯爽と“黎明の部屋”のほうへと戻っていた。

「すみません、庭に出るにはどういったら良いのでしょうか？」

と近くにいた銀髪の男性に聞く。何しろ此処は男比率が多い。女性も時々見かけますが……。

侍女さんでもないので騎手さんなのでしょうか……？カッコイイです。

もしかしたら、あの人も女騎手さんだったのかもしれませんが。着ている服は違ったけれど……。

「あ？ 庭だ？」

なんて事を考えていたら、凄まじりました。コワイッス。

ここは――！

「ごめんなさい、お兄ちゃん」

と、ぺこりと頭を下げて謝って、ウル目で見つめてみます。

自分の顔のレベルはきちんと分かっているのです。そこまでブリっ子は
しません。……。

普段小さな子と慣れ合う機会が少ないのでしょうか？

「あ、謝ることはないっ。」

と必死な感じで、言われました。

しかし、こんな所に2人で立っていてもあれだしなあ……。
さっさと聞いて、行こ。

「庭にはどーやって行けばいいですか？」

「庭？　ここから真っ直ぐ歩いて右に行ったらところに扉があるからそこから出れるぞ？」

と、親切に教えてくださった。

ギブ&テイクとは言ったものでわたしは、この言葉を胸の中だけで大切にしている。

いつかお返ししよう。良い意味で……。

「お名前は？　お譲ちゃん」

やっぱりやめようかな？

だって“お譲ちゃん”だよ？嫌だよー、15にもなつてー。

しかし、彼女は知らない。

この国の成人男性から見れば、瑠璃は10にも満たない幼子に見えることを。

そして、中央には身分の高い者が基本的に入るところだ。
庶民……ましてや子供など。滅多な事がないと御目にかかれないのだ。

しかし、瑠璃の場合、来ている服が高価なそれだと分かる人間にはお嬢様にも見えるかな？ということすらも彼女は知らない。

「……瑠璃、です」

と、少々不機嫌にもなりつつ答える瑠璃は一部のマニアから見れば大変可愛いものだった。

「ルリ、かあ……異国の姫か？ 俺はキズナだ。よろしくな」

と意外にも人懐っこそうな笑みを浮かべて長身の彼はよいしょ、と屈んで瑠璃を抱き上げた。

所謂お姫様だつこではなく……色気の欠片もない俵担ぎ、だ。

ああ……なんかデジャヴう。とか冷静な頭の片隅で思いながらも、

「ちよっ……おm！ ふあゝゝふいふゝ！！」

と訳のわからん叫び声をあげながら、キズナに担がれている姿は、なんともみょうちくりんだったという。

【じゅっよん】侍女さんの証言１＊（前書き）

亀更新なのに評価付けてくださってありがとうございますっ！
めさくさ嬉しいです（ーεー＊）

【じゅっよん】侍女さんの証言1*

今村瑠璃。

15歳。只今、異世界とりっぷ中（現在進行形で）

「あの……もういいので降ろしていただけませんか？」

「ルリ……酷い。猫かぶってたのか？」

「いやだつて本来こつちのが素ですし……？」

「やけに大人びてるんだな」

と、つらつらと問答を続けているとキズナが右に曲がった。

この先に扉があるのだろうか？

「ところでお前何しに行くの？」

そういえば、この国つてどのくらいの勢力を持つてるんだろっ？とか考えていた瑠璃はそんな質問を投げかけられて心臓が跳ねた。

「うゝん……秘密？」

と、茶目つ氣たつぷりに言ってみれば、は？とキズナが目丸くする。

ですよねゝ、とか思いながらもやっぱり本当の事は言わない瑠璃。

「まゝ、いつか……！」

考えるのは苦手らしいですね……筋肉馬鹿？

と瑠璃のキズナへの評価が為されたのは言うまでもない。

いくら小さいからと言って自分を俵担ぎで担いでいるのにも華奢な男性ならそろそろギブなはずだ。

と、どーでもいい事を考えて暇をつぶしているとキズナがいきなり止まったので瑠璃は強かにキズナの背中に顔面をぶつけた。

「あうち！」

反射的に出てくる叫び声をスルーしてキズナは、

「着いたぞー」

と能天気な声を上げる。

それに無性に苛立って、足をジタバタさせると、クスリと彼が笑って、

「年相応の所もあるんだな」

と言いつつ余裕たっぷりで降ろした事にも苛立った。ので、降りた瞬間に足をふんずけてやろうと己の足を上げたところで、ひよいっとかわされた。

くそう！

＋ ＋ ＋

さて、世の中には苦手とする人間がいる。

例えば瑠璃の場合はキズナのような裏表ない真人間である。リュンヌの様な冷徹な人間や、リヒトの様などこか偽りの仮面を被って

いる人間の方が、まだ扱い方が分かる。がキズナのような裏表のない真人間はどうしても戸惑ってしまう。

イヤミも屁理屈も全ていなされてしまうからだ。

しかも天然で……ピュア^{ブラック}黒とでもいうように瑠璃の様な根性ひん曲がった人間には映るのだ。

「じゃあなー」

そう言って走り去っていくキズナの背中を見ながら、ほうつと息をつく瑠璃であつた。

……さて行くか！。

「趣味がいい庭師さんなのでしょうね」

とととて、と可愛らしい足取りで歩く瑠璃は、小さいながらも可憐な花を咲きみだらせている庭に目をやりつつ侍女を探していた。

華美ではないけれども、どこか人目を引く可愛らしさ、美しさを兼ね備えた花々が咲いている中を歩くのはとても気持ちがいい事だなあ。

しかし早いとこ侍女さんに事情聴取しなければなー。

「もおーやだあレイルつたらっ！」

ああ、聞こえてくるこの美声は一体何なのでありましょう？

「やるじゃない！ピア！」

音をたてないように侍女さんたちがいるであろう方向に向かう。

一際、高い樹が生えて日陰になっているところに彼女たちはいた。

そこで3人ほどの侍女さん姿の人が集まって談笑していた。
まさしくそこは彼女たちのテリトリー、男禁制の場所であろう。
そこで木漏れ日を浴びながら微笑んでいる様はまるで春の妖精の
ようです。

侍女さんの制服は、半そでシャツに黒い袖なしワンピースの上か
ら腰巻の白いフリルがたくさん重ねられたエプロン。という出で立
ちであります。

一見地味な格好にも見えますが、フリルや可愛い金ボタンが
付いていてシンプルな中に華やかさがあるというなんともぐっじょ
ぶ！な恰好であらせられます。

「レイン〜これ以上言つと〜」

一人、一人の顔と名前を一致させるために結構じろじろと眺めま
わす。

何も知らない第三者が今の瑠璃の姿を見たなら、完璧に通報され
るであろう大変なちっこい視線を瑠璃は妖精さんたちに送っていた。
黒髪を腰まで伸ばしたお淑やか系の美人さんはピアさん。

栗色のふんわりとした髪を肩まで伸ばした活発そうなイメージの
方がレインさん。

そしてさつきから一言も言葉を発せずに、ただにこやかに笑って、
波打つ金髪を緩く縛っているのは……誰でしょう？

さつきから名前を呼ばれもせずに完璧に傍観者を決め込んでいる。

「シャルからもいつてやってよつ。ピアってやるウ〜」

レインさんはからかうのが趣味みたいだ。

この人ならなんでも一から十まで話してくれそう……。

「ねえ……帰つてもいいかしら？」

和やかなムードを一変させたのがこの一言。

この言葉を受けたレインはぴしりと固まり、今まで怒っていたピアも動きを止めシャルを見た。

「だって私、先輩から押し付けられた仕事が山ほどあるし、勿論自分の仕事もあるし……のろけを聞いている暇なんてハッキリ言っていないのよ」

少々過激な言葉だが彼女たちにとっておじゃべりに花を咲かせる事より、侍女としての仕事を果たすのが本分である。

シャルの言い分はもつともだ。

「……シャ、シャルの……」

レインが震えた声で言葉を紡ぐ。

瑠璃の経験上この後の言葉は『馬鹿』『阿呆』等々の言葉が当てはまる。

——ので。

「あのお……ごめんなさい」

としおらしく言いながら潜ませていた身を明かすと、レインたちは吃驚したような顔になる。

まさか、喧嘩の真つただ中にきた乱入者が自分たちよりも5、6歳は若い少女が出てきたのだから。

「え！」

「どうしたの？」

今まで無表情を保っていたシャルが問う。
レインが、

「女の子よ……」

と呟く。

ピアは啞然として口をあんぐりと開けています。
ウケます……っ。

クフ、と笑いを噛み殺し、

「何かネタになるお話……ありませんかあ？」

さりげなく切り出す。

最初から、リユン又様達の事を聞いたら余りにも不自然ですからね
え……。

まあいきなり現れた少女に“ネタになるお話”を聞かれるのも随分
珍しいですが……。

「ネタになるお話……？」

人一倍、警戒心が強そうなシャルが翡翠の瞳を細めながらわたしの
言葉を反芻します。

をい、をい！

そんな眼差しをこの歳の少女に向けたら即泣きされますわよ。わた
しも泣いた方がいいですかあ？
正直ちよつと涙目だよ……！

「ご主人様が退屈だ、とおっしゃられましたので……」

と瑠璃が言つと、3人は納得したように頷く。

しかしシャルは、

「聞こえていたと思うけど、わたし今忙しいのよ。悪いけど……行くわ」

と言に残し、金の髪を優雅に降りながら、去って行きました。

「あつ！じゃあ わたし達が話してあげるわ」

「そうねえ……」

と二人が考えはじめたので、

「ご主人様は王家のドロドロが好きなんですよあ」

につこりと笑いながら言うと、2人はうん、と唸った後、

「あつ！」

とこちらが吃驚する叫び声を八もらせて、

「リリース様取り合い事件は！！؟؟」

とこれまた同時にわたしに聞いて来られました。

おおっ！シンクロ率高え！

名前からしてこれに違いありません。作った人のネーミングセンスを疑うところですが……。

取り合えず、聞いてみやしょうか！

【じゅっじ】侍女さんの証言2**

「そのお……それはどういったお話でしょう？」

まあ、聞かなくても名前からして分かりますが……一応全てを把握しておく必要がありますし……？

「このお話しはね、王宮でキツク箝口令が敷かれているのよ？」

と脅かすようにレインが言う。だいじょーぶですよ。

わたし此処から出られませんもん。

「大丈夫です、そこまでおバカじゃありませんもん」

と言いながら先を促す。

すると、ピアさんが、

「そついえば貴方、お名前は？」

と漆黒の髪をさらり、と揺らしながら優しく聞く。

さっきまで、ぎゃあぎゃあ騒いでいたのが嘘みたいです。

「わ、わたし……リリーと申します」

咄嗟に嘘をつく。

その名前がリリーになったのは、リリス様の事が頭を閉めていたからだろ。

「そう、リリー、ね。よろしくね。わたしは……」
「ピア様とレイン様、ですよね」

と先回りして言うのと吃驚したように目を見張った、ので少しスッキリした。最近もやもやが溜まっていたんですよ。
ごめんなさいね。屑籠にしちゃって。

「え ええ。わたしがアリピア・ピンカートンよ。ピアと呼んで欲しいわ」

と、戸惑いがちに笑われる。

この世界では手を握り合うという風習はない。

「あ、あた、わたしはレイン・ブラットよ。なんとも呼んでちょうだいな……」

と言われたので、

「ではピア様、レイン様と、いいでしょうか？」

さあ、はじめましょう。

——過去を暴く準備を。

「リリス様はリユンヌ様つまりはこの国きつての魔術師様の助手だったのよ。といってもリユンヌ様はまだ王都街のしがない下働きだったのだけど……そこでリリス様に出会ったの。二人は仲睦まじくお似合いの二人と言われていたそうよ。リユンヌ様は下働きをしながらコツコツと魔術の勉強をしていたのよ。」

レインさんが語るその話はよく出来た物語のようで……。

「でもそのリユンヌ様にチャンスがやってきたのよ。それは……。」「ファンテウーヌ・リヒト様の誕生祭——……」

レインさんの言葉をピアさんが繋ぐ。

「王子の誕生祭は下働きから、貴族まで国民なら全ての人間が来ていい機会よ。そこで上流階級の方の目に留まれば……」

そう二人は考えたんですね。

でもあのリユンヌ様が誰かに奉仕していたなんて……っ、信じられませんか。

「二人は誕生祭に行った、と？」

わたしが聞くと、こくりと頷く。

ふむ。そこで悲劇？が起きた。

「リヒト様はリユンヌ様が魔術で芸をしているのを見て大変、興味を持たれました……」

「でも、そこでしずしずとリユンヌ様の助手をしているリリス様を見てしまった」

「リヒト様はリユンヌ様の魔術に惹かれ、リリス様の美しさに惹かれた」

二人は歌を歌うように言葉を紡ぐ。

「さあ、扉は開かれた？」

「いいえ？わたしはモノじゃあない……」

「おやおや、気の強い娘だな」

「アルは褒めてくれるもの」

歌だ。それはもう会話ではなく、歌。

二人は歌を歌っている。

「……これは？」

私が聞くと、くすくすと二人が笑いあつて、

「リリス様とリヒト様の初めての歌と言う名の会話よ」

まだ笑い足りないのか、含み笑いをしながらピアさんが答える。

リリス様は随分と面白い方なのでしょいか？

王子様と話した初めてがリユン又様のほうがお前より優れている
といったようなものじゃないか。

「リリス様とリユン又様の間には王子様でさえも割りこめなかった
と言うことですね、ね？レイン」

「そうね、ピア。貴方もそんな関係に慣れればいいわねえ？ キズ
ナ様と——！」

キズナ——ッ！

あの！あの筋肉馬鹿とお！？

……まあ、人の趣味に口を出すつもりはありませんが……。あいつの何が良いんだ。

まあ、確かにイケメンの部類に入りそうな顔ですけども。

「ちよつとっ！ レインッ口が軽いんだから！ ごめんなさいね。
リリーちゃん」

ちゃん、付けは止めて頂きたい。

「リリー、でいいです」

「あら？そお…？」

残念そうにピアさんが言うが、早く話の続きが聞きたい。
もうすぐ、夕食の時間だ。

「誕生祭が終わった後、リリス様はリヒト様の部屋に招かれるわ。
リリス様はリユン又様にそのことを隠して行くの……」

「それが、始まりになるとも知らずに……」

「リユン又様は才能に恵まれていたわ、それをリリス様はちゃん
とわかっていた。」

「リヒト様は勿論、リリス様を好きになっていたけれど……リユン
又様のことも気に入っていた」

「まあ、リユン又様はリヒト様のことを最初から警戒していたので
すけれど……」

「そーそー、その夜リヒト様は若さゆえか、とても……とても汚い
交渉をリリス様と為さった」

汚い交渉……？

それは一体どんな？

わたしの疑問を分かっているという風に頷き、先を言うレインさ
ん。

「リユン又様は出世、つまりは確かな地位を、揺らぐことのない力
を望んでいましたの」

「それは、リリス様にもっと良い暮らしをさせる為でもあったの。」

ああ、分かった。

分かって、しまった。

リヒト様は確かに、確かに、してはいけない最低なことをしてしまった。

王宮内で緘口令が敷かれるのも分かる。

だって、だって——！

「『ベリアル・リユンヌに地位を与える代わりに、そなたは私の伴侶となれ』 そう、王子は言ったのです」

「彼女は、一も二もなく了承しました」

「リユンヌ様の心も知らずに……」

「リヒト様の手をとって……」

「『今からわたくしは貴方のもの』 そう、おっしゃったの」

彼女はそのときどんな心境だった？

悲しみ？期待？喜び？愛しい人を諦めたのだから……。やはり悲しみ？

ああ、心を捨てて、客観的にしか物語を見れないわたしは、分からない。

リユンヌ様が、癒しを、リリス様を奪われたときの苦しみも、リヒト様が、哀しそうにする理由も。

分からない。分からない——！！

「その後のリヒト様の行動は迅速だった」

「彼女を正妃にするといい、反対するものは自身の未来の活躍を約束した……姫の権力などなくともそれを補うほどの栄光をこの国にと」

「呆然とするリユンヌ様に王宮魔術師の称号を与え、リリス様を中心部に閉じ込めた」

ああ、ああ。

い、やだ。嫌だ。聞きたくない。

それ以上は、聞いたらわたしは彼女を憎んでしまう。

リユン又様をいとも簡単に捨てた彼女を。もちろん地位に目くらんだ女だと思うつもりはない。

でも、それでも——！！

憎い、と思ってしまうのだから。

「あら、もうこんな時間……少し、話し込みすぎたわね。リリー、これでご主人様へのお土産になったかしら？」

ピアさんが言う。

わたしが、黙り込んでいる間に、オレンジ色だった空は闇色に塗り替えられた様だ。

「あ、ありがとうございます。主人も喜ぶでしょう……それでは、失礼します」

逃げるように後退し、走り出した。若草色のスカートが闇に揺らめく。

なんだか無性に泣きたい気分だった。
聞かなければ良かったの？

＋＋＋

「ルリ、帰っていたのですか？」

アンナさんが静かに聞く。

「はい、今日はすみませんが夕食は……要りません、アンナさんに差し上げます」

「ルリ……わかりました、が」

一旦言葉を切るアンナさん。

「貴方が失礼な方と言うのが良く分かりました」

「——ッ！」

「貴方は仮にも置いてもらっている身分でしょう？　いくらリユン又様の弟子といっても本来なら食事だって、身の回りの世話は全て貴方がやるべき事です……それを拒絶出来るほど貴方は身分が高くないし、何も貢献していない。お分かりですか？」

首をかしげて彼女は言う。

久しぶりにこんなに辛辣な言葉を投げられた。

そうだ——彼女はわたしが異世界人だということを知らない。

仮に異世界人だとしても、わたしは人を使える身分ではないのだ。よく……分かっていたはずなのに。

「頂きます」

「使用人が客人に異議を申し立てるなど……非礼をお詫びします……申し訳ありません」

そう言って深く、頭を下げる。

「いいえっ、わたしも少し忘れていました。自分の、立場を。」

そう、わたしは羽を翳られた鳥。

この城とりかこでしか生きられない。

だって……わたしはこの世界の人間じゃない。

わたしは、わたしは……日本人。髪も瞳も、言葉も手を握り合う習慣でさえ——何もかもが違うのに。

——忘れていた。

帰りたい、という気持ち。

それほどまでに、この世界は居心地が良かった。

「それでは、失礼します——…。」

トレイの上に乗ったほかほかのパンみたいのと、冷たいコンソメスープみたいな物。それから、硝子の容器に入った果物。綺麗に皮がむいてある。

これを作る為に一体どの位の下働きの人が頑張ってくれたんだろう——…。

「なんか……もう。」

消えたい。

この世界から……。

なんだろうこの虚無感。

ふわふわと、漂うような、この感覚。

ああ、消えるの？

もぐもぐとスープの中に入っている透明なゼリー状のものをかみ締める。

噛んでも、噛んでも、噛み千切れない。

そんなとき。

——コツ。

音がした。

スカートの中から。

「なんでしょうか……？」

スカートのポケットの中を探る。
冷たいなにかが手に触れた。

？

取り出してみると箱だった。

ガラスで出来た、深紅のガラス箱。

手の上に掲げると、炎の魔法で出された暖かな炎の光を反射してキラキラと輝く。

「綺麗————」

そうだ。これはあの人……あの蒼い髪の女性がもっていたのでは？
リリース様のリユン又様への贈り物。今はそんな事、気にならない。

なんで入っているのだろうか……？くれたのかな？

——　　つと今はそんなことを考えている暇はない。

「リユン又様の力になりたい」

そうだ。例えばリユン又様の心がまだリリース様の所にあつたとして
も……わたしは、異世界人。

失うものは何もないのだから。

【じゅっご】侍女さんの証言2**（後書き）

地震大丈夫でしたか（´・ω｀）？

【じゅつろく】 逢いたくない人に逢ってしまつ。なにこれ新手のイジメ？

「クスッ、リユン又様、わたしは女だと思われてしまったようです……」

「知らん。勝手にしろ」

ああ……またこの人は。

無表情で書物を読み漁る主を見る。

どうしたら、笑った顔や、傷付いた顔を見せてくれるのでしょうか？

「ルリ様はいい子？ですね。ご褒美にあの硝子箱を差し上げましたよ」

「——っ！　そうか。」

分かっているんですよ。

貴方が傷付く事くらい……。

あの深紅の硝子箱は、リリス様からの贈り物。

一番初めに、リリス様がリヒト様のモノに成られた時から週単位で贈られてくるわたしにはゴミ同然の高価な硝子箱。

リユン又様の瞳を真似て、リリス様が作らせた、この世にたった一つしかない物。

ルリ様に返してもらった時にまた彼女のスカートの中に滑り込ませた冷たい硝子の塊。

「怒っていらつしゃいます？」

ルリ様は本当に素晴らしい。

アル、と呼ぶ事まで許可され、しかも街に、あの人嫌いのリユンヌ様が街に……！

まあ、なんだか会った人が居たらしいですが――。

「無駄口を叩いていないで仕事をしろ、戯け」

「はい、リユンヌ様」

ああ、面白い。

＋　＋　＋

「ああああ――！　うつ――！　く、あああつ――！」

叩く。つねる。えぐる。蹴る。殴る。

考えつく全ての攻撃を枕や壁、ベッド、はたまた自分にしてや
つとスッキリした。

よくもまあ、寝る前の3時間、こんな事が出来たものだ。

喉は叫び過ぎてがらがらだし、腕や脚、とにかく体中が痛い。

ずきずき、じんじん。

なんかありませんか？

意味も実益もない行動をしたくなる時って。

くるくる回る椅子に座って脚が疲れるまで回ったり、ね？

ありませんか……まあ、もとより作者の意見なんて求めていますか……。

「っ痛……！」

アハハ、傷だらけってヤバ。

急いで真珠色のチューブトッ

プと若草色のスカートを脱ぎ捨てて、わたしが堕ちてきた時に来ていた薄桃色のセーターとジーンズを履く。

少し浮くかも知れないけれど仕方ありません。
でも久しぶりの日本の感覚。

「何事も“初心”は大切です。忘れるな、瑠璃。お前は帰るんだ。
リヒトを懐柔し、帰還するんだ」

声に出して、言う。

日本語を定期的に発しておかないと、地球という存在すら忘れてしまいそうで、怖い。

「わたしは今村瑠璃、15歳よ」

うん。

この感じ。こう……しゃん、と自分が伸びる感覚。

お母さんやお父さん。

友達。

情や特別な感情がないわけではない。

いくらごみ箱にされていたとしても……。

例え、替えのきく都合の良い存在だとしても。

わたしはさぶ濡れになっても、どんなに汚くなっても——生きる。

「ね、むひ………」

わたしはその後、次の日の昼まで永遠に眠っていた。

熟睡である。

爆睡である。

＋　＋　＋

「ル、リ……ルリ。起きろ」

瞼を閉じていても分かる、薄いカーテン越しに伝わる優しい光。
ひなたぼつこの様だ。

全身に暖かさが染み込んでくる感じ、でも日焼けしちゃうーや
だー。みたいな？

「あ、と……365日と2時間……」

ずっとこのまま。

時よ、止まれ。わたしの為に。髪の上にまで光が届いているの
が分かる。不思議だなあ。

足の先がやけに温かくて……。

「てゆか細かッ……ルリ」

五月蠅い奴は嫌われますよ。

「ていうかなんだこの服は……ルリの世界の物か？」

ああ、ああ。

こう言うときだけ、野次馬的好奇心発揮してんじゃねえよ。

「るーり。ルリー」

歌、歌いでしたよー。

あ？安眠の邪魔してんじゃねえよ。カス。
大体誰だよ。

俺様の安眠を邪魔できんのはリユン又様だけなんだよ。

「ルリーー世界が終わるゾー」

「るせ、ハゲ」

「えっ！？俺まだある、あるからあっ！」

つかお前の家系皆ハgじゃん。陛下ハゲてるでしょー。

あれ、完璧に鬘かつらだったよ。

人工髪だよ。ですよねー。

「ハゲが……」

「やめてっ、淡々と俺をハゲにしないでっ！」

「よし、わかった。……明日ハゲろ——」

「俺なんかした！？」

うるせー。

まぢうるせー。

てか誰だよ。誰なんだよ。

「え——。リ、リヒト……です」

…………え。

ええええっ——！！

<15分後 覚醒>

「申し訳ございませんっした！」

覚醒しやしたよ。今村瑠璃。

だって、だってだよ。

疲れて寝落ちした次の日の朝方に殿下が来るとか……思いませ
んよ。ねえ……？

「い、いや。罵倒されるのは久しぶりで、その……新鮮だったぞっ
……。」

フォローありがとうございます。てかわたし何言った？ハゲと
か……？言ったわあゝ。

引かれてる。完全に引かれてる。

「あのっ、……御用件は？」

どうしよ。

死刑、リンチ私刑？

なに絞首刑？わたしは日本の地で死にてえっ……！

「……リユンヌが呼んでる」

うわ。

え。

何故……？

瑠璃さん。パニックですよ。

頭の中がIT革命やゝ。

「だから、早く……行っただほうが良いぞ……」

気まずげに目を逸らすリヒト様。

「そういえば何故それを伝えにくるのがリヒト様なのですか……？」
「……っ、カイルに仲良くするな、と……言われた」

カイル？

誰ですか――？

「リユンヌに3年前から仕えている騎士だ。目標は“歌って踊れる
万能騎士”だそうぞぞ？」

なんすか……それ？

「何故？仲良くするな、と？」

「リリスが吐いたんだ……」

リリス様が……。

じゃあ、早く貴方が行ってあげればいいでしょう？

「っ。リリスはリユンヌをご所望だ……」

……あらあら、まあまあ。

取り合えず……八つ裂きにしていいのでしょうか？

その覚悟ですよね？

覚悟の上ですよね？

「何故、夫であるリヒト様ではなく、――リユンヌ様（元彼）を？」

小首を傾げて尋ねる。

ああ、わたし今まで人の気持ち分からないとかほざいていた

けれど……今演じている瑠璃は、怒っている……。

そして今演じている普通の女の子の瑠璃は、リユン又様とリヒト様が同じ表情をしているのが分かってしまう。

「ル、リ、ルリ……俺は、調子に乗りすぎたか？」

そんな事をわたしに聞かないで下さい。

大体――。

「早く行かないとわたしは殺されますが……」

リユン又様を待たせると恐い、と言ったのは貴方でしょう？

「あ、ああ。そうだな……」

「リリス様に呼ばれているのでは？」

「ルリも呼ばれているのだ」

は？

「そう、ですか。」

止めて下さいよ。

そんな捨てられた子犬みたいな顔をしてわたしを見ないで下さいよ。

不安そうに空色の瞳を曇らせないで下さいよ。

「ただ――話くらいなら聞けます。」

救って上げなくなる。

小さなコップに大海の水が流れ込めば溢れてしまうように。
貴方の気持ちはわたしには多すぎて——それでも受け止めたく、な
ってしまふ。

大丈夫よ。と頭を撫でてあげたくなってしまうから。
わたしが——壊れるまで。

乞われるまで。

【じゅっしち】逢いたくないのに逢いに行きたくなっちゃう。なにこれ新手的

「リユン又様。瑠璃です」

我は今村瑠璃なり。まるまる。

はい。わたしは今一人で自室から3部屋しか離れていない“黎明の部屋”に赴いています。

なんでもリリス様からのお呼び出しだとか……。

わたしの部屋は物置だったそうですよ……ええ。天井低いと思つてたんですよ。

「——入れ」

「し、失礼します」

職員室に入る時つてこんな感じでしょうか？

だとしたら超恐え——！

いつも通りだった広い部屋にぽつん、と置かれた机とキングサイズのベッド。あとは乱雑に置いてある本達。

机の椅子を若干こちらに向け、顔をみた瞬間の一言。

「何故アルと呼ばなくなった」

『少し寂しいゾ』が着けばワンランク、いえ∞ランク柔らかい言葉に……。

「え。呼ぶ資格はないかと……わたしにつ」

いきなり何や。

気にしていらしたんですか？リユン又様。

「……呼べ、と言った筈だが？」

鋭い目を更に細くさせて、リユン又様が断言する。

「ア、ル様……申し訳ございません」

カチリ、と音を立てて針になる。

「ところで殿下から話は聞いているな？」

「はい。」

「姫様の所へ行くぞ」

リリス、とは呼ばないのですね。

姫様って……。

「カイル——」

「準備は整っておりますよ」

と言ってドアを開けて出て来たのは、あの——！

「——！」

中央まで案内して下さった蒼い髪に荷物を沢山抱えていた人でした。

「こんにちは。ルリ様。先日は荷物を持っていたいただきありがとうございます」

と言って優雅に頭を下げる。

え——。カイル、さん？

『歌って踊れる万能騎手らしいぞ』とリヒト様の言葉が蘇る。
目の前にいる人は紛れも無く昨日の人で——って男だったんか
あい！

カイルさんは男。カイルさんは男。……消えてしまいたい。

「歌って踊れる万能騎士……の？」

「はい。誤解を受けてしまったようですね」

にこやかに爽やかスマイルを振りまくカイルさん。

「カイル・アルジャンニ、と申します。以後お見知りおきを。」

「け、敬語なんて……っ」

そうそう、騎士様のほうが偉いですよ、ね？
わたしがそう言うと、困った顔をして、

「癖？……ですから。気にしないで下さい」

癖とな。

敬語が癖になっちゃう職業なんだ。騎士って。

「おい、もう良いだろう。」

そういつてリユンヌさ——アル様が席を立つ。

あ、そうです、そうです。

お呼び出しを食らっていたんです。

リリス様に、嗚呼本当に憎らしいですよ。

男二人を誑かすとかこの悪女だよ。この世界から存在抹殺して
えよ。

でも会いたいんですよね……。

「参りましょうか。」

カインさんの声で、ドアを開けようとしたらもうカインさんが開けていた。

早ッ！

いつ移動したんだっ？わたし達に声掛けたときには後ろにいたはずなのに。

「……………」

（つつこんじゃいけない！いつ移動したんだ、とか つつこんじやいけない！）

「……………」

「る、ルリ様？」

「もういい。時間の無駄だ。歩けば来る。」

「はあ。（つめたーい）」

ど、どうしよう。

今はそれどころじゃない！

あ、あれ？

アル様たちが消えた。

「ア、アル様、カインさん」

一人“黎明の部屋”を出て叫ぶ瑠璃。

少女の叫びが広い黎明館に響き渡ったとか……。

無事アル様とカイルさんに追いついたわたしは、リリス様の部屋に行くまでに多大な労力を浪費した。

もうエネルギーが駄々漏れである。

まずいつものように中央に行くまでに時間がかかり（二人は足が長いから余裕の表情）、そこからリリス様のいる“崇春の部屋”^{すうしゅん}に辿り着くまでに様々な兵士・侍女さんにボディチェックを受け、疲れた所でやっとご対面かと思いきやの、侍女さんからの大変申し訳なさそうな、『リリス様は御召し物を選んでいらっしゃいます…：暫しお待ち下さいませ。』と一言。

その一言でずん、と周りの温度が10度以上下がったような気がした。

瑠璃はセーターを着ているにも関わらず寒気がしてブルリと震えた。

それを見た、カイルが、

「寒いですか？」

と、聞く。

（元凶が何をいっとんねん）とは思ったが、身の危険を感じたのと言わなかった。

「い、いえつ、その……リリス様はどんな方なんでしょうか？」

「そうですねえ、儂げな美貌が特徴的な綺麗な方でしたよ」

過去形で話すカイルさん。

につこり笑った顔は、目が笑っていない。

「……………でしたよ？」

「はい、今はただの美形です。ね？リユン又様」

そこ、振りますか？普通。

溺愛してる元恋人のこと……………まあ。貶められている訳ではないけれどただのとか言われている訳でしょう。

「……………否定はしない。」

待たされている豪華な椅子に座って、静かに私達の会話を聞いていたアル様はカイルさんの言葉に気を悪くしたり、怒ったり、というのは無い様な気がした。

事実、自分もそう思っているからだろうか？

「昔は、輝いて見えましたよ……………」

カイルさんの口調からは、嘘は感じられない。

大体、わたしに嘘をついてなんの得があるというのだ。

それにしても……………ぐるりと部屋を見渡す。

（遅すぎやしませんかね）

そりゃ、お姫様ならドレスにせよなんにせよと思っていたけれど……………この世界はチューブトップにスカートじゃないか。

一体、何にそんなに時間がかかるのだろう？

向こうから呼んでおいて態度がなっていないんじゃない？

「……………」

「女の支度にはこんなに時間がかかるのか？」

リユン又様は、堪り兼ねたように言葉を吐き出した。

「いえ、わたしは1分で終わりますよ?」

と、私が返すと、

「お前と姫を比較したところでどうにもならん」

と、一言。

文句などつける気はないけれど私だって乙女ですよ。

（お姫様になろうと思えば誰だってなれるんですからね!）
と私が思っていたら、

「そうね。私と貴方を比べてもらっては、困るわ」

と、鈴を転がしたかのような愛らしい声が響きわたった。

その姿を見て、

（ああ、これが……）

と思った。

日当たりの良いこの応接室できらきらと輝いているその人こそ、
リス・クロウ様。

プラチナの髪に、すみれ色の瞳は顔の大半を占めるように大きく
ぱつちりとしていて、それを縁取る白銀のまつ毛は繊細な硝子細
工のようだ。

わたし達を自室へ案内しながら、微笑む。

カイルさんとはここで別れだ。

「ご機嫌麗しゅう? 御二方」

これだけ待たせておいて麗しゅうも何もあつた物じゃないでし
よう?

それなのに、目の前で微笑む彼女を見ていると何もかも許してしまいたくなってしまうから不思議だ。

ふと隣を見ると、瞳を伏せたアル様が悔しそうに歯ぎしりするのが見えた。

横にきつちりと添えられた拳は爪が食い込むほどに握りしめられている。

それを見たときわたしのなかに、瑠璃を演じる木偶の坊の中に生まれた感情は、

（この女、死んでほしい）

この一言に尽きた。

きつとまだアル様はリリース様が好きだ。愛している。

きつと彼女が望めば世界だって手に入れてしまっただろう。

でもそれが彼女の本意ではないのなら…彼はただ見つめるだけなのだろう。

きつと誰も愛さず。

彼女だけを見つづけて、一人死んでいくのだろうか？

ずっと縛られたまま彼女という過去に囚われて……。

（嫌ですね、絶対に。）

「お招きいただき有難う御座います、姫。」

今、どんな気持ちで彼は……。

わたしは何も言うことが出来ずただ機械的に礼をただけだった。

そのあとは単調な、型にはまったようなお世辞と、褒め言葉の羅列。

なぜお貴族様っていうのは本題にちゃっちゃと入ろうとしないのだろうか。

わたしが3度目の欠伸をかみ殺したとき、

「ハーブティーで御座います」

と、いう声がして白くしなやかな手が視界に入った。
わたし達が座っているソファはごてごてした貴族の悪趣味なソファではなくて、品の良い清楚な匂いまでしちゃう白いソファだった。

そこにこれを選んだ主の品の良さが伺えて^{うかが}これまた腹が立った。

「さて――、」

出されたハーブティーの心地よい香りを堪能しながらちびちびと飲んでいたわたしは部屋の温度が変わるのを感じた。

「今回呼び出したのは他でもありません……彼女は一体何なのですか？」

リリース様は、言い放った。

そこに責めるような言い回しは存在せずただ純粹に疑問提示だった。

てつきり「アルに付きまとわないでっ！」とかお決まりな感じ
で来るかと思っただのに……。

（そんなことよりハーブティーおかわりっ――）

と思い、周りを見回すと先ほどまでどこを向いてもいたお人形さんのような姫様付きの侍女さん達はいなくなっていた。

人払い？

「彼女はわたしの助手ですが……」

淡々とした口調で言う。

そう、私が異世界人だと知っているのは王とリヒト様、それから宰相さんとアル様だけだ。

姫であるリリス様やカイル様にすら伝えられていない。

「そんなはずありませんわ。」

よくもまあ、そんな自信満々な……。

あっているけども。

「わたくし、調べましたの。この世界に漆黒の髪などあり得ないのです。それに昨日わたくしの侍女が彼女がリリーとこの国特有の子女の名前を申したというではありませんか……」

あちゃー。

さすがカネと時間がたつぷりある姫は違う。

あの3人のだれかが姫様の侍女だったなんて……。

「それについては……私にもよくわかりませんし、それに……気になりません」

そう。

姫様は、今私を“異形”といったも同然。

「アル様……わ、わたし自分で、します……説明できますので」

こちらに絶対零度のワインレッドの瞳が向けられる。

大丈夫。落とせる。

「わたしは遠い、寒い地方からやってきた……リリス様などとは違う事すらも叶わなかったものでございます」

吃驚した様子を少しくらい見せてくれたっていいじゃないですか。

アル様が全く動揺していないのを見て少しガッカリ。

「それで……その——ですね」
「早くお言いなさい。」

少し苛立ったように姫様が言う。
それはそうだろう。

自分だけが呼ぶのを許されていると思っていたベリアル・リュン又様の愛称を自分とは程遠いちんけなガキがそう呼んでいるのだから。

「私は忌み子です。たぶんそう思っています。……」

これは半分本当で半分は嘘。

本当にわたしは向こうでも忌み嫌われていたから。一族の恥だったから。

日本人に有るまじき瑠璃色の瞳は、忌みの対象。
それが今回は髪の色に変わっただけ。

「小さい頃からみんなに嫌われて……親にすらもです」

ああ、想像できないでしょう？

綺麗な美貌を誇る姫様。

「まあ……」

「だ、けど……わたっ、わたし……人間で……っ」

よし、程よく涙腺が緩んできたな。

ふとアル様を見ると苦虫を噛みつぶしたような顔で睨まれた。

まあ、この場しのぎの演技ですから？ ……そんなに、こじつけっぽいですか？

「そう、なの……じゃああなたはアルの何なの？」

「奴隷です、又は盾。」

間髪入れずに答える。

わたしはこっちの世界の存在意義もきちんとして置きたい。
向こうでは女子高生。こっちでは奴隷、と。

「——！ じゃ、じゃあ夜もアルのど、奴隷っなの！？」

ええ。そうでしょうねえ。

奴隷なんて馴染み、が………なんか誤解してない？

リリス様は陶器のような頬を真っ赤に火照らせて、

「ど、奴隷は何をしても赦されると聞いたことがあるわっ……つまりどんなプレイも……嫌っ嫌っよー」

何を勘違いしてるんだ。

うーん。無視！スルー！

だってわからないんですもん！

「では……行くぞ。瑠璃」

アル様もほうっ、と溜息をついてリリス様に礼をしてからわたしの手を痛いほど掴み、扉を開けた。

その間もずっとリリス様は、器具がどうだの。何プレイだのと

ぶつぶつ呟いていらっしやいました。

＋　＋　＋

「何故あのような事を口にした。鉛を流し込まれたいのか？」

扉を閉めて、カイルさんと微笑み合ったときに言われた。

それよりも脈を止めるほどの勢いで手首を掴むのは止めて下さい。

掴まれていないほうの手で、涙を払うとぼやけていた視界がクリアになる。

「ルリ様は根気がある御方ですね。」

カイルさんまでもが笑っている。

綺麗だなあ。どうして私の周りには美形しかいないんだろう。

「……質問に答える。」

「う、ごめんなさい？」

よく分からないけれど謝っておこう。

「意味が分かるか？」

勇者は思考を読まれていた。

1、素直に分かりませんという。逆ギレの恐れあり。火焰噴射

2、誤魔化して目を合わせない。その後の報復により屍になる可能性・大。絶対零度 - 10000

3、泣く。効果なしの可能性あり。周りからの冷ややかな目線。精神的ダメージ - 100

(どれも同じに見える!!)

↓ 1、素直に分かりませんという。逆ギレの恐れあり。火焰噴射 - ∞

2、誤魔化して目を合わせない。その後の報復により屍になる可能性・大。絶対零度 - 10000

3、泣く。効果なしの可能性あり。周りからの冷ややかな目線。精神的ダメージ - 100

勇者は1、を選択した。

引き返すことはできない。

「分かりませんっ……」

「ほお。わからないと？ 奴隷の意味が……カイル。こいつを図書館に連れて行け」

「クス……御意」

なぜ笑っているのですか？

そうして……涙草が涙を零すことに気付かずに私達は――。

【じゅっしち】逢いたくないのに逢いに行きたくなっちゃう。なにこれ新手的

うーん。

なんなのでしょう？

リリス様は悪玉キャラでいくつもりが対して戦闘せずに図書塔に行くというこの……。

次回：瑠璃の失言の理由が明らかに！——為るはずです。ハイ。

【じゅうはち】 † 涙草は感じない †

富と栄光が全てだ。享樂家の父の最期の言葉。彼は、私の目の前で死んだ。

世の中、権力よ。浪費癖の激しい母の最後の言葉。彼女は愛人と逃げた。

クロードリュベン家はそうして暴落した。

私は姿をくらまし、父は死に、母は所在もわからない。そういう家族だった。

私は美しくなればなるほど可愛がれ、人形になればなるほど、微笑まれた。

私に“貧”は存在せず”富”だけが私を形成していた。望めばなんでも叶った。

自分より美しいものなんてないと思っていた。美しければ許されると思っていた。

その価値観が崩れ去ったのは12歳の誕生日を盛大に祝った2月後だった。

家の中に、刃が入れられ、大きな軍人が出入りした。父はその日、出かけていて、母は愛人のところだった。

私は100を超える使用人たちを一瞥しながら、通り抜けるのが好きで、その日もそうしていた。

「頑張つて下さいね？」（汚い恰好！よくそんな恰好を他人に晒

せるわね)

「まあ、綺麗！」(貴方には窓拭きが天職ね)

心の中で嘲っていた。

その存在に自分になるとも知らずに――。

そこまではいつも通りだった。

外から門番の困ったような声が聞こえて、たくさんの蹄の音が響いてくるまでは。

窓から見ると、たくさんの武装した人達がやってきた。

一番前の白馬に乗っていた男が、魔法で空砲を鳴らし、

「クロードリュベンの血を受け継ぐもの！前へ！5回のうちに出てこい！」

野太い声で告げられたのは死刑宣告。

恐ろしさに震える自分の手を見つめて、駆け出した。

玄関扉ではなく使用人部屋の方へ。

扉がノックされ、破壊される前に。

「っはあ……はあっ……っ」

日頃、人を使っていた私にとって走るのは苦痛以外の何物でもなかった。

しかし命の危機が迫っていると、感じた。

「うつ……父様あつ……お母様っ……」

結果的に出てきたのは自分をこんな状態にした両親の名。

しかしこういうときに力を合わせ寄り添うはずの彼らは——いないのだ。

捨てて逃げた。

家を。私を。

「最終通告！」

気が付けば彼ら軍人は最終通告をしようとしているところだった。

5回目の死刑宣告。

ごてごてと着飾った自分が恨めしい。髪留めを抜いて床に捨てた。カラン……と空しい音が響いた。

その直後。

「バババツ！！！」

耳を劈くような音とガラスが割れる音。それから悲鳴。

それが自分のものなのか、使用人のものなのかわからなかった。

脇目も振らず走り続けた先にあったものは、薔薇園。

貴族の中でも最大規模の薔薇園を誇る我が家は……と父が食卓で話していた。

父が話すことといえば、自慢話と仕事の事だけだった。

私はそれが普通だと思っていたから。

相手に労りの言葉を掛けるなんて、得にならないと思っていたから。

薔薇園の中に入るとムンとした濃い甘い香りが鼻を突きぬけて頭がクラクラした。

いつもここを掃除していた使用人は頭が痛くなくなったのだろうか？

そんな事すら考え付かなかった。

しばらく躊躇ってから私は、掘った。

薔薇園の土を。そんなこと初めてだった。

今でも思い出せるわ。

湿った土の厭らしい感覚。自分の綺麗な肌が土気色になっていく様、爪にこびりついて取れない砂利。

「ふっ、うつっ……」

音を漏らさないように気を付けて、泣き声を押しとどめたせいでのが痛い。

果実水が飲みたい。休みたい。

腕がクタクタ。もう嫌だ。

やっと子供一人通り抜けられる穴が開いて、ドレスが裂ける事も厭わずに潜り抜けた。

自慢の頬が、腕が、足が薔薇の棘の餌食になるのが分かった。

「痛いよお……」

プラチナの癖一つないセミロングの髪はぐしゃぐしゃで薔薇の匂いがした。

必死に目を守り、潜り抜けた先は——森だった。

自分はずっと路地裏に出れる方向の薔薇の土を掘り返しているのだと思っていた。

その時の絶望。

戻ることは許されなかった。

「……………っ！」

森を抜ければ何かあると思ったけれど、もう駄目だった。

棘に慣れていない自身の肌はぷつりと切れ、驚くほどどす黒い血を流した。

足は、使い物にならなくなっていた。

「やだ、いやだ、やだ……」

何が嫌なのか分からないまま嫌だ、と囁くように呟き続けた。

だんだん辺りが夕焼けに染まってきて、近くの涙草がぼろりと涙を零した。

がさっ！

そんな時だった。

白馬に乗っていた男が自分を見つけて、

「リリース嬢っ！？ おいつ！居たぞ！捕獲、リリース・クロードリュベン捕獲ー！」

ああ、捕まった。

男のがっしりした手には触ることなく、風の魔法で拘束され、

「そなたの父は王家の一人息子、ファンティーン・リヒト様の暗殺を謀ったのだよ……」

ああ、そんなことって。

そう思った。

なぜ私が捕まるの？

「クロードリュベン家の血を引くものが必要なのだ。見せしめとし

て……」

その時間こえた叫び声は私のものだったのか、それとも使用人のものだったのか……見当もつかない。

ちらりと見えた涙草の流した雫は私の血と混じって、黒く染まっていた。

涙草は風にそよぎさえしなかった。

【じゅつきゅう】 † 涙草なんて知らない †

「では。行きましょうか？」

カイルさんが優しく微笑んで手を差し出す。

私も微笑み返して、手を取ろうとしたとき、魔王様もといリュン又様もといアル様がぺしっとカイルさんの手を叩き落とした。黒い手袋を嵌めた手は空を切った。

「転移……」

深紅の瞳がこちらを見つめて、私が何か言おうとした瞬間に転移魔法で図書塔に飛ばされました。いきなりやられると今村瑠璃は吐きそうになります。

＋＋＋

「大丈夫ですか？」

ああ、好い声。

オルゴールな感じ。

「ルリ様？」

ぱっちり、と目を見開いて、

「“様”は止めて下さいませ」

と、抗議する。

いや、その前に大丈夫とか、言えよと思ったたその貴方っ（ビシ
イッ

こういうのはタイミングが肝心ですよ！

「はい……では、ルリ行きましょう」

出来れば敬語も止めて欲しいのだけれど無理とは言わないし、困
らせたくないのので止めておきましょう。

今度こそ手を借りて立ち上がる。

今私たちがいるのはちょうど真ん中の丸テーブルの椅子。

「相変わら着地点まで制御できるなんて……凄い人ですね」

感嘆の声を漏らすカイルさん。

凄いのか……？

ちょうど真ん中。

超、ど真ん中。

日本語は難しい。私は前者の意味合いで言いました。
対して意味は変わらないでしょうが……。

「えーと。奴隷について調べるんだよね、だとしたら……」

なんて言いながら本を探す姿は、騎士には見えない。
けれど彼もまた、殺す人なのだろう。
敵を。自身にとってのとアル様にとっての……。

「あつ、ありましたよ。ルリ？」

怪訝そうな声を掛けられてはっ、とする。
考え事をする外からの情報を遮断してしまうのが私の悪い癖だ。

「あ、ありがとうございます。」

がたつ、と椅子から立ち上がり、本を手取る。
そのときに、本を落としてしまった。

「ごめんなさい……っ」

「いえいえ、すみません、私も……」

そういいながら丸テーブルの私の隣に座る。
ち、近い。

こうして見ると、睫毛長い。綺麗な青。私の瞳の色と似通った
それはとても綺麗に光を反射している。

女っていつでもパーツだけみれば通じそう。

この図書塔に今、人は居ないらい。

本をめくる音だけが耳に聞こえる。

塵が光でよく見えるけれど、それすらもこの静かな空間には必要
なものだと感じた。

「あ、ここではないでしょうか？……」

静かな声で囁いてくれるカイルさんは気遣い上手だからいつでも
良いお嫁さんになれると思う。

「あ、本当だ……って——ええええええ！！！」

この静かな空間が続けばいいと思った。
この国の奴隷の意味を知るまでは……。

【奴隷】

現在は禁止されている。

何をしてても雇主の自由だが、主な使用方法として性奴隷に使われ、
質の良い女奴隷は高値で取引されたという。

男奴隷は――。

ああ、消えたい。

＋＋＋

私達が図書塔から出ると、カイルさんが、私を魔道具でアル様の
所に送ってくれた。

魔道具、というのはアル様のように魔力がなくとも使用者の魔力
を最大限に引き出し、使い方によって、攻撃にも転移にも防御にも
使える優れものだ。

ただし、使用できるのは高位の人間、しかも国に貢献をした者だ
けらしいです。

つまりカイルさんは凄い人なんじゃね？と改めて思ったのですた。

「はあ」

思わず溜息が出る。

いけない、ですね……。

ちらりと横を見ると、端正に整った顔立ちを惜しみなく侍女さん・貴族の娘さん・騎士（女）さん・騎士さん（男）ってこれは危ないですよ？などにさらしているアル様。私の歩幅に合わせることなく進められるその歩調は何とも単調にカッカカッと辺りに音を響かせている。

そこに私の溜息。

「……」

「はあ」

「……………」

「はあ——っ」

「煩い、不満があるなら言ってみろ」

私は別にこれ見よがしに口から幸せを放出していたわけではありませんよ？

アル様の言葉の裏には「俺の時間を割いてやってるんだ、有難く思え」くらいの気持ちはこもっていると思いますよ、ええ。

「初めて会った時もアル様は“奴隷”ではなく“下僕”といいましたよね」

たたつ、と小走りになって隣に並ぶ。

あれからカイルさんは「あ。あの人どうなっただろう……ちよつと見てきますね」

とあの人って誰ですか？と聞く余裕もないまま走り去って行ってしまったし。

「ああ！私としたことがっ！　だって知らなかったんですもの！？　まさか、まさか……奴隷が一般的に性どっ……けほっ、申し訳ありません」

勢い込んで力説していたら首をがつ、と容赦なく掴まれて締め上げられた。

いくらここにギャラリーがないからって……。

ああ、目覚めちゃいます！　　嘘です。ごめんなさい。

「無知は罪だ」

ばつさりと言いつきを遮られました。

うつ、くすん。

そういえば、リヒト様はどうしたろう？

王様から直々に命令が出たらしいけれど……。

「……その昔、第一王子の命が狙われたのは知っているな？」

いいえ、知りません。

1年生の模範的な拳手の仕方をしたのに……。

「あつたのだ。その頃は王内、いや国内は荒れていた……貴族制度がぐらついていた時代だ。その時に起こったのが“第一王子暗殺計画”という名の密書が見つかったな……その出所は……クロードリユベン家という成金家だ。金の亡者だったらしいな」

うわ、散々な言われようですね。

で、いきなりそんな話を私にしてなにか意図があたりで？

「私が独自に調べた結果——その家の娘は……プラチナに董色の瞳の美少女だったそうだ」

え？ それって……つまり。

プラチナに董色って……そう、それはつい先刻会ったばかりの方と大変似通ったデータ。

【じゅっきゅ】†涙草なんて知らない†（後書き）

奴隷の意味は適当ですゝ（＊、）ノ キャツホーイ!!
はい、異論は受け付けん! ↑（激しく自嘲、自重。

ホント……適当に生きてますんで。
ハイ。

【にじゅうわ】 † 涙草は諦めない † (前書き)

後半はリリスの過去編の続きとなっております。
時系列がバラバラです……。

【にじゅうわ】 † 涙草は諦めない †

……私が独自に調べた結果——その家の娘は……プラチナに
堇色の瞳の美少女だったそうだ……

その場に訪れるのは静寂。

わたしは知っている。

腰までのたうつ白銀の髪と奥底まで透き通った堇色の瞳を誇る大
輪ひとのような女性を。

「腐った脳ではピースすらも当て嵌められないか……」

頭上から呆れたような声が降る。

誰のせいだと思いで？

フリーズしている私を見て、発せられたのは労りの言葉だと信
じていますよ。ええ。

「リリス様は……」

「クロードリュベン伯爵の娘だ」

伯爵といえば、公爵の次に偉い階級だったような……。

結構良いところのお嬢さんじゃないですか。

でも、でもですよ。

侍女さんの話では、下働きだったって言ってませんでした？

私の疑問は想定内、とでもいうようにアル様が頷き、

「リリスは当時12歳。まだ人目には晒されていない歳だった。」

この国の社交界デビューは、12、3歳からが普通らしい。
リリスは運が良かったのかな？

「お前だから話した……わかってるな？」

と、謎の一言を残して部屋に入っていた。

いつの間にかもうそこは“黎明の部屋”の前で。
アル様の離宮ともいえる“黎明の部屋”は大きい。
アル様は後ろ盾が王家、ということにはなっているけれど……
王族ではない、というなんとも奇妙な地位。

“黎明の部屋”は中央から一つの長い廊下で繋がっているのは、
今の脱力感から身に染みてよくわかる。

だって嫌がらせのようにリリス様の部屋は正反対なんです。

“黎明の部屋”は先程アル様が入っていた部屋の他にあと5つ
はあるんじゃないだろうか？

噂ではもともと広かったのを何等分かした、らしい。

とにかく広いので、侍女さんは大変だと思う。

それよりも大変なのは目の前の現実である。

リリス様が伯爵家の娘だってー親は反逆罪だってー。

って、じゃあなんでアル様と同じ職場にいいとこの嬢ちゃんがいれんねん！

下働きになったからといって今まで何から何までやってもらっていたお嬢様に出来ることなどあるのだろうか？

でも死ぬよりマシだと思ったから？

もう駄目。貴族様の考えることは分からない。

瑠璃の部屋はアルほどではないけれど、弟子が持つにしては特上以上の扱いを受けていると思う。

ベッドや家具なんかもそう、だと思う。と、現実逃避気味に部屋の内装を説明してみたところで何にもならない。

まず私はリリス様に“ 奴隷 ”と言ったことを訂正しなければならないし。

こつこつと部屋を歩きながら考える。

リリス様は、王妃になったら王族になるわけだから……。

リリス・クロウじゃなくなる。

王族はリヒト様のように、ファンテウーヌ・リヒトとなる。

もう少し長ったらしい名前らしいが普段は魔よけの意味も込めて本名は呼ばない。

ファンテウーヌ・リリスになるわけだ。王族は国名、親から授かった名前で構成されるらしい。

ベリアル・リユンヌ、なのに対してファンテウーヌ・リヒトはおかしいと思っていたのだけれどそういう王族の昔からの決まりらしい。

大体私は帰ることが目的だ。

いくらなんでもこんな異世界で一生を終えてもいいなんて、思っちゃいない。

でも…… 本当に帰りたいのかと聞かれれば—— 分からない。

数々の難題を抱えながらも、それぞれの一日は更ける。

＋＋＋

—— 殺される。

無骨な手で捕まえられて、抗う気力がなかった。
でも死ぬ、という実感なんか沸かなかった。
ただ今までの生活には戻れないのだと理解した。
ああ、両親は……王子様を殺そうとしたの？
だから私が——償いを？
有り得ない。

王子さえいなければ……！！
殺してやる、殺して、やる。
幼い私にはそんな醜い感情しか浮かばなかった。
その王子さえいなければ。
そう何度思った事か。

「ねえ、隊長さん？私まだ死にたくないな」

ぽつりと呟いたその一言は、隊員全員の心を打った。
小さな小さな守る対象であるはずのもの。

「わ、たし……っ…死にたくないよう」

ぼろぼろと大きな董色の瞳から透明な涙草の雫によく似たけれど
暖かい水滴が拘束していた手にぽたり、と落ちた。

「——っ！」

儚げな一輪の花のようだ。
華奢な身体はたやすく手折れそうだ。
今にも消えてしまいそうで……。――。

「た、隊長！自分はここでこの少女を殺した事にしますっ！」

搾り出すように一人の青年がいった。きつと同じくらいの妹でもいるのだろつ。

皆もそう思い始めた。

その隙について……逃げ出した。

「ありがとうつ……そして——滅びてしまえ」

きつと、最後のは聞こえてない。

私を、私の箱庭を壊したこの政権を……こいつらを——赦さない。

「頑張れよ！」

後ろから声がした。

あの人たち……私の10000分の1だって苦労しないわ。

死んじゃえ！

生きて……復讐してやる！！

あの王子に！

何も知らずに私の生活を壊した王子を！

絶望させて……殺してやる！

そいつの大切なものは全部全部奪ってやる！

暗い森を走り抜ける。

私のどこにそんな体力があったのかは疑問だけど……とにかく私はある旅館の下働きとして、生きながらえたのだった。

暗い復讐を胸に——。

【にじゅういち】[†]涙草は忘れられない[†]（前書き）

造語？があるかも……。

【にじゅいち】 † 涙草は忘れられない †

朝ですね。

そこはかとなく憂鬱です。

今村瑠璃です。ぴっちぴちの女子高生！

え？なんで憂鬱なのかって？

姫の前で“奴隷”とかいっちゃったんですう！。

意味？辞書れ！（ファンテウーヌのやつで）

きつと本当の意味が分かるはずだ！

しかし朝は誰にも平等にやって来るものでして……。

ちようと身体を起こした時に、見ていたかの様に現れたアンナさんのモーニングコール。

「おはようございます、ルリ。よく眠れましたか？」

これは毎朝の決まり文句。

それに私は、

「おはようございます、アンナさん。はいすつきりです……」

と、寝ぼけてはいるけれども、朝食の献立を予想する程の余裕がいつもはあるはずなのですが……。

今日は、

「はい。おはようございます……」

と言うのが精一杯だった。

久しぶりに味わう 絶望感。学校に行きたくないときに、起きちゃったときの、あのなんとも言えない気持ち。

まさかここで味わう事になるうとは……。

「ルリ？ 大丈夫ですか？」

聡いアンナさんには気付かれてしまったけれど、お腹がすいた、と適当な理由をつけてごまかした。ごめんなさい。

あの一件以来、私は自分で出来ることはしよう、と思い、まず厨房に行こうとしたのだけれどアンナさんに首を振られた。

なんでも厨房は、毒や薬を容れられる絶好の場所なので、雇う側も雇われる側もきちん、と信頼出来る者しか上げられないという。

アンナさんがそのあと申し訳なさそうに、

「ルリを信頼していない訳ではないのです、が」

ですよー！。

だから、食事は作ってもらっている。

この時、瑠璃は知らなかった。アルが厨房に瑠璃が行かない様に圧力をかけていたことなど。

「いただきますーす！」

今日の献立は、オムレツみたいな卵を原料としている焼いたものとフルーツもどきシャーベットです。それからスープ。スープはいつもついて来る定番もはや味噌汁に見えてきます。

ああ、愛しのお米……。

食べたいのが日本人です。

因みに朝食を食べたら、アンナさんが食器を片付け始めるのでその間にベッドメイクを済ませて、アンナさんに挨拶して部屋を出ます。それからアル様を起こしに行こうかな。

初めての試みですな。思い付いたが即実行！

“黎明の部屋”のドアをノックします……………返事がありません。もう一度ノックします……………返事がありません。

「アル様あゝ！」

声をあげてみます。

「……………」

返事が、ありません。

どうでしょう？

もう…………入ってもいいですよねえ？

実は前々から入りたかったんですわ。ホホホホ。

「アル様…………入りますよ」

ドアの前で一通り身もだえるとカチャリと瑠璃はドアノブを回した。そうして、半開きにしながら中を覗き込む。

やはりいつも通りモノクロで統一された部屋が目映る。

乳白色の床に敷かれたふかふかの絨毯。

壁は一面真っ白でしかし家具は全て黒い。

天蓋付きの大きなベッドの中を覗き込むと——いた。

「ア、ル様？」

横向きに寝ている姿はとても可愛らしい。少し乱れた髪がなんとも色っぽい。時節つく吐息が——！エロいっ、なんだ！なんなんだ。いても見下す様に私をみる深紅の瞳も閉じられて、縁取る黒い睫毛はとても長い。透き通るような白い肌も、なんかもう——負けた気がする。

美形に囲まれて自己嫌悪に陥りそうになる日々を異世界にきてまで何故、体験しなくてはいけないのでしょうか？

「アル様——！起きて下さい」
少し華奢な身体を揺すってみる。

「っ——」

それに声にならない何かをあげて、抵抗するように身をよじる。
（ああっ、可愛いっ）

「アル様」

面白かったので、ほっぺを突いてみる。
すると嫌だ、というふうに眉を寄せた。
低体温の人は朝が弱いつて本当だったんですね。
ぐらぐらと強めに揺すると、

「……………だ、れだ」

と返事をしながら不満げに瞼をゆっくりと上げた。
だんだんと隠されていた深紅に輝く宝石が姿を現す。

それは暗い部屋の中で綺麗に光って、とても綺麗で神々しかった。
「瑠璃です。私は瑠璃です」

妖しくに輝く紅に目を奪われながら、答える。

「……り、い……？」

いつもとは違う掠れた声が甘えているように聞こえて――。
消えてしまう……。アル様が消えてしまう。そんな錯覚に陥った。
思わずぎゅっ、と肌触りの良いシルクのアル様の寝間着を掴む。

「……！？」

幼い子供が驚いた様な顔が背中の方から現れる。
睫毛に縁取られた宝石が一際、輝る。

「教えてください」

知りたい。

この人をもっと良く……。容姿とか、身分とかどうでもいいから……。

教えて。

カーテンを閉めきつた、目に痛い部屋の中での、心地好い――沈黙。
隣には私のご主人。

最初見た時、魔王の様だと思った人。

リヒト様なんかよりも威厳がある、と思った。でも、その人には好きな人がいて……。でもその人は姫様だった。

それを聞いた時、胸がズキリと針を指したように痛くなったのは――
――きつと嘘。

いつも私がついてる小さな嘘。まだ寝ぼけているアル様は、数分のあいだにまた寝て、また起きた。

疲れて、いるの？

「……………なにが聞きたい？」

暫くして、私の疑問に答えるように、優しく問われた。
ひんやりとした手の平が、握り締めた己の手に触れる。

吃驚して目を見開いた私の網膜に映ったのは優しく微笑んだアル様だった。

「リ、リリース様と……………出会った時の……………事、とか……………アル様の……………ことを」

微笑んだアル様なんて見たことがなくて、もしかしたら……………夢の中にまだ片足つつこんでるのだろうかと思いました。

「リイの事？ 自分の事を私に聞いてどうする？ おかしな奴だな」

その一言が残酷に鈍く光るナイフに見えた。

それは私がついていた小さな嘘を壊して、壊して切り込んできた。
そうか……………私はアル様が——好きだ。

好きなんだ。どうしてこんなに単純で明確な事が分からなかった。
認めなかった自分が悪い。

だからこんなに胸が痛い。

きっとアル様はまだ夢だと思ってる。

幸せだった頃の幸福な夢の余韻に浸っている。

だつたら壊さずにそつと温めよう。

リリース様の穏やかな口調を真似て話し掛ける。

「そうね…じゃあ、出会った頃の私を教えて？」

私がリリース様を真似て言うのと、満足そうに目を細めた。

ああ、これはリリース様にしか見せない顔だ。

この甘やかな幸福そうな顔は。この深紅にいつも渦巻いていたこの倦怠と諦めを取り除けるのは彼女だけなんだ。

——私じゃ…駄目なんだ。

明らかな敗北。

「リイは…気付いたら雇われてた……天使みたいに輝いてた」

アル様の口調は段々と子供のソレになっていく。

きっと夢の中でリリース様との昔を思い出してるんだ。私をリリース様だと誤解して——…。

突如言いようのない感情に捕われた。

アル様に気付いて欲しい。

私だと……瑠璃だと、気付いて欲しい。それはとても身勝手に、我が儘なアル様の幸せな夢を壊す覚悟が貴方にはあるの？

「……ない、わ」

震える声で呟けば不思議そうに眉を寄せた。

「どつした？——っ！！」

微睡んでいたアル様が、驚愕した顔になる。
ばれちゃったかぁ……。

「申し訳ありません。暫し寝顔を拝見してしまいました」

いつもの通りに出来ていた筈だ。なのに……。

「よせ、惨めになるのは私だ……」

いつになく弱々しい口調でアル様が言う。

その瞳には倦怠と諦めがいつものように渦巻いていた。

「まだ……好きで……すか？」

震えなかった私は凄い。

「ああ、愛している」

きつぱりと断言した。

切れ目の瞳を妖しく光らせる我が主人は、まだ愛していた。

——最低な女の事を。

【にじゅういち】†涙草は忘れられない†（後書き）

造語……辞書れ！

多分？？

違ったらすみません（ゝ・ω・ゝ）

【にじゅうに】 † 涙草はN i g h tを失う †

私だってリリス様の事を嫌いになんてない。

「でも……」

私の予想から行くと——バッドエンド。

みんな、苦しい思いをするだけ。

だけど私は赦さない。……赦せない。

私が最初におかしいと思ったのは、何故2人の夜の会話をピアさん達が、侍女如きが知っていたのか、ということ。

それは、リヒト様とリリス様が故意に流したのではないかということ。

そう考えれば、つじつまが合う。

あの夜、というか……リリス様が殺されかけたとき、彼女は王子に何を思ったか？

復讐。この一言に尽きると思う。

私の身勝手な憶測だとまだリリス様は王子を許していない。

それを分かった上で婚約したのだろうか……？

自分の命を狙っていると分かった上で？

ない……ない、ないよ。

だったらやはり、自分から誘ったのだ。

アル様を——餌にして。

ああ、赦さない。

あの誕生祭の日。

アル様に芸をさせて、自分を密やかに王子の目に止まらせ、求婚する。

勿論、自分がクロードリュベンの一人娘だということは避けて……。

でも今アル様は、見つけた。

白銀に莖色の少女を。20歳の姫様の正体を。

アル様はどうするつもりだろう？

告発して、自分の嫁にするつもり？

それとも殺すつもり？

答えはきつと前者に傾く。

「なんで私ここに居るんだろう？」

なんでこんな所にいるんだろう？

私には順応能力、つまり何事にも無関心なスルースキルがある。

だからって……好きな人に好きな人がいるなんていう、最早、恋愛にすらならないこの状況下を無関心でスルーするのはどうかと思う。ならいつそ、リリス様を壊してしまおうか？

そう思う私は、醜い。

大体、私という少女は、対して特筆する点のない平凡を絵に描いたような平均女子であり、美形や有能、頭の切れる人がいるこの場所にいてはならないのだ。

釣り合わない。そんな事をいえば、私はきつとアル様に好いて貰おうなどという考え自体が間違っているのだろう。

ああ。

正直言ってさつさとリリス様が王子つまりリヒト様を暗殺してくれればいいのに。

リヒト様が死ねば……そう考える私はホントに化物だ。きっぱりと言い切られた時、心が死んだのだと思った。

その後、お辞儀をして退出した。逃げるように。

＋　＋　＋

リヒト様の婚約者になれた時、暗い喜びで胸が震えた。これでアイツに復讐できる。

私はどうなってもいいけれど、殺すまでは死ねない。絶対に――…。

また明日ルリという異国の少女に会おうと思う。

アルが名を呼ばせているあの娘は……なんだか危険だ。

儚い美貌を薄いベールで隠した姫君は、窓辺に座りだんだんと明るくなっていく庭を眺めた。

＋　＋　＋

「アル様……リリス様は」

「ああ、憶測だが暗殺を企てているだろうな」

私は今アル様のお部屋に居ます。あの後……また呼び出されました。絶対に解雇のお話だと思ったのですが……。

「お前は、姫に似ているのかも、な……お前は姫をどうしたい？」

いつも非道なる手段で持って私をいたぶるご主人様が、今日は優しい、気がします。

「好きですよ？」

間髪入れずに答える。

私が演じるのは馬鹿な女の子。

「……………そうか」

そう答えたアル様がどんな顔をしていたのか……私には分からない。ただアル様の深紅を見るのが恐ろしかった。

「はい、あんなに綺麗な人……見たことはありません。私の世界でも」

「嘘はつくな、命令だ」

「——っ、！！」

嘘、嘘。

なんで——…。

「それとも詰ればいいのか？化物、と」

いつになく優しいその口調が怖い。
追い詰められたウサギさん。

憐れオオカミさんに食べられてしまいました。
そんな一文が浮かんだ。

「――殺したい」

ぼそり、と吐き出す。

「大好きな人が好きな人――なのにソイツは大好きな人を餌にした
最低な女なのに、な、のに好きなんですって、愛してるんですって
っ……目の前で告白されちゃいましたよ……私を見てはくれないの
にっ」

気付けば前には瞳を見開いたアル様。
顔を涙でぐしゃぐしゃにした私。

ああ……無情。

「ごめんなさい嘘つきました今の嘘ですごめんなさい」

早口でそれだけ言うと、死ぬ気で笑った。来た時と同じ様な、心を
見せないペルソナの笑み。

「あとーリリス様はアル様の思った通りにすればいいんじゃないで
しょうか？きつとバレてるとは思ってないでしょうから」

そういつて逃げようとしたら、腕に激痛が走った。

ちょ、そこ街で怪我した方です、アル様。

見るとまだ微妙に完治していない腕を白い手が捕まえていた。

「まだ話は終わっていない、我が奴隷」

ど、奴隷？

アル様は大変ご機嫌麗しい様で、捕まえていない手で私の顎をゆるりと持ち上げた。

へ？

なんだかヤバ気な雰囲気……。どうしよう？妖しげなその様は妖かしの様。

「それで……。？ お前は私に好かれないのか？」

私は今きちんと無表情を保てていうのでしょうか？

多分……。無理。だって私男に耐性ないモーン……。うん。

何時になく狼狽^{うろた}える私が珍しいのかクツクツと笑った。
彼は何を言った？

「あ、わた……。好きですけど……」

「——けど？」

WOW！今日は気が長いよ！魔王様。

どうしよう？

言うべきですか？

「だって、無理に好きになってもらっても嬉しく……。ないですから」

これは本心。

好きな人と一緒にいる時ぐらいは、仮面を剥がしていたい。

「なら……。私は努力などせずともお前を好こう」

何時になく真摯な目で見つめられて、

「うえ……？」

と変な声を上げてしまった。

何時もならそこで、首を絞められているはずなのに今日はふっと、笑われてしまった。

アル様……どこかぶつけたのだろうか？

激しい動悸は収まることなく、その上に甘やかされるように見つめられれば、なんだコイツ？と思うのは当たり前のことです。

まさかあのアル様が睦言を囁くなんて誰が思う？

からかわれてるんだ。

きつとそうだ。だってアル様にはリリース様がいるもの。

「本当は理解していた。私は利用された駒だったと……それでも、きつと愛したかったんじゃないか？」

どこか冷静に自分の現状を報告するアル様。

寝ぼけているのですか？

「じゃあ……何故？」

「分らん、ただ腕に触れたいと、お前に触れたいと思った……
……それだけだ」

わぁお！

驚き、桃の木、山椒の木。

これは俗に“KOKUHAKU”と言う奴ですかい？

目の前には少し不機嫌そうな顔のアル様。

これは恥ずかしがってる時の顔だと……思います。

「じゃあ、行きますか！Queenを倒しに！」

私は喜びで胸がいっぱいになった。

こんなに素敵な人を放っておいたリリース様がいけないんだ。
はっ、精々後悔しなさいな。

「アル様、最高に可愛いです」
もう、逃がしてあげません。

リリース様。貴方のN i g h tを奪いました。

【にじゅうさん】† 涙草は無様に暗殺を企てる†（前書き）

評価などなど、有難う御座います。

麦茶の原動力ですw

R? 表現あり。

【にじゅうさん】 † 涙草は無様に暗殺を企てる †

「なっ……………っ！」

ああ、最近の貴方はとてもいろいろな表情をしていますね。

「では……………！！」

私は一度、部屋に帰ってリリス様を吐かせる計画を練ろうと退室しようとした。

なのに、なのがいい……………。

なんでベッドに引きずり込まれているんでしょう。

説明をお願いします。ええ、切実に。

「ア、ル様…？」

しかも何故、アル様は私を全身全霊で抱きしめているのでしょうか？
額に掛かる不思議な色の髪。見た目は堅そうだけれどサラリと揺れるソレは、とてもくすぐったい。薄い色の唇は、楽しそうに上がっている。

「いいだろう……………？」

このくらい。と呟いて……………。

どちらからか分からないけれど……………私達はキスを交わした。
最初は優しいただ触れれば、離れていくようなもの。だけど触れられた唇は溶けるように熱い。

「んっ……………！」

だけどいきなり食らいつくようにキスされた。
驚いてついあげた声は私の声じゃないかのようで。

恥ずかしい。

羞恥心が心を覆う。そんなこと気にしないかのように、アル様は冷たい手で私の髪を透いた。

余裕だな……。

私は酸欠になりながらも目を開けた。いきなり近くワインレッドの火山みたいな瞳が見えた。なんで目え開けてキスしてんの、私達……。

綺麗な深紅は焦がれるように私を見詰めていた。

あ、酸素が——…。

そう思った時、無意識に空気を求めて開けた口になにかが侵入してくる。

「んあ——やつ」

生理的に目に涙が浮かぶ。

でもアル様は、その舌で私の口内を掻き回し、掻き混ぜてくる。私の口からは絶えず信じられないほど甘い声が漏れる。

それに満足するかのようにアル様は瞳を細める。

そして——やっとなんて終わった。

アル様は余裕のよっちゃんで猫みたいに私の唇の端を舐めた。やけに官能的――。

息が切れて酸欠な私はそんなアル様の行動に慌てて身を起こした。

「甘い……」

ぼつりと呟かれた声に私は、きっと沸騰寸前の顔をしていたと自分です。

なんでそんな恥ずかしい台詞を言えますね……魔王様。

「余裕ですね……」

とジト―つと厭味を言つと、涼しい顔で、

「当然だろう」

と言われました。

ハイ、貴方は如何なることもしてしまふ天才ですよ。

「むー、」

私が唸っていると、ふつと笑つて、

「私の愛しい人。もう離しはしない」

そんな殺し文句を耳元で囁いて、

「姫に呼ばれてるぞ、瑠璃」

そう言い残しすと着替えにいつてしまった。
うわー。放置プレイ……。

「リリース様が……」

いまは邪魔しないで欲しい。

リリース様よ。

上機嫌で部屋に戻り、身嗜みを整える。

呼ばれているのは私だけ……？ なら早くいつて、早くもどつてこよう。

でもその為には手早く潰さないと。

＋＋＋

「瑠璃です」

短くそう言ってから部屋のドアをノックする。

ここは姫の私的な部屋らしい。それでも守るように騎手さん、侍女さんが立ち、身体検査からなにまでリリース様にとっての危険因子と見做された者は、通されないのだとか……。
なんというダンジョン！！

「入って」

鈴が揺れたような声。

「失礼します」

お辞儀をして前を見据える。

陽の光を反射して輝く絹のような髪を、ゆるい三つ編みにして微笑んでいる女性がいた。

彼女こそ今回の黒幕。リリス・ほにやら・クロウ様である。

この国では名前はあまり意味を持たないので……リリス・クロウだけ覚えておけばいいのじゃないですか？と勝手解釈。

大体嫌いな人の名前を覚えてるわけじゃないですか？ははは。

さて、今の私は無敵です。

何故か？アル様の愛を得たからです！

ということでN i g h tに捨てられたQ u e e nなんて敵じゃないのです。

「どのような御用でしょうか？」

「思い上がらないで……平民上がりか」

は？

一瞬時が止まった。

リリス様の美しいお顔を凝視すると、そこには私に対する憎しみが有り有りと浮かんでいた。

「申し訳ございません」

瞬時に謝ると、一瞬彼女の顔が歪んだ。

それから、いつもの穏やかな顔からは想像も出来ないほどの毒々しい笑みを浮かべた。

（うわぁ……怖い）

「アルにちよつと優しくされてるからって思い上がらないで？」

「心得ております」

瑠璃は人の真似が上手いだけに、どうすれば相手を煽れるか熟知している。

こういう貴族社会の場合、何かを一介の弟子に過ぎない私にしてもリリース様が咎められることはない。

「リリース様……リヒト様が心配されておりました。どうぞご自愛ください」

案の定、彼女は顔を真っ赤にして、

「うるさいわっ……今日はお話があって呼んだのよ」

起こったあとに取り繕うように、にっこりと笑ってソファに座らせる。

紅茶が用意されており、口に含むととても熱い。

火傷しそうなほど、と言えば分かかって頂けます？

危うく声を上げそうになりました。

（悪女っぷりには目を見張りますよ、ええ本当に……）

半ば呆れたような視線を感じ取ったのか、リリース様は晒す。

（馬鹿にされたぁ……）

「あなたを呼んだのは他でもないんです……お願いっ、私からアル

を取らないで？」

懇願するようにテーブルの向こうから見詰められても何も感じない。心は逆に冷静になっていく。

何が取らないで？だ。今まで散々縛り付けていたくせに……！

「……リヒト様は？」

私が困った顔で聞くと、ハツとした顔になり慌てて。

「でも…アルは…そう、幼なじみみたいなもので……」

「幼なじみだからって…恋仲ではないのなら」

「平民が口をだすことは許されません！と・に・か・く！わかりましたね？」

完璧に納得させたという傲慢な表情をしている姫様は私の次の一言で固まった。

「へえ……リヒト様が浮気を疑ってたのはやはりリリース様がアル様を好いているからなのですね？」

あの時の彼女は実に面白かった。
ぴきりと、固まったまま、

「ち、ちが…！」「リヒト様はお元気ですか？」

「へ？」

いきなり話題転換されて戸惑わない人ではないと思う。

「いえ、リヒト様って数年前、暗殺されかけたことがあるでしょう

？近頃会っていないので……毒でも盛られたかと……」
「なんでっ……！知って「冗談です」

にっこり笑っている。

鎌かけただけで……こんなになるか？
ありえな！。

「あっ………！」

「それで、私調べたんですよ……暗殺しようとしていた貴族のお・
名・前」

びくりと分かりやすく肩が跳ねる。

あーあー、今までの余裕はどこへやら。

「クロードリュベン家って言うらしいですよ？ サイターですよね
……リヒト様いい人なのに……」

「やめてっ………！」

「何故？」

「何をしたいの！？」

「リヒト様を殺したいのですよね？」

率直に聞く。

「っ……そ、そうよ……なによ、悪い！？」

をいをい。

お前……緊張感なさすぎだろ。

私がチクったらどうする気だよ？

「私が殺してあげましょう」

「……本当？」

「ええ。代償は貴方。」

こんなのに引つかかる人っているのだろうか？

居ないでしょう？ていうか……と、私は首についているペンダントを見やる。

これには録音魔法とでもいうべきものである魔法がかけられている……らしい。

先ほど言った「っ…そ、そうよ…」なによ、悪い！？」が物的証拠になる。

でも私の目的はアル様の前から消すこと。

「死ぬってこと？」

たっぷり考えましたね？

「まあ、そうなりますね」

私が王子を殺せるとでも思っているのかな？
おバカちゃん。

「っ……い、や……！」

おやおや。死ぬのが怖くなりましたか。

「そうですか……契約不成立っ」と

ま、リヒト様にこれ見せれば死ぬか、僻地に島流し位にはなってくれるでしょう。

なら、いいか……。

「この事は他言無用……あ、契約する気になったらいつでも来て下さい？　大歓迎です」

にこりと嗤う。

ああ、馬鹿ちゃんだなあ！。

所詮…復讐なものね。

「失礼しました」

啞然としたリリス様を、残して立ち去る。

【にじゅうさん】† 涙草は無様に暗殺を企てる†（後書き）

序盤からスミマセン（；。ㇿ）ア…

リリス様が阿呆すぎな件は置いて……まあ、一応貴族の箱入り娘でしたし？

お許し下さいいいいい（；。ㇿ）y—

【にじゅうよん】† 涙草は全てを失う†（前書き）

最近、グラグラですね…。学校でも時々、おっきいの来ますし。

【にじゅうよん】 † 涙草は全てを失う †

胡散臭い目で見られるのは、もう慣れた。

そりゃあ、一介の弟子なんかが姫様とお近づきになってる事自体可笑しいことだとは思いますが……。

いくらなんでも……そんなに睨まなくても……。

ま、いつか……。君達の敬愛している主様はアル様の判断によって生かすも殺すも自由なんだよ？

と日本語で呟いてみる。時々呟いていないと忘れそうになってしま
うから……。

いい加減この長い廊下にも慣れた。

廊下を俯き加減で歩いていると、知っている声が聞こえた。

「ですから……なぜか、と……」

おかしいなあ。

いつも余裕そうなカイルさんが切羽詰ったような声で何かを叫んでいる。

なんだろう？

私はリリス様の部屋から一番大きい建物、つまりは中央に差し掛か
った辺りだった。

中央は真ん中に野球が余裕で出来るカンジのスペースがあつて、そ
こからいろいろな道に枝分かれしている。

その隅っこの方を見るとカイルさんの美しい長髪が目に入った。
カイルさんは、お偉いさんと話しているらしい。

カバに形容するのさえカバに申し訳ないような男が、カイルさんを見
上げていた。

私のおじい様くらいの年齢のきつとファンテーヌの古カバでしょう

……。

「だがのう……それを種に……た……じゃないわい」

ま、私には関係ないか……。

そう思い古カバに付き合っているカイルさんに心から同情し、胸中で合掌した。そして、瑠璃はくるりと背を向ける。

早く……逢いたい。逢いたいっ！

小走りで大理石の廊下を走り抜ける。最近は息切れもしなくなってきた。

ドアをばたんと開ける。

そこには予想通りアル様がいて……、思わず顔がほころぶ。

「アル様……」

瞳を閉じていたアル様は、静かに目を開けた。

「姫は……？」

「あの人、馬鹿ですねえ……」

つい、本音が出る。

が、今はもうアル様は、苦笑いしただけで終わるほど過去の人となっている。

私が呼ばれてから、もう2時間はたっている。
そのなかでアル様の中で何かの整理が付いたのなら私はうれしい。

胸元のペンダントを発動させる。

すると、リリス様と私の声が部屋に流れた。

【「リヒト様を殺したいのですよね？」

「っ…そ、そうよ…なによ、悪い!？」】

これだけでリリス様の運命は狂う。

「どうでしょう?。」

「……告発する」

——!

その時が来るのを待ち望んではいたけれど、やはり少し……怖い。
人一人の人生を狂わすのは怖い。

「私が調べはじめた事だ……今まで明るみに出なかったことが不思議な程だ」

そう静かに言い切って、

「私が……狂わせた。私が、姫の、リリスの人生を狂わせる」

そうして笑った。

それはきっと、私に対しての優しすぎる気遣い。

魔王様が優しい?ありえねー、と思っていた私はどこにもいない。

「ありが、とうございます。でも、私も一緒です!」

私がそういうと窓を見ながら、

「感謝する」

そう、小さく呟いた。

それから1週間後。

慌ただしく王宮の内政が入れ替わり、リヒト様が憔悴しきった顔で国民に挨拶をして姫リリスが島流しにされたことは、後世に語り継がれる戯曲となった。

【にじゅうじ】始まる？（前書き）

新学期だというに風邪をひいた麦茶っす。ハイ。
皆さんもお気をつけて。

【じゅっ】始まる？

本当に慌ただし1週間。

慌ただしほうが気が紛れてよかったけれど……。

「はあ……」

ここで1分間に30回の割合で幸せを逃しているこの国の第一王子を見やる。

なぜかこの人はリス様の一件があつてから、悩み事があつたり、愚痴を言いたくなつた時に私に話しかけるでもなく勝手に人の部屋を逃げ場所に使うのだ。

「あああつ……！リヒト様何があつたんですか！？」

近頃では溜息をあまりにも哀愁漂わせてつく王子を見ていられなくなつて、声をかけてしまう。

前は、ピーチクパーチク話してくれたのだけれど、最近は、

「いや。ルリには言えないんだ。top secretなんだ」

英語で言えば何でもカッコ良くなると思ふなよ。

バカ王子が……。

「じゃあ、帰れ……って下さい」

「ふふふ。今、本音出てた」

あ。ウザいかも……。

「いえいえ……ま、ア」

「転移。」

静かな声が聞こえたら、全力ダッシュで逃げましょう、主
にリヒト様

「あ……ア」

リヒト様が驚いた顔になり、アルさまの名前を呼ぶけれど容赦な
くその体は魔術の粒子とともに消えていく。

「瑠璃……ただいま」

「おかえり、アル様」

今はアル様の前でだけ敬語は外しているし、忘れてしまっていた
自分のホントウの個性？というやつも取り戻せるように頑張ってい
る。

アル様もなるべく優しくわたしに接してくれる。

とてもうれしいことには変わらない。

「あれも五月蠅いやつだ」

あれ……って。

仮にも一国の王子でしょう？仮にも。

最近、リヒト様は本当に煩わしいと、アル様はことあるごとに言
う。

でも、心配も1%くらいはあると思う。

「そーいえば、カイルさんが慌ててたよ？」

私が最近よく見る光景の一つ。

カイルさんが必死になにかをしている姿。

ただし、必死というか優雅にしか見えないけれど…わかる。
目が焦ってる。

私も上手く真似できなかった時は、あんな目になってた。

「……そうか」

物憂げに呟くと、

「すまない。少し出る」

そう言うて来たばかりの私の部屋から出て行った。

* * *

「カイル」

私がそう呼ぶと分かり易い程、反応する肩。
なにを隠している。

「カイル……言え」

またしても細い肩が震える。

いつもと違うな……。

まず、俯いているその顔にはいつもの柔らかな笑みはない。
焦りと絶望が入り混じったような表情。

「……っ。申し訳、ごいません…私は、私はっ…無能です！」

ふるふると瑠璃が怖がったときのように体全体が震える。

カイルは従来責任感が強いが…ここまでカイルが追い込まれるなんて。

「何があつた…言ってみろ」

「隣国…和平同盟を結んでいるカスファイノ国っ…第5王女がルリ様につ……」

……??

「簡潔に言え」

その後。

覚悟を決めて様に私の目を真っ直ぐに射抜いたカイルは、こう言
った。

「カスファイノの第5王女がルリ様に似ている。しかも今現在、第
5王女のシムリア様が失踪なさっております、です」

【どうせつらく】廻る

静かに朝を迎えているのは、このわたくし、今村瑠璃さんです。
日本のカーテンよりも少し厚めの、美しい刺繍が施された布。それをすぐ横の今、自分が横たわっているベッドから手を伸ばして引く。

そうすると眩しいと感じるほどの光が目を焼く。

「まぶっ！」

眩しいっすね。

基本的に夜行性の私は、目が弱いのです。
光に――。

「くわぁ……おはようございまーす」

「おはようございます。ルリ」

今日も今日とて、アンナさんのお目覚めコール。
気分は爽快。

「今日は…魔法の練習を、します」

「そうなのですか。分かりました」

ゆつくりと微笑むアンナさんは大輪のバラのように美しいのです。
た、まるっと。

「魔法円書くの相変わらずめんどくさい……」

ぶつくさと文句を垂れながら、ペンを滑らせる。滑らないけど……ごわごわ、していて。

言語魔法は、魔法円なんか覚えなくてもイメージで出来るようになった。

慣れればそんなものらしい。そう考えると、この広大な敷地全てに魔法で結界やらトラップをしかけているアル様は本当にスゴイ。

「今は、集中っ……！」

魔法をしていると余計な事ばかりが頭を占める。

言語魔法の次に初歩的な、浮遊魔法。つまり物が浮く。サイコキネシスみたいでスゴイと思ったけれど、結局はイメージして構成しないと行けないから知っている物の方が浮かせやすい。

そこに、物の重さ、形状、などは関係ない。

「おらあっ！」

今は小さなコーヒー皿を浮かせるので精いっぱいだ。
しかも数秒。

その結果をみて思わず溜息をつく。

「アル様あゝやっぱりできない」

と黎明の部屋の前まで押しかけて扉を破壊した。

いや違った……扉を丁寧に3回ノックした……はずだった。

とゆーか、扉自体が忽然と消えて無くなっている。は？——は！？

「よおし！夢だ！うんっ。」

そう笑顔で言い、また現実を直視する。

.....。

はい、なあくい。

綺麗な胡桃色のドアがなあくい！

「なんですとおー！？」

つい乙女の恥じらいやらなんやらを捨て、叫んでしまった。

* * *

「私を連れてきて何をする？」

低い、低い声が神殿に響く。誰もが息を飲む、怒りだった。

「姉貴を返して貰おうか」

まだ若く、ハリのある威勢の良い声。

先程の静かな声とは対照的だった。

「.....」

それに声、ベリアル・リユン又は沈黙というなの拒絶で答えた。
神殿に重い沈黙が広がる。

「姉貴をシムを返せ！」

怒号が響く。

ベリアル以外は皆、びっくりと肩を震わせる。

「何を言っている、この国にそなたの姉とやらいはいない」

「嘘を吐くな！我が国の第五王女シムリア・ヴィセ・カスファイノを返せえっ！」

ついに手を振り上げたのはカスファイノ第三王子のリクシャル・ヴィセ・カスファイノだ。

カスファイノ国は、1年を通して蒸し暑く、果実が豊富な代わりに、重大な水不足を訴えている国だ。

そこで、独自資源の果実や、古くから伝わっている刺繍布などを水と交換している。

古くからある同盟。物々交換というヤツである。

……その第三王子リクシャルは、極度のシスコンであるからして突然失踪した姉の事を気が狂わんばかりに探していた。

ココア色の肌は艶を失い、頬も心なしか不健康に見える。

「姉貴と同じ顔の娘がこの王城に出入りしているというではないか！」

衰弱した体で精一杯、訴える。

しかし、目の前で縛られているはずの魔王はその訴えに興味を失ったかのように、顔を背けた。

「……」

またも重苦しい沈黙。

そこへ――。

「お初にお目に掛かる。カスファイノの第三王子よ。良く来てくれた。ゆつくりと休むがよい」

澄んだ声が神殿内の籠った空気を一掃する。

「国王陛下――！」

神殿内の誰もが彼の人の登場に驚いた。

彼は大層な変わり者で、滅多な事でもないかぎり執務室から出て来ないような国王なのだ。しかも冷静で、冷静。息子のリヒトとは似ても似つかない。

「リユン又よ。そなた、何か面倒な事になっておるのお……」

近隣諸国と戦乱になりかねない問題を“面倒な事”と称する事が出来るのはこの男だけだろう。

「そうですね、陛下。大変、面倒だ」

拘束されながらも、こう言い放てるのもこの魔術師だけだろう。その場にいる誰もがそう思った。

「国王っ！これは私の妄想などでなく事実なのですっ！！姉を、我が国の第五王女シムリア・ヴィセ・カスファイノをお返し下さい」

先程とは打って変わった王子相応の態度と口調。

そこに冗談やからかいの声を上げるものが居るとすれば……、

「ククク、そなたの姉が？ プツ、何故居ると分かる？」

我が国の国王陛下、万歳…。腹を抱えながら、笑いこけそうになる三秒前。

「……っ！見た、と。姉上と同じ容姿の少女を見たと！」

真面目な顔で切望する。しかし、ファンテウーヌを一代で飛躍させた“冷静国王”は言った。

「それは、確証があるのか？もし間違っていたらそなた、責任を取れるのか？ 恥を知れッ！！」

怒号に誰もがピシリと固まる。今まで笑いこけていた国王が、国王らしき威厳を湛え、隣国の王子を見詰めていた。

「！？」

「よいのか？もし我が国と戦をしてそちの国にメリットがあるとは——到底思えんが？」

にやにやと悪戯っ子のように笑う国王陛下。

先程、怒鳴った人物とは決して思えない。

「——申し訳、ありません」

震えた声で、自分のした行動を詫びるリクシャル。今になって事の重大さが分かってきたのか……。

自分のした事が余りに幼稚で恥じるべき痴態だという事も。周りにいるリクシャルの付き人も、青い顔で震えている。

こちらは恐ろしさで、だが。

「——帰らせて頂く。」

今まで黙って縄に拘束されていたベリアルだったが「こんなもの……」と、呟きながら何かを唱える。
その瞬間、縄は青白い炎に包まれて焼き切れ、灰になった。それを見てまたも戦慄する付き人＋王子。
あれが縄ではなく自分だったら、と考えると震えが止まらない。少し不憫でもある。

* * *

「アルさまあゝ！どこに隠れてるんです？おゝい！ポチい」

ふざけ半分、真面目半分でアル様搜索をしています今村瑠璃ですつ。

「……………ほお、少し瑠璃とは話し合いをするべきか？」

後ろから声が聞こえますよー。地獄の番犬を従える魔王様のお声があああつ！

怖いっ、こ、わ、す、ぎ！

「……………ごめんなさい」

俯いて呟くと、腕に衝撃。

——拘束魔法？

ああ、怒らせた。

すうつ、と身体から血の気が引いていくのが分かる。

これから来る衝撃に耐えられりようにぎゅうつと目をきつく閉じる。

「お前は——私の物だ」

でも身体に掛かった負荷は、なくて。むしろ温かい何かで。不思議に思っただけで目を開ける。

「？——はい。私はアル様の……ど、奴隷……です」

じ、実際そうだし——？

いや、まだ大人にはなっていない！登っていない！足掛けただけ！

「そうだ——どこにも行けない」

どこか不安そうに言葉を紡ぐアル様に可愛いなどという感情を持つてしまうのは私だけではないはずだ。

「アル様、私はどこにも行きませんかよう？」

そう言って、ふわりと笑った。

「ああ、——何でもない。」

どうしたのだろうか？

頼ってくれるのは大いに嬉しい。

「大丈夫です。一緒に寝ます？」

冗談のつもりでいった言葉は——現実になりました。

「寝る」

あれ？

デジャヴってよくあるな、
と思った私。

【にじゅうろく】廻る（後書き）

変なところで切ってますみません

ε || ε || (; . .)

【にじゅうなな】来る（前書き）

登録が支えです。

ありがとうございます

了「力」
「」
「」
「」

【にじゅうなな】来る

零れる柔らかな光。

外からは、何の音も聞こえない程、静かで――…。

「瑠、璃……り……」

時節、薄い唇が小さく動き、言葉を紡ぐ。

愛しさに満ち溢れた、声。

白い指先が、黒髪を一房掬い取り、もてあそ遊ぶ。

くるくる、くるくると。

しかし、一向に起きる様子がないので声の主は優しく頬に唇を押し付けた。

すこし黒髪の影は、身じろぎをしたように見えた。

自分の行為に反応してくれた事に声の主は歓喜し、また口づけた。

そんな穏やかな昼下がりに。

壊れたのは突然だった。

「失礼っ！」

* * *

物音で目を覚ますと、仄明るい光に今村瑠璃さんは包まれて、横

たわっていました。

「五月蠅い……カスファイノは礼儀さえ習わないのか？」

起きた瞬間からアル様の声が聴けるなんて……しあわせ。

けれどその声は少し、いや……かなり苛ついている？

……な、に？

誰かと口論してる？

「瑠璃が起きる……静かに口を噤んでいろ」

静かで、耳に心地よいアル様の声が聞こえる。

ずっと、喋っていて欲しいです……。

「っ……うっあ！」

驚いたような声がして、それから辺りがしーん、となった。

「起きたか……？」

はい。そりゃ、もうさっぱりと。

「瑠璃……お前の職業を言え」

いきなり……なんででしょうか？　しかし私は奴隷ですから、

「ベリアル・リユン又様の弟子、ですが」

「そう、だな……すまない」

「い、いえいえ」

謝った！？

あのアル様が！？ 聞き間違い！幻聴？
そうだ。そうに決まってる。

「…ということだ。第三王子リクシャル殿、去れ」

だ、第三王子……ですか！？ 何処の国の！

「ごぼっ…けほっ……その声はっ姉上っ！シム、シムっ！！」

いきなり悲痛な声で求められて、つい「えっ？」と言ってしまい
そうになるけれどこの15年で鍛えられた私を嘗めないでいただき
たい。

戸惑った顔をしてみせた。

「ああっ！俺が誰かも分からないほど恐ろしいことをされたのです
ねっ！なんと……姉上、俺が来たからにはもう安心です！帰りまし
ようっ！」

あ、れ？

逆効果だった？

子犬のような目をした青年は、ベッドの天幕を音を立てて、捲り
あげた。

「姉上……？すこし背が縮まりました？」

ベッドから急いで降りた私を上から下まで眺めまわした後、首を
傾げた浅黒い肌と、黄金の瞳をした健康そうな青年を殴りたくなり
ましたね、ハイ。

お前さんの姉上はそんなに童顔なのかい？

君より年上で、背も私よりあるのに顔同じって……童顔口リッ娘
と一緒にして欲しくないですが。

「申し訳ありません……どちら様でしょうか？」

私がそう言っていると、彼は驚愕した顔になり、

「え……？ 姉、貴……だよな？ 少し背が低くなって、肌も白くなつて、少し華奢になって瞳と髪の色も少し違うけど姉貴だよな！？」

……。

「それは別人だろう？」

ありがとうございます、アル様。

私も今、笑顔を保つのが精一杯です。

「完璧、べ、つ、じ、ん、だ、ろー！」

ついそう叫びたくなってしまったのですよ。

「で、でも……顔と声はそっくりなんだ！」

ああ、なんですかあ？

この人……。

精神病者かなんかですか？ 妄想癖でもあるんですか？

「あ、あの……ごめんなさい。えと……」

「俺は……」

ぐうつ、と言い募る青年。

確か、リクシャル様。とか何とか……。

そんなことを考えていたら、いきなり体に激しい衝撃。

「あqswでrftghyじゅいこ1pっつ!!」

ああっ!!

いきなり、抱きつかれたものだから奇声を発してしまった。
とても、とても……とてつもなく滅び去りたい。

『大丈夫か!?』

奇声に、驚いた二人が同時に、声を掛けてきた。
正直——怖いですが?

「だ、大丈夫です、よ?」

戸惑いながらも答える。

「瑠璃、こいつを殺していいか?」

「……………駄目です。」

恐る恐る答える。

隣に佇んでいる、魔王様は独占欲がよっぱど強いらしいです。
いや。

分かつてはいました。きっと(俺でさえ瑠璃に抱き着いたことな
いのに)とか考えてる。

自惚れではなく、です。いや……それ以上のことしてますけれど。
いろいろ、飛び越しちゃったんですね。

乾いた笑みを浮かべる瑠璃に対し、絶対零度の無表情を浮かべて
いるアル。

「シ、ム?」

抱き着いた事で奇声を上げられたリクシャルは、呆然とした顔で姉の名前を呼んだ。

「すみません。私はアル様の弟子をしている今村・瑠璃と申します」

丁寧に断りを入れておかなくちゃ、ですね。
顔が似てる……？ だけじゃないか。

「帰れ」

アル様が終止符を打った。

それを聞くと、何が何だか分からない、と言うような顔になったリクシャル王子は、

「姉貴は何処にいるんだ……？」

と呟いたけど、くるりと踵を帰して礼もなにもなく帰って行った。少し可哀相だったかなあ。

「お前は瑠璃だ」

そう、私は瑠璃。

あの人の姉ではない。

「ええ、私は瑠璃です」

—— 同盟国の第3王女はどこに消えた？

【にじゅうはち】過剰ですよ。(前書き)

評価などありがとうございます。
それが私の主食となっておりますw

- . ε . ALL Thank You ! . 3 . -

【にじゅうはち】過剰ですよ。

おはようございまーす。

きょうも元気な今村瑠璃さんでえす！

んん？　なんでハイテンションなのかって？聞きたいかい？君。
うんうん。聞きたいよねえ……。

じ、っ、は、ねー！

なんと攻撃・防御魔法が使えるようになったのです！

魔法円は書かないといけないのですけれど、私はそれでも満足です。
だって戦える！いざという時にアル様の足を引っ張らずに済む！
それだけでも、るんるん♪ものです！

スキップをしながらアル様を起こしに部屋をでる。
嬉しい。

「あゝるゝ様っ！」

むぎゅっとベッドの中にいるであろう細っこい体を抱き締める。

「……………」

布越しに伝わる獣の呻り声のような声。

布団から覗く病的なまでに白い手足。

薄く開いた唇。

何もかもが官能的に見えてしまう……。くそお！

「あゝゝるゝ様！」

あらん限りの叫び声を上げて、起こします。

それが低血圧で朝に弱い、アル様に出来る細やかな気遣い？

「っ……………！！！」

目を見開いて、瑠璃を確認すると深い溜息をついた。

「瑠璃……私の了承なしに部屋から出る事を禁じる」

「????？」

「この部屋にはいくつものトラップが仕掛けられている」

淡々と語るアル様。地味に恐ろしいです。

「は？」

「お前が何度も通過すると…………爆発する」

……………怖っっ！

いやいやいやいや！！

爆弾ですとー！？

「ああ、だから私が解除してから通れよ？」

「……………はい」

といいながら解除しているアル様を見ていました。

私は、その時私が習得した魔法の事を言うのをすっかり忘れていたのだった。

* * *

「ルウー！」

声がしたかと思ってそちらを見ると、すでに塞がる私の視界。
また……出やがった。

「やめてよして触らないでー」

いやいやと、首を振りながら小さく聞こえないように言う。
そう。カスファイノの第3王子は、なんと滞在期を伸ばしまくって
あれから2週間がたった今でもファンテウーヌに滞在しているので
す！

そして、私の事を“ルウ”などというふざけた名前で呼び腐りやが
りまして……。

「こんにちは。リクシャル様」

因みに私は言語魔法で会話中です。

ファンテウーヌとカスファイノでは公用語が違うそうです。

まあ。私には日本語にしか聞こえませんが……。

「ルウ！会いたかった！100年会っていない気がする！」

いや。昨日会ってないだけじゃないですか……。

リヒト様よりも過剰なスキンシップ。

ウザいのです。そこはかとなく。

「アル様、こんにちは」

「リyun又か……相変わらずの無表情だな！」

私がお昼の挨拶に行くと、決まってついてきて嫌味を言う。するとアル様の手によってどこかに飛ばされて帰ってくる。

「……………転移」

いい気味だと思ってもバチは当たらないでしょう。

最近アル様にだけ本当の気持ちを打ち明けられているのでなんだから……不思議な気分です。

自分の気持ちって小さな金平糖みたいなすぐ溶けるけど、硬くて、落としやすく、尖がってるのが私の気持ち。

だからそれを、大切な自分の金平糖をアル様に手渡すような……そう、とあげるような。

恥ずかしいけど、嬉しい……そんな私には似合わない胸がじん、とするような複雑な気持ちになるのです。

「あ、ありがとうございます」

「敬語……二人きりだ」

「！は……うん！」

忘れていたのはご愛嬌……ってね。

「え、えと……魔法見てくれない？」

あー、敬語ないと疲れるかも。

いいや。慣れだ！

「ああ。見せてみる」

そういつてベッドに座るアル様。
うー。緊張するなあ。

そう思いつつも魔方阵が描かれた用紙をそつ、と床に置きイメージする。

鋭くて、硬くて、貫くものを。

——パキッ

なんとも形容しがたい音が響いて……。

「痛っ！」

左手に赤い雫。

はてさて失敗したみたい？

「大丈夫か……見せてみる！」

ぐいっとなですね……引っ張られて……嘗められて

「治癒魔法を掛けた……」

き、キスまですることないでしょう!!
キス魔!

「……あ、ありがっ……痛！」

まただ。

頭痛、がする。

「どうした？」

外傷ではないからアル様はよく分かっていない。

「いやあ、なんでもないです！」

とりあえず誤魔化して……。

「嘘だ」

はい無理っしたー。

「い、いや……すこおし疲れたなーと。そ、それで頭痛が。」
「……………そうか」

うわー、ぜうたい疑ってますよね？

「と、と、とにかくっ！私もつと精進しますんで……………」

失礼しまっす！と言って部屋を出ました。

そこには……………リクシャル様が居ましたと……………っちゃんちゃん

ってちがーーう！

【にじゅうはち】過剰ですよ。（後書き）

【次回予告】

仮タイトル

拉致られちゃいました

【にじゅうきゅう】拉致られちゃいました

「姉貴を、シムをどこへやった!？」

こんにちは。

いきなり怒声から始まりました今回の瑠璃のstory。

「えー?子供の国?」

私がそう答えると目の座って居るリクシャル王子が、ぎろりと睨みつけてきた。

酷いなあゝ。さっきまでは“ルウ”とか言って懐いてた癖に……。本心を隠して、目的と下心の為に近づき懐柔する、汚い手だ。

まるで——私みたいだ。

「ふざけるなっ!お前がシムをつ!」

どう考えたらそうなる。

落ち着け14歳。

「と、に、か、く!私は無関係なのですが……」

「嘘だ!きつとシムを誘拐した後にノコノコとカスファイノにやって来て居座るつもりだったんだろっ!」

もう一度言おう、どう考えたらそうなる。

王子は私を魔法という便利な代物で隠して、長い廊下をツカツカと歩いている。

なんだかリクシャル王子は、魔法の才がカスファイノの魔術師に勝る……いやそれ以上の凄腕魔術師らしいです。
メイドさん情報でした。

「では、私をどうする御つもりで？」

「……とりあえず、シムの居場所を吐くまで監禁させてもらおう」

馬鹿かこいつ。

自惚れではないけれどアル様は私が1日でも消息不明になったら公務を放り出して探索すると思うのだけれど……。

「あのお……私、本当に何も……」

「黙れ」

うう、被害妄想も大概にしるよな。

大体、ファンテウーヌ程の大国が何で童顔ロリっ娘を誘拐せねばならんのだ。

リクシャル王子にそう抗議すると『姉上は綺麗だからな』とわけわかめな発言をされ……。

遂に部屋に着いてしまいました。ぽすり、とベッドに投げ捨てられ…… 放置。俗に言う“放置プレイ”というやつですか？ぞくぞく……

嘘ピヨーン。

あはは……。

「それで、姉はどこにいる」

「そ、そつえば……姉君はリクシャル様の事をなんと呼んでいらしたのですか？」

苦し紛れに話題を変えてみた。

「あ？シャルとかそこらへんだな」

ふうん。

普通にリクを言わないだけかよ、つまらんね。

「と、まあ。その姉はどこにいる」

中々にしつこい。

「ほ、本当に知らないんです」「はあ……しょうがない。姉と同じ顔の娘を拷問などしたくはなかったが……」

——え？

アレはまだだったのですか？

私はMでもSでもないノーマルなのですよ！？
今村瑠璃、15歳。日本という平和な国に生まれ、拷問のこの字も分からぬまま生を終えれると思って生きてきました。はんぱなく怖いっす。最近、仮面を被らずにいたので本心がするりと出てきます……。

「いや、いやっ……や、やめて、シャル」

……んなわけないだろ、15歳ナメんな。

リクシャル（様）が躊躇うようにわざと愛称で呼んでみる。

それに描いていた魔法をぴたり、と止めるリクシャル（様）。

「あ、あの……一緒に探しますっ！だ、だから……殺さないでっ」「……っ！」

嫌でも、まあ……。

まだ死にたくないです。ピチピチの15歳ですわよ？

「シムリア様……好きな人とかは？」

怖ず怖ずと聞いてみると、意外にも顔を真っ赤にして、

「い、いた……かも知れない」

「そうですか、で誰？」

こういう場合そういうスキャンダルが一番多いと思いますね。で、
駆け落ちルート一直線。

「知らない、が……きっと叶わぬ恋だったのだな。いつも……苦し
そうだった」

身分違いのラウ、ロマンスか。王族にはありきな話なのだろう
か？リヒト様も、ええとリリス？様と身分違い、だし。

「では……駆け落ちでもなされたのでは？」

私がそう言つとつぐつ、と言葉に詰まるリクシャル（様）。
そして、暫くしたあとに、

「では、なぜ……相談してくれなかったのだらう？」

と、悔しげに呟いた。

十
十
十

「ねえ、リト……」

「なんでしょう」

「愛して、いるわ」

「私もです」

暗がりの中で愛を語らう男女。それは一見、とても優しげな光景だけれど2人の顔は晴れなかった。

「私が居なくなっても、誰も探してくれないわ。お父様なんか私が居なくなつて清々した、と思つているはずよ」

「……！そのようなことつ……」

反論しようにも、事実そうなのだった。カスファイノの第五王女など嫁にも出す機会のないただ国家の金を使うだけの存在。カスファイノの国王が疎むのも当然だった。それなら何故、産ませたのか？それは現国妃が国王の寵愛を受けていて、それが国妃の望みだったから。国王は、断れなかった。そして、その国妃に愛情を受けていて、しかも役に立てない第五王女など、要らないも同然。忘れ去られた離宮で少数の護衛と侍女に囲まれて過ごした。しかしある日やつて来た、宝石商人の息子のギル・リトという北陸地方の青年に恋をした。

二人は相思相愛。障害は、ただ彼女がお飾りの王女だということのみ。

「行きましょう、心配のない所まで」

二人は手を取り合つて駆け落ち。そんな王家のスクヤンドルを国王が隠さないはずはない。こうして、二人の恋は無事、成就したのだつた。

ぱちぱち。

＋
＋
＋

「と、に、か、く！私は帰りますっ！」

というか分かってしまった。

コイツの心の裏が。

少し腹がたった。

だからくすり、と笑って、

「大層なお芝居ですね」

と言ってやった。

その時のリクシャル（様）の顔ときたらっ！愕然とした表情で何故わかった、みたいな顔をして。

「では、カス（ファイノ）の繁栄を祈って、クス」

カスだけいうというこの子供じみた厭がらせ。魔法切って日本語で言ったから多分、分かんないだろうが。

【にじゅうきゅう】拉致られちゃいました（後書き）

何かなんだか分からないと思いますが、次話で明らかになるはずで
す。

ではでは。読んで頂きありがとうございます。

2011・5・8 麦茶

【さんじゅう】真相と羞恥

ではでは。

謎解きをしましょうか？

とても陳腐な謎解きですよ、ええ。

といっても、心の中にひっそり留めて置きましょう。

いずれ脅迫材料になりそう　なんて暗いことは考えていませんよ？

まずはですね。

彼女、つまりはシムリア様が駆け落ちをしたと考えると仮説を立てるとですね。

【結論】

演技。

【補足説明】

カスファイノは王女が居なくなつて清々していたが一応、形だけでも探して置かないと、と考えてリクシャル様をファンテウーヌに探しに行かせた。

うーん。プライドがあるからこんな面倒くさい事しなきゃならんだよ。

馬ッ鹿みたい。

瑠璃がそう思い、というか小さく口を動かした時、ノックの音が響き躊躇いがちに、

「ルリ……俺だ」

と声が掛かった。

「こんにちは。リヒト様」

声だけでわかるほどのイケメンボイス。

そういえば最近会っていなかったことをふと思い出す。

「この前言って居たtop secretはもうsecretではないと思いますよ？」

「知っていたのか……？」

「ええ。というか接触されましたし」

知らなかったことに逆に驚くわ。

だって毎日来てたじゃない、あの王子様。

大体top secretってどっちだろう？

私の仮説の、駆け落ちスキャンダル？のことだよなあ、普通。それとも、第5王女と顔が似ているって事だけ？

「接触！ カスファイノの醜聞などどうでも良い」

はあっ、と溜息をつく王子。

なぜわざわざ私の部屋に来て溜息をつく。

「あっ、そうですね」

普通に受け答えすると、

「子供にも分かるか……カスファイノの思惑が」

子供……かちーん。

「スキャンダルなんて。ファンテウーヌにもありますのにね。島流しとか」

暗に、リリスの件を仄めかすと、眉を寄せる王子。

ざまあみろ。最近6歳児以下の嫌がらせをすることが増えたような……。

ま、外見、子供なんですから無神経な言葉で相手の心をズタズタにすることもまた可能。

「……………そうだな。でも俺は本気で好きだった」

——後悔。

苦しげにその美貌を歪めて、私の顔を直視する。

なに、それ、騙されてたのに？

もしかしてまだ好き……とか？殺されかけたんだよ？

「それでも……好きだと言われれば子供のように年甲斐もなく胸がざわついた。嬉しかった」

どうしてそうも簡単に人を信じられるのか。

下心なしで人に接せられるのか、私には……幼いころから人に何かを求め、近づく事だけを考えて生きてきた私には……もう分からない。

アル様にだって、気付かない内に無意識に何かを求めている。

酷く滑稽な女なのだ、私は……。

「まあ、それは置いてだな。」

リヒト様は、強い。

今、初めてこの次期国王を尊敬した。今までなぜ気付かなかったんだろう？

この人は幼いころからたくさんの期待や人の醜い感情を見てきたはずだ。

なのに……私の様にひん曲がらなかったのはその人の——強さ。私にはない眩しい程の、光。

「そうですね。私の考えではカスファイノの好きにさせて置けばいいんじゃないかと、思いますよっ？」

につこり笑えば、太陽のように眩しい笑顔が返された。

無知な子供のような笑みでもあるそれは、人の醜さを全て理解した上での笑みだった。

「もう、用事はそれだけですか？」

「いや……たいした事では無いんだが。」

そう前置きして、

「お前とリユン又は付き合っているのか？」

。

な、なっ！？

不意打ちはっ、ず、ずズルいわ……！！

「あqwsでrftgひゅじこ1p!!」
「まあ、そうだよなあ」

溜息をつきながらも弧を描くりヒト様の唇。

「あー！鎌掛けましたね!？」
「その顔の方がよっぽど、子供らしい」

こうして私の長かったようで、まだまだお昼前の一日は過ぎていく。

＋
＋
＋

ある日、やって来た異世界の少女。
少女のペルソナを剥がせる男はただ一人。
少女が信頼するのただ一人、その男だけ。
甘い、甘い物語。そうそれで終わるはずだった。
そう、彼さえ舞台に登場しなければ……。

ある日、瑠璃色の名を持つ少女は突然……消えた。

——それはそんな物語。

哀しみとペルソナが交じり合った。
そんな物語。

【さんじゅう】真相と羞恥（後書き）

カスファイノの回は要らないかな、と思ってたんですけど。休憩が
てら………みたいな？
あはは、

【さんじゅいち】それは驚くほど突然に（前書き）

皆さんの評価、ごちです。

麦茶（、・3・＊）

【さんじゅうち】それは驚くほど突然に

カスファイノの王子様は、なんと思惑がバレタと知るとその日の内に帰って行った。

瑠璃は、それを見て“誰にも認識されていない”かの様に振る舞われるシムリアの気分はどんなだろう？とふと、思い自分の身に置き換えてとぞつ、としたように自室で肩を震わせた。

瑠璃は最近、自分の存在意義は何だろう？と考えるようになった。もともと自我が無いにも等しい瑠璃の事だ、こう考え始めるのは時間の問題だったが……。

そう考えだすと、瑠璃の中にある“異世界トリップ”とは主人公が何かを成し遂げる武勇伝つまり何か使命やらなんやらがあるはずなのだ。

それなのにこの世界にきてから誰にも救いを乞われもしない。

自分は一体……なんの為にここまで来たんだろうと暇さえあれば考えるようになった。

といつても瑠璃は、侍女ではないし弟子だったので一日中する事も無くぼおっ、としていられた。

つまり暇だったのだ。

魔王を倒しにも行かなければ、誰かを助けるわけでもない。

そんな毎日にゲーム感覚でこの世界に来ていた瑠璃は、段々……飽きはじめていた。

だがしかし、アルの事は今までにないくらいの本当の気持ちで、好きだった。他人を愛しく思うこと自体が瑠璃にとっては異例の出来事だった。

「どこにセーブポイントがあるの……？」

半ば本気で瑠璃は呟いた。

＋　＋　＋

久しぶりに庭園に行つて見ようと思い、瑠璃は重い腰を上げた。もともと瑠璃は、余り行動的ではない。なのになぜわざわざ歩いて庭園まで行こうとしたのか……。

「……暇」

だったからである。

小さな身体には不釣り合いなクイーンサイズの天蓋付き乙女ベッドから勢いを付けて飛び降りる。

「冷たい湖から手を引いて、私を優しく揺り起こした貴方。」

瑠璃が好きな曲だと思う。

あの頃、まだ自我があったところに好きだったから。

「けれど貴方は、いなくなり私、また独り」

確か湖の妖精だかなんだかに恋をした青年が、湖の妖精を湖から引き上げるんだけど段々と飽きて来るんだ。

それで独りでは湖から出られない妖精に『また、来る』とかほざくだけほざいて青年は新しい女性と……、っていう悲恋。

妖精は青年の言葉を信じてずっと待っているっていう。騙されてる事にいい加減気付けよ、と思う。

「また、来るってその言葉の意味……想い？重いのか？」

もう聞けるはずのない音程を口ずさむ。
てくてくと見慣れた大理石の上を滑る。

まだ、朝でこの世界は暖かい。

いつもは真っ直ぐ行く道を今日は右に曲がる。
すると、透明なガラスでできたドア。

その向こうに見える、色取り取りの蝶や、華。
長い間使われて居なかった古い洋館の日当たりのいい庭にいる感覚。
もつと言うなら、教室で汗や下敷きで煽ぐ皆を見て夏を感じた日の
空気。

そんな懐かしい、そう思わずアイスや花火を連想してしまうような
——時間。

でも明らかに違う……だってここは蝉が鳴く日本でも、ビジネス
マンが往来するNYですらない。

ここは——異世界だ。

私を知っている人が少数の……向こうの人達が知らない不思議な魔

法の世界。

私は、私は……もう演技なくていいの？

ふと、そう思った。でも私にはもう自我なんてものは残ってなくて……だから誰かの真似をしてでしか性格が作れなくて……。

「……瑠璃……何処だ」

「ここだよ。アル様」

愛しい人の声がする方へと視線を向ける。

するとそこには漆黒のコートを纏ったアル様。異質である。

「アル様」

でもそれ以上の違和感に襲われた。

目のよいアル様なら確実に私を認識できる距離にいるのに……私を見していない。

「ア、アル様？」

恐る恐る…声をかける。

でもまだ焦点を彷徨わせる彼。

——見えない、の？

「アル様っ、」

アル様の華奢な身体に飛び付く。すると、

「——っ!!」

驚いた様に、目を見開くアル様。

「瑠、璃！？今まで何処に？」

いつになく取り乱したアル様に、

「あー、隠れてた。ごめんね」

そういつて笑うと、不可解そうにしながらもこくり、と頷いてくれた。

笑顔の上辺とは裏腹に、私の内部は鋭いナイフでぐちゃぐちゃにされたように痛かった。

＋
＋
＋

アル様が、呼んださきには魔術でつくられたドームがあつた。まだ中には何もなかったけれど、透明で透き通ったドームを見て、私はここには何も置きたくないと思った。

このまま、何もない空っぽのまま……。

綺麗な、ままで。

とてもうれしかったけれど、今の私はそれどころではなくて、なんで見えなくなつてしまったのか……それだけを考えていた。アル様も、深く追求して来なかった。

ただ一言、

「気に入ったか？」

と、きらきら光に反射して光るドームを目の前にして言った。私は夢心地で、

「……はい」

と答えた。

それほどまでに綺麗で、犯しがたい静謐な空気が漂う、中庭の一角。いつになく優しいアル様。

「そういえば、いきなり………なんで？」

別れの為の饒別的な物じゃないでしょうね？
怒りますよ、瑠璃さん。

「……………あげたくなつた。それだけだ」

ぶつきらぼくに答えると、いきなり顎を捕まれて、触れるだけの羽の様なキスをされた。

「んなつ！？」

流石にいきなり、は驚くよ。

怨みがましい目でアル様を見ると、余裕な顔してドームを眺めていた。た。

綺麗だ、と普通に思った。

見つめり眼差しは優しく、最初見た時は刃物の様な深紅だと思っていたそれが今は、優しく包み込んでくれる炎の朱に見える。

「ふーんだ！いつかアル様よりも凄いテクニシャンになってやる！」

と、何気に酷いセリフを吐きながら、ドームの中に駆け込んだ。中の空気は案外、温かな湿り気を帯びていた。

ふと、唐突に、ここにパールホワイトの椅子とテーブルを置きたいと思った。さっきまでは何もいらないと思っていたのに……。

そこでアル様や友達と語り合うのは楽しい事だ、と思った。

そんな未来の事を考えていた私は、アル様に私が見えなかったことなど、鈍い胸の痛みなど……忘れてしまっていた。

【さんじゅうに】花咲く王宮*（前書き）

遅くなって申し訳ありません（汗。

【さんじゅうに】花咲く王宮＊

瑠璃は、自室に戻りいつも通りに掃除を少しして……泣いた。

＋＋＋

瑠璃は、今カスファインの王女の事を考えた。

誰から必要とされていない女性。

いや……そーいえばあの人は駆け落ちしたのか。
なら王女様は恋人がいるのね。

ああ、嫌だ、嫌だ。

どうしたことでしょう。

今村瑠璃15歳、ピンチです。

私には予想がついた。

このままでは私の存在が消えてしまつかもしれない。
それだけは…嫌だ。

神様、あなたは私にまだ道化を続けさせるつもりですか？

＋　＋　＋

「瑠璃……」

「んあ……？」

色気の欠片もない声を出しながらむくり、と起き上ってみた。

昨日、泣き疲れて眠ったことは覚えている。

でも寝たのは自室だったはずだ。

なのになぜアル様の寝室のモノクロのベッドから起き上ったのでしようか？

「アル様あゝ、なんでアタシここにいるんれすか？」

寝起きで全く舌が回らない。

「……瑠璃……おはよう」

「おはよーございませゆ。らなくてーなんでここにアタシいるろー？」

再度、同じことを質問してみる。

「運んだ。」

「らんでー？」

「——消えて、しまうかと思ったから」

「……っ！」

言ってしまったから顔が強張るアル様。

傷つくならいわなければいいのに。

「だいじょおーぶ！……どこにもいかないようー」

そういつて安心させた。

それが自分の為か、アル様の為か分からないし、知りたくもなかった。

＋＋＋

リヒト様が新しい王妃を迎える。そんな知らせをアル様から聞いた時には驚きましたよ、ええ。

私は、ぶらぶらと図書塔の中を歩いていた。

最近“帰りたい”なんて気持ちも段々と減って行って、今ではずっとここに居たいと思う。

「ルリさん……？」

気付かなかった。

澄んだ声に視線を本達から外すと、青い何かを水に溶かした綺麗な色。

「カイルさん、こんにちは」

歌って踊れる万能騎手のカイル・アルジャンニさんだ。

今日も柔和な中性的な顔立ちを惜し気もなく晒している。

柔らかに微笑んでみた。

でも申し訳なさそうに目を逸らされた。ほわい……？

「どうか、しました？」

ひょこりと目を覗き込んだ。

「すみません、私は……気付けませんでした」

「カスファイノの件、ですか」

ああ、本当に責任感が強いなあ。きっとカイルさんは、カスファイノがここに探すフリに来たことに気付けなくて、私達に迷惑が掛かったと

思い込んでいるのだ、勝手に。この世界で仮面を被れば上手くやっ
ていけると思った私を見ているようで苛々した。

でも仮面を被った方が上手く行くわけで……。でも私はここに来て
仮面を被らない私でも存在理由があるのだと……。

だから――。

「ええ、ですから……」

「黙れ」

初めてカイルさんに汚い言葉を使った。

カイルさんは思った通り、目を見張って絶句している。

「ごめんなさい。でも私もアル様も大丈夫だと言っています。だから――」

いったん言葉を切って続ける。

「もう悩まなくていいです……いいんです」

悲しい気分になってくる。

カイルさんは、目に涙を溜めてこちらを見ている。
綺麗だと思った。

「では、」

半ば強引に話を切り上げて、走り去る。
後はもう慰めてもらおう！
うん。アル様に…。

ではでは、また明日。

【さんじゅさん】花咲く王宮*（前書き）

2011・06・11

麦茶。

【さんじゅーさん】花咲く王宮**

リヒト様と最近、遭遇していないと思っていたら案外リヒト様は本気でこの国の王様になるつもりのようなのだ。

当たり前だけれど……。

「瑠璃、私は今からセレモニーの主催の準備に駆り出されるだろう。暫く会えないが待っている」

アル様が言った瞬間に、扉が静かにノックされて使いの者が、

「リユン又様、リヒト殿下の婚儀の件でお話が」

と頭を垂れた。

アル様はそれを冷たく見下ろして、一言返事をしてもう一度こちらを振り返り――微笑んだ。

「！」

驚いたけれど、なんとか微笑み返した。

なんてレアー！

今、今村瑠璃の永久保存キャパシティに新たに登録されたアル様の微笑み。

大切にしよう……。

「いつてらっしゃいませ」

「ああ」

これから会えなくなると思うと、寂しいなあ。
扉が閉まりアル様の髪の毛が見えなくなった途端に胸が痛くなっ
た。

* * *

瑠璃は一人、ベリアルが作成した巨大なドームの中に入って行っ
た。

外から見えても問題ない茂みの中に作られている為、中での行動
を気にする必要もない。

少し露で濡れた涙草を、弾く。

途端に、瑠璃自身に降り懸かる水滴。

ごろりと仰向けになり、空を見上げる。

透き通る美しいグラデーション越しに見える、晴れ渡る青に真珠
のように散る空。

日本よりも空が高く感じる。

「うわあああ……」

大声を上げてみた。

太陽がさんさんと瑠璃の上に降り注ぐ中、ひなたぼっこ気分で瑠
璃は目を閉じた。

気持ちいいな。

アル様に会いたいわけではない、と瑠璃は思う。

——とん、とん。

おや？

意外にも固い材質に声に、驚きながらも、声の主はまたもや、

——とん、とど、とつ。

楽しい音程である。

「よつこらせつー」

ちよい待ちー、と言いつつ立ち上がり薄桃色のワンピース型の服の汚れを払う。

（近頃、王宮は異国の者が伝えた楽器やら、なんやらで溢れかえっている。）

「バルスツ——！」

ノリで鍵^{キイ}はこれにしてみた。
するとドアが開くのである。

便利だ。

「ベリアル・リユンヌの春の精。お初にお目にかかることになるのかな」

その人の第一印象は、

「奇妙ですね、その格好」

懐かしい、この一言に尽きる。だってそれは……、

「異国の服ですからね」

日本の制服と呼べる代物だったからだ。

瑠璃が通っていた高校の制服と、全くと言っていい程、似ていた。紺色のセーラー服に紅いネクタイ。男子は、黒の詰め襟に金ボタン。その男は、詰め襟のボタンを全開にし、シャツのボタンも2、3個開けていた。

「貴方……その服……」

愕然としたまま指を指す。

「ああ、異国ブームに乗らせてもらったんだ、似合ってるっ、てる？」

赤銀の髪を美しくなびかせて、彼は言う。

「ええ、とても。それで誰ですか？」

「名乗るのが遅れたかな」

奇妙な口調に灰褐色の瞳と赤い髪は、珍しいものだった。

この国は、いろいろな種族が移住して出来た国だからいろいろな人がいるけれど、赤銀は初めて見た。

赤い濃い髪色にメッシュのように銀髪が入り込んでいる。

——面白い。

「零^{ゼロ}でえす。何もないって意味だよ」

『ゼロ』、名前としては何か絶対に子供に付けたくない何かを感じ

じる。

私はゼロなんて名前だったら、上手いかわないことがあったら全て名前のせいにしてそうだ。

「珍しい名前ですね」

「でしょ？ 俺は好きだけど」

好き、なのか……。

訳が分からないけれど、よっぽど出来る人なんだろう。

「春の精さんはさ……、異世界とか自分と違う存在って信じてる？」
「——え？」

核心を突かれた、というのが正直な感想だった。

私を取り巻く環境は上手く私と融合していると思っていたし……。違和感なんかなくなっていると思っていたから。

「ねえ……どうして僕に君が見えたと思う？」

嗚呼、何故……気付かなかっただろう？

アル様でさえ私が何等かのアクションを起こさないと私を認識できなくなるほどに私は今、存在が儚いというのに。

「っ……………」

恐ろしかった。

凍てつく様な瞳でも、怒りのオーラを発している訳でもないのに……ただただ恐ろしかった。

陽気な赤髪の奇妙な男が。

恐ろしかった。

【さんじゅさん】花咲く王宮*
*（後書き）

【さんじゅつよん】泡沫の夢。(前書き)

みじけーです。

【さんじゅうよん】泡沫の夢。

ドームの中は朝日が惜しみなく入ってきていて暖かいはずなのに。
思わず、袖なしのワンピースから出ている二の腕を無意識に擦る
ほどに寒気がした。

「ねえ、君はなんでそうなったか……賢い君なら……なんで認識さ
れなくなったか分かるよね？」

にんまり、と嗤う。

嗚呼、嫌いな人種だ。

どこことなく、私に似ている。

同族嫌悪。

「さよなら」

零^{ゼロ}の横を通り過ぎようとして、腕をつかまれて……、

「気をつけな。仮面……付けとけよ」

横暴な口調で命令すると、腕を放して私が瞬きをする間に消えて
いた。

「な、なんなのよお」

走る。走る。

部屋に入って、眠りたかった。
瑠璃でも対処しきれない。

キャパシティーオーバーってやつである。

「恐いよお……アル様」

どれだけ仮面をかぶって感情を装ったところで瑠璃はまだ15歳。
泣きながらベッドに顔をうずめた。

* * *

「リユン又様。こちらをどういたしましたしょう？」

「30度傾けて魔方阵を半径30mの等間隔で画け。仕上げは私が
行う」

「っ！！100以上もありますよ!？」

「黙れ」

凍てつく様な声音に黙り込む魔術師たち。

「はっ……、承りました」

冷たい氷河のような瞳、眼差しが痛い。
周りを冷たく睥睨する。
全てを拒絶する。

——そんな時。

ベリアルがいきなり駆け出した。

周りは啞然として見ている。

「リユン又さまっ!?!」

驚く魔術師たちをちらり、とも見ずに、

「風の調べだ」

* * *

「アル様あ……っ、ア、ルユ様っ!」

えぐえぐと自分でもみっともないし、子供っぽい真似をしている
なと思う。

だから……あなたが来てくれた時は本当にうれしかったんだ。

「瑠璃っ!」

愛している人の声ってなんでこっぴついう時に聞くと、苦しいのか。
それでも、なんか助かった。

「ア、アル様……あああっ!?!?!」

苦しげにもかく瑠璃。

「っ……………っやあっ……………消えたくない！消えたくない消えたくない」
「ッー！」

* * *

『刻は巡^{とき}って、廻^{めぐ}って』

『貴方は知るよしもない』

『まさか』

『貴方が——…』

目が覚めた、というより夢に突入したかと思って、目をぱちくり、
としばたたく。

質素な筈の自分の部屋は、なぜだか金色に輝いていて、これまた
黄金の蝶が、美しい鱗粉を優雅に舞い落とす。

「……………。」

突然の明るい光に目が慣れないので目を、細めながら辺りを伺う。

そして――、

「……」

口から音が出そうになるのを根性で留めて、大きく息を吸った。

「零、何をしているのですか？」

動揺の淵に叩きこんだ、張本人が――いた。

「どの面下げてここに来やがったんですか？」

私が淡々と言うと、にやありと気持ち悪く笑って、

「ぞくぞくする。ねえ、その仮面イイネ」

と、よく分からない感想を述べやがった。

おほほ、言葉使いが荒いのは、そこにいるもう髪の色がそのまま炎になって、ハゲになってしまっても全く心が動かない程度の存在でしかない男のせいでございますよ、ええ。

「仮面とは何の事ですか？ 私にはさっぱり分かりませんし理解もしたくありません。そして貴方と意思疎通をする気もありませんから、どうか消え去りやがってくださいな」

ふう、と一息つく。

久しぶりに被った仮面は、意外にも私の精神に負担をかけているらしいですね。

慣れって怖い。

「くくつ……ねえ、僕の正体を知りたくない？」

「知りたくありません」

即答。

今はもう、この世界で生きていきたいですから。

だから地球を、日本を思い出したいとさえ思ってます。

「——そつ、かあ……、結局、君はまた……まあ、いいや」
——？

よく分からない。

そついう思わせぶりな発言は控えましょうか。

「よく分かりません」

何よりいつもにかにかチエシヤ猫みたいにニカニカ気持ち悪く笑っている人間が、いきなり切なげに笑うところには、何か意図があるように本当に、寒気がする。

「そーかい。では……さようなら、」

はい、さようなら。

【さんじゅつ】ライ（前書き）

リヒト様の新しい結婚相手のお話。
短いです。
すみません。

【さんじゅっ】ライ

「ライ、機嫌を直して？」

「や、です。ヘーかが嘘、ついたのがいけない」

ぶん、と顔を風船のように膨らませて、睨みつける女の子。
きらきらと輝く絹糸のような金髪美形は、それはそれは困り顔で、
女の子の背丈に合わせしゃがみ込む。

「ごめん、て。タヌキ大臣達が五月蠅くてさ。解放してくれなかったんだ」

「リヒト、頑張れば……黙るよ。タヌキ共も」

さらり、と恐ろしいことを言う。

それに苦笑しながらも、

「すみません、お姫様。機嫌を直していただけますか？」

女ならだれでも恋に落ちてしまいそうな、顔でふわりと笑う。
それを見て、顔を熟れたリンゴのように真っ赤させた後、

「赦してあげましょう——今回だけ」

気取って、ふふんと鼻を鳴らす。

それに、くすりと見えないように笑うと、リヒトは、

「こちらへどうぞ？お姫様」

と手袋に覆われた手を差し出した。

* * *

「な、なにあれ！？めちゃくちゃラブラブじゃないですか!？」

つい双眼鏡から目を外し、大声で叫んでしまう。

いや……アル様が居なくて暇だったとか、リヒト様は実はロリでコンなのか……とか様々な思惑が駆け巡るけどさ、違うよね、うん。
「でも……可愛すぎね？」

一人瑠璃の眩きだけが広い部屋に響いたのであった。

* * *

大丈夫、まだ。

まだ、耐えていられる。

彼女がほかの男を愛しても、愛されても……まだ、まだなのだから。

まだ、巡ってはいけないのだから。

彼女が何度、忘れても、慟哭しても、絶望しても、生き続けてくれれば。

俺の自己満足、エゴ。

ああ、空回り。

【さんじゅつろく】お誕生日おめでとう

こんにちは。

リヒト様の婚約準備にアル様は滅多に帰らなくなって、今村瑠璃は――16歳になります。

そして真つ昼間から部屋のなかにクラッカーを置きまくり、大量の砂糖菓子を散乱させて、何をしているんだと聞かれれば

お祝いですよねえ、うん。

「誕生日おめでとう、今村瑠璃よ」

一人で祝う誕生日は何とも寂しいものだ気付くのが遅すぎましたな。

この世界にケエキがないことから、冷やした砂糖菓子をチョイス！してみた。

「さて、頂きます」

ポリウムがやや多いそれを、若干の無表情で飲み込む。美味しいのか、マズイのかすら分からない。

歯や舌に、にちやにちや絡み付く砂糖菓子は、ラズベリーとかそこらへんの味がしましたよ、と。

「うえっぶ——吐く——吐きたい、解放したい」

頭の中で警報が鳴り響いています。

今村瑠璃、16歳でござい。

いや流石に自棄で街にダッシュで行ったは良いものの、これまた自棄で菓子屋のオッサンに、

「家族でパーティするから取り敢えず沢山、それ下さい!!」

なんて言っちゃったのが、運の尽き。

オッサンは上機嫌な顔で自棄ってたこちらが驚く様な砂糖菓子詰め合わせを持ってきてくださりやがったのだ。後には引けない、引かない今村瑠璃さんがとった行動はただ一つ！

2か月分のお小遣いを叩いて買った……買ってしまった。

と言うわけで、警報が鳴り響く。

よし、吐こう、吐いてしまおう。と思った瞬間にくすくすと笑い声がした。

「相変わらずだな。」

聞き覚えの全くない声がしたので、常識とかアイデンティティとかを考えて無視。

「ねえ、おーい瑠璃さん？」

私は、吐き気を必死に抑えながらもトイレットに向かう。くそう！遠く霞むぜ、トイレ様よう。

「瑠璃さぁんー」

エコーを無駄にかけるなー真面目にウザいからあ。

しかもなんで跳んでるんですか？ねえ。おい。やめろよ地味にストレスなんだよ上から目線なんんっ！！ストレスはなあお腹に響くんだよ。バーかバーカ。

「只今応答出来ない状態か電波が届かない所に利用者がいますので、ピーという音なんてならねえんだよ。テメーが私に取れる連絡手段なんてねえんだよ、ばーろ」

虚空を眺めながらも、ぺらぺらと口を動かす。ああ、もう少しだ。嘔吐感それまで待たれよ！！

「くくく、おもしれーなあ。瑠璃瑠璃瑠璃ちゅわあん」

そういいながらもふわふわと近付いて来る男。

ヒイイイ！

やめてよしてさわないで――。

「困った。俺は君をイジメたい」

――。

沈黙。

「やめて下さい、訴えますよ？」

「国籍が違つから無理でーす」
本当かよ。

でもその時、私は気付けば良かったのです。

——国籍ではなく世界が違つ、と真つ赤な髪をした奴が暗に言つたという事に。

一通り片付いた魔法陣。美しい等間隔の魔法陣は、セレモニーの最中に、儚く危つい光となつて辺りを照らすだらう。

「ベリアル様、休息をお取り下さい」

「却下」

「では仮眠だけでも！」

100を越える魔法陣の真ん中に立つ細身のシルエツト。風に靡^{なび}く、黒とも灰とも区別がつかぬ髪。

ざつ、とにじり寄つて来た家臣を冷たく一瞥する様は氷の様な凍てつく無表情。

「しつこい、失せろ」

見慣れた家臣でさえも、たじろぐ程の威圧感。

「申し訳ありません、が……」

そこで年配の家臣は、きりりと唇を引き結んだ。

「当日、全ての魔法陣を発動させられるほどの魔力を持っているのは、貴方しかおりません」

つまり、倒れられでもしたら大変だと家臣は暗に告げた。ベリアルは、すうと目を細めてから、頷いた。

「有り難うございます」

一瞥すらせずに去るは最強の魔術師と謳われた男。

*

「瑠璃」

仕事が終わっていない状態で帰途に着くのは初めてのことだった。愛しい異界の少女が待っているであろう部屋を足速に目指す。

薄紫の瞳で見詰められたい。早く、早くと自らの感情が抑えられない。

——カチャリ。

ドアノブに手をかける……いや、正しくはかけようとして止まった。

「国籍が……か……で……」
「はぁぁぁっ……！」

見知らぬ声と、心なしか弾んでいる瑠璃の口調がやけに胸がざわつく原因だろう。

【さんじゅうなな】繋がり

ゼロがまた気まぐれに消えていた。

私が、溜息をついて一瞬目を閉じて開いた時にはもう居なかった。

それが少し寂しいとか思ってしまう自分が悔しかった。

* * *

わらわらと集まる人、人、人。

ただでさえ色彩豊かな、この国の住人（というか王都周辺市民＋αだが）が城を囲むようにして集まると、頭が痛くなってくる。

夜まで続くのかと思うと、溜息さえ出て来る。

でも、まあリヒト様が拾った孤児のライラ様はとても可愛らしいし、まさか孤児から、とかいろいろなすったもんだは今日でさえ続いている。

もう、取り返しがつくはずがない。リヒト様は全国民にもうライラ様とのことを言ってしまったというのに。

『これよりファンテウーヌ第一王子、リヒト様の……』

淡々と、でも嬉しそうに読み上げる騎士。

それとは対称的に渋い顔をして、横を向いている古株たぬき親父達。

（本当に年上か……？こいつら）

つい思ってしまったのはしょうがない事だと思っよ、うん。
そして一際高くなったバルコニーに幸せそうに立っている二人。
ずっと上を見上げているせいか首が動かすと嫌な音を立てた。

（あ……… 懺った）

『今日は、楽しんでいってくれ』

リヒト様が極上の笑顔で言うと、拍手と喜びの声があがった。歓声
のなかで、一人、

（やばいいたいやばいいたい）

と、ぶつぶつ呟いていた黒髪の乙女がいたことは誰も知らない。

* * *

人知れず、小さな背中を探す。

黒髪を、瑠璃色の宝石のような彼女を。

今、どこにいて何を思っているのだろうか……？

寒くはないだろうか？

いつもは見つかる背中が、見つからなくて苛々する。

つらつらと考えてからふ、と笑いが込み上げて来る。

いつから自分は、他人の心配などするようになったのだろうか、と。

最近の悩みは、というか瑠璃の事。
それだけだ。

瑠璃の存在が認識できないと気がついたのは、最近の事だ。
恐らく瑠璃の自我が覚醒したからだと思う。今までは、人格を偽って接していた。自我を取り戻した今は、出来るだけ偽らずに接してくれている。

嬉しいが、元々この世界の者ではない瑠璃。
消えて、薄れるのは当然の通りだ。

今までの道化という殻に護られてきた瑠璃はいまは、生まれて来たばかりの雛に等しい。

「アル様……アル様ってば！」

ぼあ、としていたベリアル・リユンヌと袖を引いたのは、瑠璃だった。

「何だ」

驚いて間が開いたのはきつとばれていないだろう。怪訝そうにしながらも、にっこり笑って、

「新婚幸せカップルに贈り物あげに行きましょう」

そう言つと、瑠璃を取り出したのは――。

* * *

「御結婚おめでとうございます」

「はい、これーリヒトさまにっ！」

勿論、前者がベリアル、後者が瑠璃である。

素、というのは恐ろしいが、リヒトは笑って容認。

しかしその笑顔は瑠璃が取り出した贈り物で凍り付くことになる。

* * *

手錠。

それは拘束用具。

手錠。

それは愛の証。

手錠。

それは安心を与える魔法のアイテム。

——って違うわあっ！

て、て、手錠、なんて、有り得ない。
有り得ないです！！非常識ですっ！

リヒト様もそんなガキの用意したものをにこやかに受け取らないで
ください！

ああああああ！！！！

「ちょ、ちよつと……その貴方！」

「はいなんでしょうかライラ様？ あ、申し遅れました私、瑠璃
今村です。アル様の恋人です」
矢継ぎ早にそんな……。

「二人は愛し合っているのですよね？」

むいつ、と顔を近付けられて、そんな事を聞かれても……恥ずかしい。

（ああ、恥じらう美少女、萌えっ）

「瑠璃——」

小さくベリアルが諫める。

それは行動についてか、脳内の危うい発言についてかそれはベリアルのみが知る。

「あ、愛し合っているのですっ」

きゅ、と小動物のように威嚇されれば瑠璃の被虐心がむくむくと頭をもたげてくるのは当然の道理というやつで。

「へえ。ならば——付けてくれますよね？」

これっ　と瑠璃は、満面の笑顔で、辛気臭く溜息をつく超絶美形と猫に震える鼠のような可愛らしい姫君に差し出したのだった。

——手錠、を。

【さんじゅうなな】繋がり（後書き）

遅くなって申し訳ありませんっ。

見捨てないでくださると麦茶は泣いて、喜びます。

【さんじゅはち】もう一つの愛の手錠（前書き）

遅くなって本当に本当に本当に本当に本当に
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

【さんじゅうはち】もう一つの愛の手錠

綺麗な瑠璃色の瞳を持つ少女、瑠璃と最強の魔術師と言われていたベリアルが並んで歩き去っていく様は、物語に出てきた——奴隷と主人の関係そのものだった。

「あ、の……リヒト？」

「なんだい？お姫様」

啞然としているライラとは対照的に、もう慣れたものだと思っ
いながらリヒトは、

「ああ、あれかい？あれはねえ……ああいう愛し方もあるんだって
事だよ」

どこか遠い目をして、リヒトは言った。

勿論ライラも、随分昔のようだけれどこ最近、起きたリス・ク
ロウの件は知っている。

いくら孤児だからってバカにしないでよね！リヒトのためにたくさ
ん勉強したんだからっ。

リヒトもきつと……ああいう盲目的な愛し方をしていたかな？

くやしいけどあの女はとっても綺麗だったしね。

「そっかあ……でもリヒトからは飽くまでふ・っ・う！に愛されたい
ですからね？」

理解はしておきますけれども！

知識として留めて置く事にします。ええ、そうさせていただきます。
私の必死の叫びを聞いたかのように、リヒトは華のある優しい、笑顔を浮かべて、

「もちろんだよ。ライラ」

と、言つてちゅ、と輝くようなライラの金髪を掻き揚げて、その額にキスをした。

勿論、群衆の前でそんなことをされたライラは、真っ赤になり、周りはひゅーひゅーと口笛を吹いて冷やかした。

ライラは、反則……といつも思つのであつた。

そして散々二人にふつつではないだの、盲目的だのと言われた瑠璃色の少女の首には漆黒の美しい蛇。
そしてその蛇の持ち主は、ベリアル。

あの時、瑠璃が差し出した手錠を見て、ベリアルが、

「いいな……」

と呟いたかと思うと、手袋をはめた手から今にも飛び掛かつてきそうな大蛇を出し、警備隊が冷汗をかいているところに、ただ淡々と、

「動いたら殺すぞ」

と瑠璃に命じて、大蛇を彼女の首に巻きつけて、蛇の牙を自らの手に刺し、ゆっくりと優美な笑みを浮かべて、

「簡単に外せないだろう？無理に外すと私が死ぬぞ」

と、瑠璃に言ったのだった。

周りが哑然としている中で、瑠璃は全く気にも介さず満面の笑顔で、

「アル様のご命令なら……嘘です。好きですから」

と言つて、抱きついたのだった。

魔術師志望の男女は、一瞬であれほどの大蛇を出したベリアルを敬い、恋する少女たちは、あんなことをされても全く動じずに『好きだから』と言えてしまう瑠璃を見習った。

そして冒頭に戻る。

* * *

「瑠璃、寒くないか」

「ええ、全く」

パレードが始まった夜の王都。

そこに黒大蛇を華奢な肩に巻き付け、長身の男と手を繋いでいる少女がいた。

瑠璃色の瞳をきらきら輝かせながら、色とりどりのドレスや仮面で着飾っている庶民、貴族を見詰めている。

――木の上で。

ベリアルが最近、一緒に居てやれなかった瑠璃に差し出した贈り物は、見通しが言い果実の木でパレードを眺める事だった。

「本当に、寒くないか」

「あつたかいのです。アル様が居れば」

とす、と細い腕に頭を寄りかかせながら、激甘な言葉を吐く。

「今は嘔吐きは返上ですよー」

くすくすと、笑ってそれからただじつ、と輝く光景を見詰める。

金の粉がさらさらと舞っていて、それを夢中で集めている幼い女の子を見て、それから綺麗な舞を踊っているスタイル抜群のおねーさんを見て……。

いつまでも見ていたいと思った。

日本の地元のお祭りを思い出して、目頭があつくなつたけれど。

あの終わりがけの寂しさや、花火を見て皆できゃーきゃーと笑いあった時間は確かに幸せだったと言える。

異世界に来てまさか新しい価値観と愛しい男性が出来るとは思わないよ。

――普通。

普通は、ですよ。

私を誰だと思いいですか。

天下の今村 瑠璃さんですよ。 しかも一歳、年を重ねてグレードアップしたんですよ？

さあ、さあ。

皆さん！異世界ライフを楽しみましょうよ。

でも向こうの世界から絶世の美女が現れてしまたらまた居場所が無くなるから止めて欲しいなと思ったのでした。

増してや、アル様を誑かした女狐が居るなんて分かった日には、私はソイツのことを精神崩壊させて頂くことになってしまつやも知れませんし。

つらつらと考えていますとくい、と首が横に引かれて、何事！？と思いいながらも、そちらに顔を向けると、

「名前、」

いつでも高慢な魔王様が、うつすらと陶器のような白い肌をピンク色に染めて、ぼそりと口を動かしました。

「名前……ですか？アル様」

こてり、と無理に傾げさせられた首をそのままにしながらも、私は聞いた。

意味がわーかりませえん。

「様、をつけ、ろと言った覚えは、ない」

うわ。かみかみー可愛いー（。□。＊；）シ

ふと、今だにアル様の手に刺さった、蛇の毒牙を見る。血がどくどくと溢れている訳でも、変色しているわけでもないそれは、ただ貫

通していた。

貫通した牙の先からは、ぽたぽたと紅い液体が流れ出していて、見ると血液だと分かった。

「どうした？」

「アルさ……アル、痛そうですね」

慌てて言い直す私に満足げな顔をして、自分の手を掴む。

「痛そうに見える？」

面白そうに笑って（これはレアです）、言った。

「——見えます、血が、でて」

「舐めろ」

満面の笑みですよ。

魔王様が久しぶりに君臨なさったと思ったら。

勿論、従順で忠犬な瑠璃ちゃまは素直にアルの美しい掌を怖ず怖ずと舌に近づけました。

感想。

うん！ほどよく血の味

「疲れたろう——眠れ」

低く響く低音にまどろみながらも頷いた。

【さんじゅっきゅう】退屈は私を動かす

今村瑠璃 16歳。

最近疲れやすくなったなと自覚した高校正（学校行ってないけど）。

「最近、平和―」

隣にいるのはカイル・アルジャンニさん。歌って踊れる万能騎手をめざしているらしいよ、うん。

「平和が一番ですよ、ルリ」

武器の手入れして、残念そうに溜息つきながらいわれても説得力皆無ですからね？

なぜ私のような一介の見習いが、軍の隊長さん&アル様の側近をしていらっしゃる青年とご一緒しているのか、と言いますと、

「カイル、私はリヒト様についてゆくことになった、暫く瑠璃の世話をしている」

と言って、私をおいていってしまったのよしくしく。

「はいはいルリ、嘘泣きは止めて魔法に励んでくださいね？」

はあ、意外にカイルさんは毒舌だった。私は今、こうして魔法のおべんきよに励む健気な子、もう一度しくしく。するとカイルさんの元に鷹のような大きな鳥類が現れまして、吃驚している私を一瞥

すると鷹は帰って行きました。
そのまえに伝言だけを残して。

「すみません、ルリ……その急用が出来てしまつて……」
「あー、行つて下さい。子守なんて退屈でしょう?」

すまなさそうに呟くカイルさんの表情を見て、そんな所だろうと思つたよ。

「では、少し外します」

あの鷹かつこよかったなあ。上手く調教されていた気がする。いなあ。

カイルさんの心配そうな声をガン無視して、言った。

「いつてらっしゃいませ」

「………いつてきます」

ちよ、行くなんでも傷つくよ?その目はあ?

* * *

それにしても退屈である。

カイルさんが居ないとつまらないことこの上ない。

「暇だなあ……PSPとかないんですかねえ?」

ま、向こうの世界ではもっぱら読書でしたけど。この国娛樂すくなすぎんだろ。

よし、遊びに行こう。普段、自堕落なこの瑠璃様を動かすとは……さすが退屈のやろう、一枚上手だぜ！

と、いうことで…今村瑠璃、決してアル様に捨てられたわけではない16歳が王宮内を旅します。探さないでね？

「うーんと……私が行ったことがない場所といえば……」

王宮内は広すぎて何があるのかすら分らないし、私のような見習い（アル様の）が立ち入ってはいけない場所もあるかもしれない。リヒト様も最近はライ様（妻）ときやつきやつふふの新婚旅行から帰ってきて、らぶらぶピンクいオーラ全開ですしね。まじリア充滅亡しろ。

「中庭、図書塔、医務室、アル様のお部屋、大広間、リヒト様のお部屋、謁見の間、■■■のお部屋……あー、訓練場？とか行った事ないかもしれませんね」

瑠璃はそういうと、例のごとく長い長い廊下を歩き始めた——優雅に黒髪をなびかせて。

【さんじゅつきゅう】退屈は私を動かす（後書き）

更新が遅れてまして、本当にごめんなさい。

【よんじゅ】再来は遠いような気がして意外に早い（前書き）

更新しましたにございます（・ω・）

【よんじゅう】再来は遠いような気がして意外に早い

訓練場にて。

はう、やはり戦いに勤しむイケメンは麗しいですねえ。

瑠璃は、日焼けしていない片手を自らの頬に当ててうつとりと一人のイケメンを眺めていた。

浮気？いえいえ。アル様以上のイケメンなどこの世にいるわけがないでしょう（寧ろいたら殺■）。

リヒト様……あの人は人間じゃないように思われますので悪しからず。

「やあっ！」

ぼんやりと妄想という名の楽園に浸っていると、一際大きい声が響いてイケメン様が相手に向かっていくところでした。おお、白熱した戦い繰り広げていらっしやいますね。

「その女、ここは女兒禁制だぞ」

余りにも静かで素朴な声で、つい反応が遅れてしまいました。ヤバイヤバイ！何か言わなくては、不振に思われる。

「申し訳ありません……わたくしは今村と申すものでして、ベリアル・リユン又様の身のお世話をさせていただいております。今日はカイル・アルジャン二様から仰せつかって来たのですが……？して貴方の発言はカイル様の発言を覆すほどの効力をお持ちなのでしょうか？いえいえ疑っているわけではないんですの、ええ。た

だ何故私が女だからという理由でここから締め出されなければいけないのか甚だ疑問。ああ、なんて男尊女卑が激しい時代でしょうか、この頭でつかちが、と罵っても良いでしょうか？ああ、危ないからとかそういう理由で注意してくださったのなら素直にありがとうございます、と受けとっておきますわ。しかしカイル様の命に背くわけには参りません——分かっただけですか？」

弾丸とおくとはこの事を言う。

私に声をかけた、顔も背が高すぎて見れない男性を初めて見上げた。

いかにも軍人ゝみたいな顔のお方はあんぐりと口を開けてます。マヌケさんと呼んでいいですか。

「隊長から？隊長てロリコンだったのお！！？？シヨックう！」

（。D。；）こーんな顔して現れたのは、やけに色っぽいネエちゃんでした。

えええ、ここて女禁制じゃなかった？私の表情で何かを察したのか、ネエチャンが艶やかに微笑む。

「アタシ、男よ？」

ほーう。興味深い方が現れましたねえ。

瑠璃も日本にいてネカマさんは見たことありましたけれど、オカマさんはさすがに公衆の面前では見たことありませんでした。

「レクシ、話がこんがらがる。出来れば退出願いたい」

「あら？アタシが邪魔なお？ひどおい一緒に寝た仲ぢやない」

軍人さんより、一枚上手なネエチャン。

世の中にはこんなに完璧に女に成り切れる殿方がいたのね!?!と感動中の瑠璃さん。

「ん、よく見ると可愛い顔してんじゃない。黒髪も珍しいしー、てか見たことないわよアタシい」

んー、とキスされそうな程、身体を折って迫られた為、本能的に回避っと。

しかしこんなオカマ美人さん……素顔はどんなでしょう。

「失礼します。私、カイル様に会わないと……」

今更だけど、すみませんカイル様。

貴方は今、どこにいるのかも分かりませーん。

「本当に急ぎのようなのねえ?ま、どうでもいいわ。みんなあああ
!」

イキナリ大声で叫ばないでくれますか?お陰で無様にも肩を跳ね上げてしまいました。

しかし瑠璃さんは持ち前のスルースキルを生かして、探検の続きに出かけたのでした。

* * *

一人になると、考えることがたくさん泡のようにボコボコと沸い

てくる。

たとえば、ここに留まって起こるメリット・デメリットだとか。あちらの世界に帰れたとしたら……。もう未練なんてこれっぽっちもありませんが。

「本当にイ？」

おいやだ。一人になると幻聴が増えて……。

「あらこんにちは。零さんご機嫌麗しゅう？」

「おや、随分と物腰柔らかア……。学んだのかな？」

うるさいですね。ただこいつからはいろいろ特殊な情報を聞きだせると思ったのですよ。

だからここは友好的に接するべきでしょう？長年の感がそう告げています。

「何をおっしゃいますか？あら今日は普通のお召し物」

そう、奴は今日は燃えるような赤髪と同色のローブを着込んでいます。

暑くないのかしらん。涼しくなってきたとはいえ、フォンティーヌはまだまだ暖かい。

「うん……ボクは気に入ってたんだけどねエ？悪目立ちしちゃってさア」

ああ、そんなこと着る前に分かれよ。

学生服なんて珍妙なもん……着てるだけで怪しまれるわ。

「して、ボクがなんでここにいいのか聞かないのかイ？」

そんなこと聞かなくても分かる。

「不法侵入でしょう。どーせ」

「ご名答！クスクス」

あーあ、これだから嫌だよ。焦らないし、寧ろ笑ってるし。不気味だよ。

「ねエ……あれは治ったア？」

びくり、と身体が反応する。

嫌、治るわけねえですぜ？だってあれだよ、あれ、アル様は依然として瑠璃さんのこと認識してくれないし。

「声かけないと私がどこにいるか分かってくれないわ」

あー、やだよだ。

自我は持つべきじゃなかったんだよっばし。瑠璃さん人生のターニングポイントだったんじゃない？あの選択よあ。

「くく、愛しい人に見てもらえないなんて可哀相にイ……まあ、あれだよな」

——本当に愛されてるのかすら分からないけどな。

それ最大の精神攻撃ですよ。
瑠璃さん泣いちゃうから！

今村 瑠璃は、にこりと愛らしく笑った。痛む心を幾枚もの仮面で覆い、隠してまたいつものように笑った。

「あれエ……ここ泣くところじゃないかなア？」

零は嬉しそうに首をこてり、と傾けて消えた。

【よんじゅうち】ボクのは、君のじゃない（前書き）

寒いね、おかーさん

【よんじゅうち】ボクのは、君のじゃない

なんてことだ。

彼女が、消えてしまった。

どうして……あのこが。

清纯で清らかで、美しくて、可愛くて、強くて。

まるで、皆のほおっておけない妹のようだった■■が。

あの魔女の所為で——！

アイツがいなければ。

ボクたちの可愛い彼女は。

帰ってきて——…。

＋＋＋

「……うん、朝かよ」

おはようございます。

今村 瑠璃 16歳でございます。

さて昨日は零に会いましたが、大した情報は得られませんでした。
質問してないから、当たり前ですが。

零れる光で目が覚めた。

ここはどこだと思つて、魔王さまのお部屋のべつどるーむだとい
う事を思い出す。

モノクロ。

隣に体温はない。いつものことでありますゆえ……瑠璃さんはま
ったく悲しくない。ええ悲しくなんてない。

暫く、豪華なベッドの上でまどろんでいることにした。
時々、鳴く鳥の声がいやに眩しく耳に響いた。

「起きたか……」

いつもと違うのは――、

「ぽぽぽぽーんんん！」

びっくりしましたよ。

尋常じゃない驚きかたしちゃった

モノクロの世界の闇から現れたのは、わたしが会いたくて仕方な
かった、ひと。

「ア、ル」

心なしか声も奮えてる気がする。

てゆうか、ひゅーひゅーって喉から空気が漏れる。

あ、肺が……。

久しぶりに間近でみた、その端麗なお顔はいくらかやつれて見え
ました。

「鳴くな、瑠璃」

あ、あれえ？

漢字が違う、いやニュアンスが違う。

てゆうか。

あたし、泣いてた？

【よんじゅうち】ボクのは、君のじゃない（後書き）

あら、雪だわ（前書きと噛み合わない会話）

【よんじゅうに】暖かな灯を遠巻きに

ごきげんよう、紳士淑女の皆様。

皆様のアイドル、今村瑠璃（16）は浮気罪という冤罪によって

——ピンチです。

＋＋＋

事の発端はある■■の誕生日。

■■の恋人、**は疲れ果てて帰途に着きました。

いざ扉を開けようとする、中から恋人の迷惑げながらも**に聞かせたことのないような無邪気な声で掛け合っている声が聞こえてきたではありませんか。

は不安になりました。昔だったら考えられなかったであろう、感情が芽生えたことには驚きながらも、嬉しくもあったのですが、この状況下で素直に嬉しがるほど**は物事を樂觀視できる性格ではありませんでした。

そして、ふと自分は最近恋人に、顔さえも見せていないことに気づくのです。

これはまさか自分は、大変なポイントを逃してしまった、のか…
…と愕然と思いました。

**は愕然としたまま、扉から距離をとりました。

＋＋＋

「ア、アル？」

なぜこんなことになったのか。

瑠璃は、困惑の表情を隠せない。
隠さないのではなく、隠せない。

(どうしよう……どうしようどうしよう)

もう一度、瑠璃は確認する。

「なんで、浮気疑惑発生？」

「現状のデータ統計により、考えられ得る条件を満たしたからだ」

酷く抑揚のない声は、聞く人にとって恐怖しか煽らない。

ベリアルは、自分よりも遥かに小さなその儚く、脆い存在を見つめた。

「……………わからない、です」

悔しげに、唇を噛むのは心当たりがある証拠——ではないと思いたい。

瑠璃が、饒舌な口調でいまにも話し出すのではないかとベリアル

は息を詰めて待っていたが結局、瑠璃は何も言わないまま、沈黙した。

心の中では、何を言いたいか……お互い分からないままで。

「アル、確かにここ最近、カイルさん以外に接触した男はいました
が恋愛対象外です。ありえません絶対です！！！」

いつもにも増して、熱く語るところがまたベリアルさざなみの心に漣を立てる。

「そう、か」

「そうです、かつー！」

——閣下とはなんだ、閣下とは。

しかし不思議なことに、先ほどまでの苛立ちはすっかりとまでは
いかないが、消化できたと、ベリアルは一人息をついた。

＋＋＋

瑠璃は久しぶりにベリアルと共に、街に出掛けることにした。

なんでもベリアルにしか出来ぬ、使命が……時空に……大規模……な
……亀裂……瑠璃は話の半分も理解していない。

初めて、行ったのが何年も前に感じられるが、まだ半年も経って
いない。

街に来るのは三度目。

二度目は、誕生日の日に、自棄でやけににちゆくちゃした砂糖菓

子を大量購入したとき。

そうだ、そこで零に会った。

「……………」

「……………」

瑠璃は、ベリアルがいつも以上に無口なことを察して、魔王さまでも緊張することはあるんだなあ、と少し愉快的気分になってしまい小さく笑った。

「……………」 どうした」

途端、抑揚の少ない声が聞こえ、

「やあ、リユンヌ！」

と何やら若い男の声が前方から響く。

地味に人見知りな瑠璃はこそ、とベリアルの華奢な体躯に隠れる。

「どうした？瑠璃」

やや眉をひそめて、後ろに隠れる瑠璃を見つめる。

瑠璃は、これ以上アルの心労を増やしてはならん、と思うが……、

「人、怖い」

「お前、人見知りだったか……………」

（性格がコロコロ変わりますからね）
と瑠璃は心の中で笑った。

「おや？噂の『ベリアルの春の妖精さん』ではないかい……どうやら、歓迎されていないようだけれど」

握手しようとした手は空は切った。

少々、苦笑いしながら、手をポケットに突っ込む。

「リユンヌ、紹介してよ」

（それにしても……敬語使わない人も珍しいなあ）

興味津々な様子で、しかし後ろに隠れたまま、瑠璃は男を見つめた。

【よんじゅうにん】まち／そんなりゆう／やんきょうじや（前書き）

ごぶさたすぎて、話を忘れられてしまったかた……申し訳ありませんでした（＊・ω・。）

【よんじゅんちん】まち／＼そんぞう／＼ゆづ／＼やんちゃ／＼

お電話代わりまして。

今村瑠璃さんです。

街に出るのは、少し恐い。

なんてしおらしく思ってしまうのも、無理はないと思われます。

「瑠璃」

「ぎゃああああいあ！」

どこか遠くで魔王様の声が聞こえた気がしました。

いつになく、楽しいアルの声がどこか新鮮に聞こえましたとさ。

……あれ、死亡フラグ??

＋＋＋

三度目の街にて。

アルと敬語なしで会話する、少々馴れ馴れしい男性と出会う。

「私は、ケイト。 ケイト・クラマシードと申します」

にかり、と笑った彼、クラマシードさんは、野蛮なカンジはしな

かった。

ただ紳士的な雰囲気漂う。

それを見て、アル様が瞳をすがめたことなんて気付かなかった。

「瑠璃、コイツは同業者だ」

同業者……つまりは魔術師ですか？

「そうだよ、私はリユンヌと同じく魔術師だ。今から大変危険なオシゴトをしに」
『に向かいます」

『。』

なんと言ったのか分からなかった。

きつと翻訳出来なかったのだろう……そういう言葉もきつとあるはずだから。

それにしても最初の印象とは随分な変わりようだ。否、第一印象が悪くなってしまう人なのだろう。損な人だ。

ということよりもまず……。

——きけんなおしごと

クラマシードさんが言った、言葉が大変気になる。だけどまあ、そこはスルーの方向で。

アルが何も言わなかったのだから、アルにとっても、私にとっても危険なおでかけではないのだろう。

「そうなんです？なら行きましょ、アル様」

一応、人様の前では呼称は『アル様』だ。だって見習いだし。

「ああ、ついて来い。目立たないところで転移する。それから」
『 に向かい、仕事を完了させる。日暮れ前には帰城する」

簡潔にこれからの予定を並べ立てて、手を引くアルはかつこい。
やっぱりアルに敵う男なんて、いや生命体なんていない。

——のろけです。

＋＋＋

『 』 に向かう途中の空中にて。

「ぎゃああいあ！」

「瑠璃、煩い」

どこか楽しげな顔で怪鳥を操る、華奢な体躯の男。

ベリアル・リユンヌ。

少しでも洗脳魔法を間違えば、命はないこの空中で、嗤う絶世の
美貌を持った魔術師。

「瑠璃。私がいないと恐ろしいだろう？ なにもできないだろう」

嗤いながら、泣いているかのよう。

瑠璃は彼の、腕に抱き抱えられながら思った。彼が少しでも手を緩めれば、瑠璃の身体は風の中の塵のように、文字通り消えるだろう。

「ど、どうしたんですかかかか」

いくら瑠璃でも、一介の高校生。

怪鳥と一緒に“あいきゃんふらい”をしたことは流石になかった。いつもの冷静さをぶんなげて、どもりながら聞いたその顔は長い間、水に浸かっていたかのように真っ青だった。

それを見聞きして、隣で同じく怪鳥をマインド・コントロールしているクラマシードさんが笑った。

いきなり笑ったからびっくりして、心臓が止まりそうになった。

「リユンヌ、俺に嫉妬してんだよ……かわいいーい（笑）」

えーなになに嫉妬お？

いみわからん。

てゆか、ちよいとイラッと来ますね……なんでアンタがアルのこ
と分かるんですか。

「それはですねえ、私には‘えいそう’といふ得意技があるからな
んですよ」

「……………！？」

なんで考えてることが分かったの！？

‘えいそう’…影想、影の想い。

はあ、世の中には人知を越えたチカラがあるのですね。

「で、リユンヌを影想したら、視えたから。人見知りだと言っていたのにも関わらず、私と話し、自分一人の力で街の地面に立っているのを見てイラツと来たんだろうね」

すらすらとアルの心を読まないでいただきたいよ。
ウザい。

「酷い……子供に、ウザい、て」

泣きそう、泣きそう。

アルの可愛い一面を見て今日は収穫大だったわ、ヨホホホ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8374q/>

儚いと書いて瑠璃と読む

2011年12月19日13時33分発行